

日本アメリカンフットボール

89年の活動の記録

[1934 - 2022]



1934.11.29 日本で最初の公式試合のキックオフ (明治神宮外苑競技場)

この記録は日本で初めてアメリカンフットボールの公式試合が行われた
1934年(昭和9年)から現在までの日本のアメリカンフットボール
の活動の概略をまとめたものです。

(なお、「アメリカンフットボール」を単に「フットボール」と記述することがあります。)

2023年 2月

公益社団法人 日本アメリカンフットボール協会

活動 1 年目	1934年 (昭和 9年)	
我が国のフットボールの誕生。東京学生聯盟発足。最初の公式試合、およびリーグ戦を開催		
社 会	(1869年) (1874年) (1880年) (1902年) (1925年) (1933年) ・ 8月19日 ・ 11月 2日 ・ 12月26日"	(米・フットボール誕生の試合、プリンストン大-ラトガース大。サッカー式ルール) (米・フットボール誕生の試合、ハーバード大-マックギル大。ラグビー式ルール) (米・ウォルター・キャンプ氏の提唱で、スクリメージ、ダウン制を導入。現在の形へ) (米・第1回ローズボウル、ミシガン大-スタンフォード大) (ポール・ラッシュ博士、YMCA 再建の為、初来日。1926年、立教大教授に就任) (米・NFL 第1回選手権試合、シカゴ-ニューヨーク) ・ドイツ、国民投票によりヒトラーが総統に ・ベープ・ルース氏ら17名の米野球大リーグ選抜、来日 ・大日本東京野球倶楽部結成 (のちの読売巨人軍)
フ ツ ト ボ ー ル	・ 10月25日 ・ 10月28日 ・ 10月末 ・ 11月25日 ・ 11月29日 ・ 12月 1日 ・ 12月 8日 ・ 12月22日	・ 明大シグマ・ヌ・カップ-在日ハワイ二世の非公式試合 (立教大池袋G) ・ 東京学生アメリカン・フットボール聯盟設立 ・ 玉澤運動具店 (東京牛込)、国産初の防具完成。11月29日の最初の公式戦で使用 ・ 日本で最初の公式戦開催新聞記者発表 (丸の内アメリカンクラブ) ・ 日本で最初の公式戦、東京学生-YCAC 戦 (明治神宮外苑競技場) ・ 東京学生聯盟、シーズン制の採用 (公式試合は10~12月)・NCAA ルール準拠等決定 ・ 東京学生リーグ戦開幕、我が国最初のリーグ戦・明治-立教大開催 (立教大池袋 G) ・ 東京学生リーグ戦閉幕、明大が記念すべき年の優勝
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>1934年春頃から、ポール・ラッシュ博士 (立教大教授)、ジョージ・マーシャル氏 (立教大体育主事)、松本瀧蔵氏 (明大教授)、小川徳治氏 (立教大教授)、アレキサンダー・ジョージ氏 (アメリカ大使館付武官)、メレット・ブース氏 (アメリカ大使館付武官)、加納克亮氏 (朝日新聞記者)らが立教大に集まり我が国でのフットボール競技活動開始を協議した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●当時、明治時代にハワイ、米国本土に移住した日本人の夢は、子供を日本の大学で学ばせることであり、それを実現した日系2世が東京の大学に多く留学していた。これらのハワイからの日系2世を中心に日本人学生が加わりアメリカンフットボールのチームが早大、明大、立教大の3大学に誕生した。 ●10月28日、各大学関係者数十名が立教大に集まり、「東京学生アメリカン・フットボール聯盟」を結成した。聯盟事務所を豊島区池袋の立教大5号館とし、3大学の選手登録者数は66名、聯盟理事長にポール・ラッシュ博士、書記長に松本瀧蔵氏、書記に金子忠雄氏を選出した。 ●11月29日、聯盟発足記念試合として、明治神宮外苑競技場で横浜カントリー・アスレチック・クラブ (YCAC: 日本滞在の欧米人のスポーツ組織。現在も活動)と全東京学生選抜チーム (早大、明大、立教)の間で日本初の試合を開催 (観客: 約2万人)。14時45分からの開会式ではジョセフ・グルー米国大使 (ハーバード大フットボール部出身)が祝辞を述べ、15時に記念すべきキックオフ。第1Q、川原行雄氏 (早大)が我が国での最初のタッチダウンをあげ、以降も得点を重ね、全東京学生が26対0で初の試合を飾る。なお、この試合のプログラム、映像は日本協会HPで公開 : 「日本協会HP」→「殿堂・歴史」→「日本で初めてのアメリカンフットボール公式試合」。 ●3大学で開催された第一回東京学生リーグ戦はこの記念すべき試合の9日後の12月8日から3週間にわたり各校が対戦する3試合を実施。国内で最初となるリーグ戦公式試合は、立教大池袋グラウンドでの明大-立教大戦で、日系二世の多い明大が24-0で記念すべき試合を勝利した。続く2試合は、明大6-2早大 (明治神宮外苑競技場)、早大6-0立教大 (立教大池袋グラウンド)となり、ハワイでの経験者が多い明大が日本フットボール最初の年の優勝を飾った。 <p>最初の公式戦の開催に向けて、チームの編成、練習はもとより、装具の日本初の制作、グラウンドやゴールポストの準備、報道陣等関係者への競技紹介等、経験のない作業・準備を短期間で行わなければならなかったが、関係者の熱意、努力で、無事、日本のアメリカンフットボールが船出した。</p> <p>当時の活動記録 (戦前の活動) が、服部慎吾氏によってまとめられており、日本協会HPで公開 : 「日本協会HP」→「殿堂・歴史」→「戦前の活動の記録 (服部慎吾氏全記録)」</p>	

活動 2 年目	1935年 (昭和10年)
---------	---------------

全米蹴球団の来日。関東 5 大学へ。関西最初のチーム、関大が創部・初試合

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 1月 1日 ・ 3月 16日 ・ 12月 10日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米・第1回オレンジボウル、バックネル大－マイアミ大 ・ 米・第1回シュガーボウル、チューレン大－テンブル大 ・ ドイツ、ヴェルサイユ条約破棄・再軍備を宣言。10月21日、ドイツ、国際連盟を脱退 ・ 大阪野球倶楽部結成（のちの阪神タイガース） ・ NCAA、第1回ハインズマン賞授与。受賞者、ジェイ・パーワンガー氏（シカゴ大）
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 ・ 1月 13日 ・ 1月 29日 ・ 3月 19日 ・ 10月 19日 ・ 11月 28日 ・ 12月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 法大、慶大創部。東京学生聯盟加盟 5 チームとなる ・ 関大創部。関西で初の試合、明大－早大開催（甲子園南運動場） ・ 関大部発会式（大阪 YMCA） ・ 全米蹴球団来日、全国で 10 試合を実施 ・ 東京学生リーグ戦開幕、立教大－慶大戦（芝公園運動競技場）、日本で最初のナイター試合。以降、全試合ナイターで実施。11月24日：東京学生リーグ戦閉幕。明大 2 連覇 ・ 明大（優勝校）－YCAC 戦（明治神宮外苑競技場）、翌年以降も優勝校の対 YCAC 戦開催 ・ 関大初試合、対法大（甲子園南運動場）

誕生 2 年目、日本のフットボールは、この年、急テンポな活動を展開した。早くも、「全米蹴球団」が来日、日本チームとの試合を含め 10 試合を行い、本場米国のフットボールを披露した。

●前年のシーズンが終了した 1 月 13 日、当時関西地区の主競技場である甲子園南運動場で関西初のフットボール試合が、明大と早大の対戦で開催され、15,000 名の観客が観戦した。また同日、松葉徳三郎大阪 YMCA 体育主事の尽力で関西最初のチーム、関大が創部し大阪 YMCA で発会式を開催した。

●前年 11 月の我が国での最初の公式戦からわずか 4 か月後の 1935 年 3 月に南カリフォルニア大勢を主力とする「全米蹴球団」（役員 2 名、選手 33 名。うち全米オールスター選出の選手が 14 名。監督：A.L.マローニ－氏）が朝日新聞社の招聘で来日、東京、兵庫、福岡、名古屋で日米交流戦 3 試合（対明大 1 試合、対全日本 2 試合）、模範紅青戦（全米蹴球団を 2 分した試合）7 試合を行った。明大戦を 71-7、全日本戦を 73-6、46-0 で勝利した米国チームは桁違いの実力を見せた。全米蹴球団は、帰国時、使用していた最新防具を日本に遺し、それを参考に各チームは当時アイスホッケーの装具等を製造していた玉澤運動具店で改良された防具を制作、貴重な防具提供だった（当時の寄贈されたヘルメットは山梨県清里・清泉寮内「日本アメリカンフットボールの殿堂」で展示）。当時は航空便がなく、片道 2 週間余りの太平洋航路による移動だった。なお、来日米国代表中、A.L.マローニ－氏はじめ 7 名が 50 年後の 1985 年 11 月に第 9 回ミラージュボウルに合わせて再来日、当時の日本選手と再会した。

●かねてから活動の準備をしていた法大、慶大の二大学が創部し、東京学生聯盟に正式加盟、5 大学となった。秋季リーグ戦は、この 5 大学の総当たりにより試合数が一挙に増え、聯盟関係者・選手がグラウンド整備した東京市宮芝公園運動競技場を使用、10 試合全試合が新たに設置した照明設備の下でのナイターとして開催された。ナイター設備に慣れるため、開幕日の 10 月 19 日の前日 18 日夜、報道陣を招き全チームが練習を行った。当時、運動競技の公式戦を夜間に行うスポーツはなく、毎試合 19 時開始のフットボールは注目を集めた。このグラウンドはこの年、フットボール専用グラウンドとして使用され、開幕戦は 5,000 人の観客を集めた。リーグ戦は、接戦となった試合が多かったが、部員 32 名中 28 名を日系二世が占める明大が 3 勝 1 分（引分けは対立教大戦）、2 連覇を遂げた。早稲田は、立教大に勝利したものが、明大に敗れ 2 位、以下、立教大、法大、慶大の順だった。初参加の法大は、立教大に引分けるなど健闘した。

●関西初のフットボール部である関大が 12 月 1 日、甲子園南運動場に法大を迎え、関西地区大学の初試合を行った。また 12 月 15 日には慶大が来阪、やはり甲子園南運動場で関大の第 2 戦が開催された。関大にとっては貴重な試合経験だった。

この年の活動 (競技年度)

活動 3 年目	1936年 (昭和11年)
---------	---------------

競技者人口増加。全日本選抜、米国遠征で 2 試合。初の公式規則書を発行

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月26日 ・ 7月31日 ・ 8月 ・ 10月 8日 ・ 11月25日 ・ 11月30日 : ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 二・二六事件発生 ・ IOC、1940年夏季オリンピック、東京開催決定 ・ ベルリンオリンピックで前畑秀子氏、水泳 200M 平泳ぎで日本女性初の金メダル ・ 初のカラーニュース映画公開 ・ 日独防共協定締結 ・ ポール・ラッシュ博士、清泉寮建設計画発表 ・ AP 通信社、フットボール全米大学ランキング発表開始
--------	---	--

フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6月 ・ 9月 ・ 9月23日 ・ 10月24日 ・ 10月29日 ・ 11月23日 ・ 11月26日 ・ 12月 3日 ・ 12月9日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全日本選抜チーム、シーズン終了後の米国遠征計画を発表 ・ 東京学生米式蹴球聯盟に名称変更 ・ 日本で最初の公式規則書発行 (米 NCAA に準拠) ・ 東京学生リーグ戦開幕、明治-慶大 (芝公園運動競技場) ・ 早大-新聞記者団戦 (早稲田東伏見グラウンド) ・ 東京学生リーグ戦閉幕、明大、早大が 3 勝 1 敗で同率優勝 ・ 明大-YCAC 戦 (YCAC グラウンド) ・ 23 名の全日本選抜チーム、米国本土で 2 試合 (当時は船旅であり延べ 50 日間の遠征) ・ 早大 (米遠征留守チーム) - 米軍艦ゴールドスター号乗組員戦 (YCAC グラウンド)
----------------------------	--	---

この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ●活動 3 年目、「東京学生アメリカン・フットボール聯盟」が「東京学生米式蹴球聯盟」に改称。5 大学全体の選手登録者数は 141 名と 2 年前の連盟発足時から 2 倍以上の増加となった。うち 4 割強の 61 名が日系二世であった。 ●秋季リーグ戦は、前年同様 5 大学総当たりの 10 試合を芝公園運動競技場で開催。前年は全試合ナイターで開催したが、この年は 11 月 7 日までの 5 試合が 19 時半開始のナイター、11 月 9 日以降の 5 試合は 14 時半開始の昼間開催とした。リーグ戦は、早大が法大に、明大が早大に敗れ、ともに 1 敗となり早大、明大の同率両校優勝となった。明大は 3 年連続、早大は初の優勝だった。加盟 2 年目の法大は 2 勝 2 敗と健闘、3 位となった。4 位は立教大、5 位は慶大となったが、立教大は慶大に、慶大は法大に勝利し、力の均衡を感じさせるシーズンだった。 ●この年、我が国で初めての公式規則書が、東京学生米式蹴球連盟公式規則として発行された (現存、3 冊:国会議事堂へ納本、殿堂で展示、日本協会競技規則委員会保管)。初めての公式規則書は、米国 NCAA の 1935 年の公式規則と基本とし、NCAA の 1936 年の公式規則変更を補遺、日米で同期がとられた迅速な発行だった。この公式規則書には、連盟の活動、規約なども記載され、当時の活動全体をまとめた文書にもなっている。なお、この公式規則書の詳細は、日本協会 HP で紹介 : 「日本協会HP」→「殿堂・歴史」→「日本で初めての公式規則書」 ●リーグ戦終了後、23 名の全日本選抜遠征チームが 12 月 3 日出発、14 日間の船旅で初の米国本土遠征。前年来日した全米蹴球団の監督: A.L.マローニ-氏の尽力による遠征だった。全日本チームは、リーグ戦両校優勝の明大と早大の各 7 名を中心に選手 20 名、コーチの武田道郎氏、役員に加納克亮氏、川島次郎氏のを加え計 23 名の選手団を結成、選手は、立教大・安藤眉夫氏のみが日本人で他の選手は全員日系二世であった。一行は、船上で練習を重ね米本土に到着した翌 1937 年 1 月 3 日に南カリフォルニア高校選抜と対戦したが、善戦の末に 6 対 19 で敗北。帰途、ホノルルでハワイ優勝校のルーズベルト高校と対戦、0 対 0 の引分け、米国遠征 2 戦 1 敗 1 引分の結果となり、1 月 23 日帰国。競技開始 3 年度目での米国遠征は、国内の競技関係者に強い影響を与えるとともに、社会的にも大きな話題となった。 ●関西地区では、1937 年 1 月に関大が立教大を迎え、当時関西地区では最大級の施設、甲子園南運動場で対戦した。シーズン後に関東のチームが関西で唯一のチームの関大と対戦し、関西地区の活動を支援するのはこの頃の慣例だった。
------------------	--

活動 4 年目	1937年 (昭和12年)
---------	---------------

関西、初の関西チーム間の試合開催。関東大学リーグ戦後半を後楽園球場で開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 5月 1日 ・ 7月 7日 ・ 7月 23日 ・ 8月 13日 ・ 9月 11日 ・ 11月 6日 ・ 12月 13日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米・第1回コットンボウル、テキサスクリスチャン大-マーケット大 ・ 西宮球場開場 ・ 盧溝橋事件。日中戦争勃発へ ・ 明大八幡山運動場開設 ・ 第二次上海事変勃発 ・ 後楽園球場開場 ・ 日独伊防共協定成立 ・ 日本軍、南京占領
--------	--	---

フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 24日 ・ 2月 5日 ・ 4月 10日 ・ 秋 ・ 10月 2日 ・ 11月 20日 ・ 11月 25日 ・ 12月 4日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回関大-立教大定期戦(甲子園南運動場) ・ 米国遠征帰朝報告会(朝日新聞社講堂) ・ 初の関西チーム間の試合、関大-神戸外人クラブ戦(神戸東遊園地) ・ 東京学生米式蹴球聯盟会長に浅野良三氏就任 ・ 東京学生リーグ戦開幕、明治-慶大(多摩川オリンピック球場)。シーズン後半の11月5日より後楽園球場で開催 ・ 早慶戦、後楽園球場に観客10,000名。明大-神戸外人クラブ戦(甲子園南運動場) ・ 慶大-YCAC戦(YCACグラウンド) ・ 東京学生リーグ戦閉幕、早大が2年連続、初の単独優勝
----------------------------	--	--

こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>9月、空席だった東京学生米式蹴球聯盟の初代会長としてアサノセメント(株)の浅野良三氏が就任。同氏は、就任後、公私ともに活躍され活動困難な時代のフットボールの発展に貢献され、翌1938年1月の日本アメリカンフットボール協会設立の準備をされた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●東京学生リーグは、連盟が整備した芝公園運動競技場が陸上競技連盟公認競技場となり独占使用ができず、リーグ戦前半を多摩川河川敷のオリンピック球場、後半は後楽園球場を使用した(当初、明治神宮外苑競技場を予定していたが変更)。 ●1月に帰国したアメリカ遠征選手団の帰朝報告会が2月5日、朝日新聞社講堂で開催され、大きな注目を集めた。またハワイでの試合の入場料収入から、4月、各大学にそれぞれ年間予算の約2倍に相当する60円が配られ、部の運営に役立った。 ●この春、関西に関大に続くチームとして神戸外人クラブ(KR&AC)がチーム結成。4月10日、神戸東遊園地で初の関西チームの試合が両チームによって行われ、神戸外人クラブが34-0で関大を下し、記念すべき勝利を飾った。神戸外人クラブの参加に続き、年末には大学OB主体の関西フットボールクラブ(KFC)が結成され、関西の活動も活発化してきた。関大は、6月に慶大と対戦し初のTDを挙げ、10月には再度、慶大と、翌1938年1月には立教大と対戦、立教大戦では、6-6の引分けなど試合機会の増加とともに実力も向上した。 ●後楽園球場使用開始初日の10月15日は、全チームがユニフォームを着用し、入場式を開催した。後楽園球場ではバックネットからレフトスタンド方向にグラウンドを設けたが、ピッチャーズマウンドは小高く盛り上がったまま使用された。11月20日の後楽園球場で開催された早慶戦は、リーグ戦としては初めて観客数が10,000名を超えた。リーグ戦は、早大と明大がともに無失点全勝のまま最終戦を後楽園球場で対決。この試合も観客10,000人を越え、試合は最終Qまで接戦であったが、第4Qで強力ラインを活かした早大が一挙に19点を挙げ、26-6で早大が勝利、前年の同率優勝に続く2年連続、初の単独優勝を飾った。早大のインド兼任の下田正一コーチの相手チームの分析、状況判断の功績が大きかった。明大は2位。3位に対戦が引分けた立教大と慶大が並び、前年健闘した法大が5位となった。
--	---

念願の日本協会設立。初の東西選抜試合、観客 2.5 万人で開催。早くもラジオ中継放送

社
会

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 3月 ・ 4月 1日 ・ 7月 15日 ・ 7月 24日 ・ 10月 10日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 厚生省設置、スポーツを管轄。2月 29日：厚生省「体育国策の具体案」発表 ・ 1940年冬季オリンピック、札幌開催が決定 ・ 国家総動員法公布 ・ 1940年東京夏季、札幌冬季オリンピック開催返上 ・ 山梨・清泉寮落成 ・ 米国女子野球団 51名が来日 |
|---|---|

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 ・ 1月 22日 ・ 3月 21日 ・ 10月 10日 ・ 11月 19日 ・ 11月 24日 ・ 12月 11日 ・ 翌年 1月 1日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本米式蹴球協会設立（会長、浅野良三氏） ・ 第 2 回関大-立教大定期戦（甲子園南運動場） ・ 第 1 回東西選抜対抗戦（明治神宮外苑競技場） ・ 東京学生リーグ戦開幕、早大-法大（明治神宮外苑競技場） ・ 明大-立教大戦、初めてのラジオ中継（NHK）。続いて 12月 11日、明大-早大戦も ・ 立教大-YCAC 戦（YCAC グラウンド） ・ 東京学生リーグ戦閉幕、明大 4 回目の優勝（1 回の同率優勝を含む） ・ 第 2 回東西選抜対抗戦（明治神宮外苑競技場） |
|--|--|

こ
の
年
の
活
動

(競
技
年
度)

1 月末、全国的普及を目的にかねてから念願の「日本米式蹴球協会」を設立。初代会長は浅野良三氏が選出され、初代理事長はポール・ラッシュ博士が関東学生聯盟理事長と兼任となった。浅野良三氏は 1942 年まで 5 年間会長を務められた。理事長のポール・ラッシュ博士は、敵国人収容所に収容される 1941 年まで務められた。各チームとも、フットボール始動時に多くを占めた日系二世が卒業し、チームは日本生まれ、日本育ちの選手が多くなった。

●協会設立を記念し、また関東・関西の両地区交流を目的に第 1 回の東西選抜対抗戦（オールスター戦）を 3 月 21 日皇霊祭（春分の日）明治神宮外苑競技場で開催し、関東が 21-0 で関西を下した。この試合、第 2Q に立教大の中村修一選手がトライ・フォー・ポイントでドロップゴールの得点を挙げた。東西選抜対抗戦はこの年を皮切りに戦前 4 回開催され、そして戦後はライスボウルとしてつながった。戦前開催のこの試合の選抜は大学現役以外に、YCAC（関東）、神戸外人クラブなど外国人を含めた編成であり、社会人も含めた、そして国際色のある東西対抗であった。当日、第 1 試合として関東大学 OB-予科選抜の試合も開催された。試合には、25,000 人の観客を集め、日本フットボール普及の大きな第一歩となった。次回からこの東西対抗戦を毎年 1 月に開催することが決められた。

●東京学生リーグは、秋のリーグ戦の前半を明治神宮外苑競技場、後半を後楽園球場で開催することとなった。当時、野球以外のスポーツが後楽園球場を使用するのは、大変珍しい事だった。リーグ戦は、この年も明大、早大で優勝が争われ、明大が 26-0 で早大を下し、全試合無失点で 2 年ぶり 4 度目の優勝。以下、早大、慶大、法大、立教大の順となった。競技開始 5 年目、大学スポーツとしての人気が高まり、東京 6 大学野球、全国中学野球、相撲に続き、NHK により初のラジオ放送の試合中継がされた。関西では、交流戦で関大が法大に 55-8 で大勝し、創部以来初の勝利をあげた。

●日本協会の設立を記念して設立後の 1937 年 3 月に第 1 回が開催された東西選抜対抗戦は、第 2 回大会を当初の計画通りの年初に開催することとし、1939 年 1 月 1 日に明治神宮外苑競技場で開催した。グラウンドは霜融けによる泥濘状態の悪コンディションだった。入場式では、皇居・明治神宮の選擇が行われ、以降、皇居・明治神宮選擇は試合開始前の常となった。試合は関東選抜が大差で勝利した。

前年の盧溝橋事件を発端として中国軍との本格的な戦闘が始まり、この年には国家総動員法が公布、以降終戦まで続く戦時状況下・戦時下でのフットボール活動の始まりの年だった。そして我が国のフットボールの誕生に貢献した日系二世の卒業、およびハワイからの留学生の減少で、各大学とも日本人選手主体のチームとなっていた。日本での競技開始 5 年目のこの年 1938 年は、戦前で最もフットボール競技活動が盛んな年だったが、また以降の制約下での活動の始まりの年だった。

活動 6 年目	1939年 (昭和14年)	
戦時態勢の影響が強くなり、一部独自の競技規則へ		
社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月27日 ・ 5月12日 ・ 6月 7日 ・ 8月31～9月3日 ・ 9月 3日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ NHK、有線によるテレビ実験放送を公開。5月13日：無線によるテレビ実験放送を公開 ・ 満蒙国境で日本・ソ連軍が衝突（ノモンハン事件） ・ 満蒙開拓青少年義勇軍壮行会挙行（明治神宮外苑競技場） ・ 日満華交歓競技大会開催（満州国新京） ・ 英・仏・オーストリアがドイツに宣戦布告、第2次世界大戦勃発 ・ 米リデル社、プラスチック製ヘルメット完成
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月13日 ・ 5月27日 ・ 秋 ・ 10月 3日 ・ 10月29日 ・ 12月 9日 ・ 12月10日 ・ 翌年1月1日 ・ 翌年1月21日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回関大－立教大定期戦（甲子園南運動場） ・ 早大、慶大が京城（ソウル）へ遠征。早慶戦を開催 ・ 競技規則、日本化への変更（審判員への抗議禁止等） ・ 東京学生リーグ戦開幕、慶大－法大。全試合、後楽園球場で開催 ・ 第4回立教大－関大定期戦（後楽園球場） ・ 明大－YCAC戦（YCACグラウンド） ・ 東京学生リーグ戦閉幕、早大が3回目の優勝（1回の同率優勝を含む） ・ 第3回東西選抜対抗戦（花園ラグビー場） ・ 第1回4大学対抗戦、慶大－関大、明大－早大（甲子園南運動場）
この年の活動 (競技年度)	<p>日独伊三国同盟の締結、ノモンハン事件発生、9月にヨーロッパで第二次世界大戦が勃発、更には翌1940年開催予定の第15回オリンピック東京大会の開催返上の1938年の決定など、非常時の世の中となりスポーツ界全体が厳しい時代に突入した。このような世相を背景としてフットボール競技規則が日本化され、日本独自の蹴球を目指すこととなった。「審判への抗議の禁止」、他のスポーツではそのようなことはないとの理由で「タイムアウト時のフィールド内への飲料水の搬入の禁止」などが決められた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●4月、早大、慶大が、現地の両校卒業生や在留邦人の要請により、韓国併合で日本領となった京城（ソウル）に遠征、公開試合を開催した。両チームの引率は、1934年のわが国でのフットボール始動にも貢献した立教中体育主事アール・ファウラー氏が務め、韓国で初めてのアメリカンフットボールの試合を早大が12-2で慶大を下した。帰路、慶大は大阪で関大とも対戦した。 ●5月、立教大・関大の第3回定期戦が甲子園南運動場で開催、関大が27-0と立教大に大勝。関大は前年の法大戦勝利に続く2勝目を挙げ、着実に実力を上げてきた。 ●全試合後楽園球場を会場として10月3日に開催された東京学生リーグは、全10試合中平日開催が8試合となり観客数も減少、創部時の5カ年計画の最終年となる慶大が台頭してきたものの、結局、早大が3勝1分けの成績で1936年（明大と同率優勝）、1937年に続く3度目の優勝を遂げた。早大の1分けは慶大戦との0-0の試合であった。2位以下は、明大、慶大、法大、立教大の順であった。 ●この年の秋のシーズン中、1934年11月29日に日本で最初の公式試合で東京学生選抜と対戦したYCACは、対法大戦、対明大戦をYCACの横浜根岸グラウンドで、また後楽園球場で関東大学OBと対戦、YCACとの交流が盛んに行われた。一方関西では唯一のチーム関大が立教大、慶大が対戦するなど、リーグ戦終了後も忙しいシーズンであった。 ●1934年の競技開始とともに、関西地区における競技振興は日本のフットボール発展にとって大きな課題であり、日本協会はそのための施策を種々行ってきた。この年もシーズン最後として、第1回、第2回を明治神宮外苑競技場で開催した東西選抜対抗戦を、関西でのフットボールの普及を目指し、この年以降関東、関西で交互に開催することとし、第3回大会は1940年1月1日、初の関西開催として大軌花園ラグビー場（現花園ラグビー場）で行い、32-0で関東が3連勝を挙げた。 ●更に関西地区の普及促進を目的に1月21日、甲子園南運動場で4大学対抗戦として早大－明大、慶大－関大の2試合を開催し、関西地区の競技発展を図った。この4大学対抗戦は、以降、1942年10月17日西宮球場で開催された第4回まで続き、人気を集めた。 	

東西交流活発になるも、戦時下の影響強く、鎧球と改名。慶大初優勝。関西地区、2大学に

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月28日 ・ 4月 8日 ・ 6月 ・ 6月14日 ・ 9月27日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 敵性語追放の動き ・ 国民体力法公布 ・ 第1回東亜競技大会開催(5日から東京大会、13日から関西大会) ・ 独軍、パリに無血入城、仏政府がポルドーに移転。7月10日：独空軍、英本土空襲開始 ・ 日独伊三国軍事同盟成立 ・ 岸記念体育会館建設(神田駿河台)
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 ・ 6月 ・ 6月15,16日 ・ 秋 ・ 9月20日 ・ 9月26日 ・ 10月20日 ・ 12月 8日 ・ 12月22日 ・ 翌年1月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関西で2番目の大学、同志社大創部 ・ 関西初の大学チーム間の試合、関大-同志社大戦(関大グラウンド) ・ 皇紀2600年奉祝第1回6人制鎧球大会(明治神宮外苑競技場) ・ 日大加盟、東京学生リーグ、6大学に ・ 連盟、競技名を「鎧球」に変更、「日本鎧球協会」へ。競技で使用される用語を日本語化 ・ 東京学生リーグ戦、6大学参加し後樂園球場で開幕。試合記録の集計、発表を開始 ・ 第1回早大-関大定期戦(西宮球場) ・ 東京学生リーグ戦閉幕。慶大が初優勝 ・ 第2回4大学対抗戦、関大-明大、慶大-早大(甲子園南運動場) ・ 第4回東西選抜対抗戦(明治神宮外苑競技場)戦前、最後の東西対抗戦
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>欧州での戦火は広まり、日本国内も戦時色が徐々に日常生活に入ってきた。フットボールの諸先輩の召集も始まり、徴兵検査では甲種合格者で入隊する先輩たちが多かった。このように活動が徐々に困難になる状況にもかかわらず関係者の積極的な競技普及活動は続き、関東では日大が正式創部、関西にも待望の2大学目となる同志社大にフットボール部が誕生。日本協会では、更に中等学校(現、高校)への普及を目指し、日本独自のルールによる6人制米式蹴球(ライン、ボックス各3名)を考案、「紀元二千六百年奉祝6人制米蹴大会」の名称で6月に明治神宮外苑競技場で開催、全6大学、大学OBチーム、社会人のピクチャーも加え11チームが参加した。この6人制米式蹴球は、翌1941にも開催されたが、以降の年は開催できなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 秋季リーグ戦の開幕前に、協会は競技名称を、米式蹴球から防具のイメージを生かす「鎧球」に変更、「日本鎧球協会」とした。加えて競技で使用する用語も、フォワード・パスは、「前投」、ロング・パスは「長前投球」、ラインマンは「前衛」など、米語から日本語化された。この年3月ごろからの敵性語追放の社会の動きに対応したものだ。 ● 関東大学リーグは、日大の加盟で選手総数189名となり6校で開催された東京学生リーグは後樂園球場を使用、予想は早明の争いであったが、前年から躍進をしてきた守備を重視する慶大が全勝で初優勝をした。優勝した慶大は、創部時に策定した五カ年計画が見事に実を結んだ。一方、早明は、創部時から多かったハワイの日系二世留学生が、時局を反映し少数になったこともチーム力に影響した。このシーズンより東京学生連盟では、試合記録の集計、発表を開始した。 ● 関西地区では、1935年から関西で唯一のチームであった関大に次いで、この年、同志社大が創部。6月に関西の大学間で初の試合が開催され、関大が49-0で勝利した。 ● 10月に西宮球場で第1回東西大学定期戦として慶大-同志社大、早大-関大を開催した。またこの試合ら2か月後の12月に、この年1月に第1回大会を開催した東西4大学対抗戦の第2回大会を甲子園南運動場で関大-明大、慶大-同志社大のカードで開催、東西交流が活発に行われた。 ● 恒例の東西選抜対抗戦は第4回大会となり、1941年1月1日、明治神宮外苑競技場で開催され、関東が勝利、4連勝を遂げた。東西のフットボール興隆と発展に寄与し、多くの話題と観客を集めた東西選抜対抗戦は、この第4回が最後の大会となり、オールスター戦は、戦後の1948年1月18日の第1回ライスボウルに引き継がれた。 	

活動	8 年目	1941年 (昭和16年)
----	------	---------------

第2次世界大戦の影響が強まる中、関学創部し関西学生リーグ誕生。関大、初のリーグ戦を制す

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 2月 ・ 4月 1日 ・ 7月 1日 ・ 7月 11日 ・ 12月 8日 ・ 12月 24日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 映画館でニュース映画の上映義務化。12月27日：米映画の日本国内での上映禁止発表 ・ 瑞穂公園陸上競技場完成 ・ 国民学校令施行 ・ 米、世界初のテレビ放送開始 ・ 文部省、府県間の試合等の禁止（9月に一部緩和）、運動部は「学校報国団組織へ改組」 ・ 真珠湾攻撃、日米開戦。日本、戦争に突入 ・ 文部省主管「大日本学徒体育振興会」発足
--------	--	---

フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 11日 ・ 5月 31、6月 7日 ・ 6月 7日 ・ 9月 20日 ・ 10月 3日 ・ 10月 18日 ・ 11月 16日 ・ 11月 16日 ・ 12月 9日 ・ 翌年 1月 25日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関西で3番目、関学創部。5月25日：関学加盟記念試合、関学-同志社大（関学G） ・ 第2回関東6人制鑑球大会開催、一般・学生・中学の3部門（早大東伏見G） ・ 関西鑑球連盟結成記念試合、関大-同志社大、関学-関西地区OB（西宮球場） ・ 第1回関学-関大定期戦（関大G） ・ 関東大学リーグ戦開幕、慶大-立大（後楽園球場） ・ 初の関西学生リーグ開幕、関大-同志社大（甲子園南運動場） ・ 関東大学リーグ戦閉幕、明大5回目の優勝（1回の同率優勝を含む） ・ 関西学生リーグ閉幕、関大が記念すべき年の優勝 ・ ポール・ラッシュ博士、敵国人収容所に収容 ・ 第3回4大学対抗戦、明大-関大、慶大-関学（甲子園球場）
----------------------------	--	--

この年の活動 (競技年度)

国際情勢が風雲急を告げた年だった。夏の全国中学野球大会は中止され、学生スポーツの府県をまたがる合宿、遠征、試合が文部次官通達で禁止された。この通達は9月に緩和され、隣接県への異動は可となったものの、東西交流を進めてきたフットボール界の競技活動に大きな影響を与えた。東京学生連盟は「関東学生鑑球競技連盟」と名称を変更したが、ポール・ラッシュ理事長が東京・目黒の敵国人収容所に収容され、また1934年の競技開始から普及発展の核であった理事の小川徳治立教大教授が召集となり、連盟活動は大きな影響を受けた。理事長代行に立教大ラグビー部出身（主将）、朝日新聞記者として広く競技活動を報道、運営面でフットボールの活動に加わってきた加納克亮氏が就任した。

- 2月、関西に3番目の大学として関学が加盟した。部の名称は、当時、各大学の運動部で一般的な「報国団」の名称を入れた「関西学院大学報国団鑑球班」であった。
- 前年第1回大会を開催した6人制鑑球大会は2回目を開催、社会人チームとして前年のビクターに加え新たに三洋商会が参加した。
- 公式規則では、これまでフォワードパスはスクリメージ・ラインより5ヤード以上下がった地点から投げなければならなかったが、日本独自の規則としてこの制限を外した。この変更はその後の米国NCAAの変更を先取りした適用であった。
- 暗黒時代を迎えた日本フットボール界だが、あくなき前進は続き、関西では関西鑑球連盟の下で関西、同志社、関西学院の3大学に関西三大学OBクラブを加えた4チームで、待望の初リーグ戦を開催した。競技活動大学数は、関東で6大学、関西で3大学となり、これが戦争終了後まで続くことになる。
- リーグ戦では、関西地区では、歴史のある関大が記念すべき第1回リーグ戦の覇者となった。リーグ戦3試合は甲子園南運動場で開催され、関大26-0同志社大、関大12-0関学、関学13-12同志社大であった。また殆どの公式戦を後楽園球場で開催した関東地区では、明大が3年ぶり5度目の優勝を飾った。
- 翌1942年1月25日、文部次官通達の特例として第3回4大学対抗戦が開催され、戦後の甲子園ボウルに相当する東西のリーグの優勝校の対戦とし、明大と関大が対戦、明大が勝利した。
- 翌年1942年の年初、毎年元旦に開催し恒例だった東西選抜対抗戦は中止となったが、活動困難な中、文部次官通達の特例として翌年1942年1月25日に甲子園球場で第3回4大学鑑球大会2試合を開催した。戦後の甲子園ボウルに相当する東西のリーグ優勝校の対戦、明大-関大（優勝校の対戦）は明治が59-0で、慶大-関学（2位校の対戦）は慶大が20-0で勝利した。

この年12月に日本が真珠湾を攻撃、太平洋戦争へと突入し、武道関係を除く他のスポーツ競技活動が徐々に制約され、アメリカンフットボールも同様であった。

繰上げ卒業など、活動環境、厳しくなる。春季リーグ開催。秋は戦前最後の公式戦を開催

社会

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 3月21日 ・ 4月8日 ・ 4月18日 ・ 7月16日 ・ 11月22日 ・ 12月31日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 大日本武徳会結成 ・ 大日本体育協会改組、「大日本学徒体育振興会」発足。競技団体は解消し振興会の部会に ・ 空母発進の米陸軍機、東京・名古屋・神戸などを初空襲 ・ ホロコースト。ナチス、占領下の仏でユダヤ人 13,000 人を一斉検挙 ・ ドイツ、スターリングラードでソ連軍に包囲される ・ 大本営、ガダルカナル島撤退を決定 |
|---|---|

フットボール

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 ・ 4月18日 ・ 4月～5月 ・ 6月17日 ・ 10月 3日 ・ 10月10日 ・ 10月17日 ・ 10月31日 ・ 11月27日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 関東、関西で社会人（大学 OB 等）の鑑球倶楽部連盟設立 ・ 明治神宮外苑競技場での早大-慶大戦の試合中に東京空襲。グラウンドから一時退避 ・ 初の春季リーグ戦開催、関東、明大優勝。関西、関大優勝 ・ ポール・ラッシュ博士、浅間丸で離日、米国へ ・ 関東大学秋季リーグ戦開幕、早大-日大（明治神宮外苑競技場） ・ 関西学生秋季リーグ戦開幕、関大-同志社大（西宮球技場） ・ 第4回4大学対抗戦、早大-関大、慶大-同志社大（西宮球技場） ・ 関西学生秋季リーグ閉幕、関大2回目の優勝 ・ 関東大学秋季リーグ閉幕、明大6回目の優勝（1回の同率優勝を含む） |
|---|---|

この年の活動
(競技年度)

太平洋戦争が深刻化する状況となり、学生を徴兵するための繰り上げ卒業などで大学スポーツの継続がますます困難となった年であった。拘留されたポール・ラッシュ博士が最後の日米抑留者交換船・浅間丸で帰米。日本鑑球協会は一部組織替えと役員改選を行い、関東学生鑑球競技連盟の理事長には、1934年競技開始時から精力的に活動を推進した松本瀧蔵氏（明大教授）が就任した。競技活動を継続するために、関係者の努力が続いた年だった。

- 学制変更による繰上げ卒業の関係で、秋をシーズンとする競技は春季も開催することとなり、他の競技と同様、アメリカンフットボールも関東、関西の両地区で、この年初めて春季にリーグ戦を開催した。関東の春季リーグ戦は、明治神宮外苑競技場、後楽園、早大東伏見の会場を使用して開催された。その関東の春季リーグでは、5月16日の明治神宮外苑競技場で開催した早大-慶大戦の試合中に米国太平洋機動艦隊の飛行編隊からの初空襲を受け、選手、観客が観客席下に避難する事態となった。その後も6月13日まで13試合は開催されたが、春季シーズン最後の2試合を残して中止となった。
- 3大学で開催された関西の春季リーグは5月に開催され、関大が2勝で優勝。関学が同志社大を破り2位となった。公式戦として春季リーグを開催したのは、関東はこの年だけ、関西はこの年と戦後の1946年の2回のみである。
- 秋季リーグは関東では10月3日開幕し、明治神宮外苑競技場、早大東伏見グラウンドなどで開催され、開幕戦の明大が立教大0-0で引分けたが、その後全試合に勝利し4勝1分けで6度目の優勝（1回の同率優勝を含む）、2位は慶大となった。3位からは、早大、立教大、法大、日大となった。立教大は、日大戦でも0-0で引き分け、その後もあまりない「リーグ戦0-0の引分け2試合」の珍しいシーズンだった。3位からは、
- 関西の秋季リーグは10月10日に開幕、西宮球技場で開催され、関大が3連覇を果たした。春と異なり、2位は関学を破った同志社大となった。関東、関西ともこの年の秋季シーズンが戦前最後の秋季の公式戦となった。
- 競技活動に大変な困難を伴う時期であり、また府県間をまたがる移動が必要な試合は禁止されていたが、この年も例外として恒例の第4回4大学対抗戦を10月17日、西宮球技場で開催した。試合は慶大が59-0で同志社大を下し、早大が45-0で関大に勝利した。依然、関東、関西の力の差は大きかったが、関係者の努力で東西交流は継続された。この2試合が東西交流が密だった競技活動、戦前最後の東西交流戦となった。

活動 10 年目	1943年 (昭和18年)	
戦争激化、活動9年目で競技活動中断		
社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 2日 ・ 3月 2日 ・ 3月 29日 ・ 9月 23日 ・ 9月 24日 ・ 10月 16日 ・ 10月 21日 ・ 10月 31日 ・ 12月 10日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スターリングラード攻防戦でソ連軍にドイツ軍が降伏 ・ 敵性語追放により、スポーツに限らず全面的日本語化 ・ 文部省「戦時学徒体育訓練実施要項」通達 ・ 女子による勤労挺身隊の動員開始 ・ 学徒の体育大会を全面禁止 ・ 野球、出陣学徒壮行早慶戦開催（戸塚球場） ・ 学徒出陣壮行式（明治神宮外苑競技場） ・ 後楽園球場、場内鉄製椅子 18,000 脚供出 ・ 文部省、学童の疎開を促進
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月 23日 ・ 7月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本協会「フットボール活動の休止、海軍闘球の採用」を決定。アメリカンフットボールの存続を図る ・ 軍部命令により各競技の運動部は解散。日本フットボール、9年目にして活動休止
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>競技活動10年目を迎えた。本来は、その10年目を祝う年であった。しかしながら戦時下では、敵性スポーツのアメリカンフットボールの活動は困難な状況であり、関係者は競技の存続を図る施策の実施が精一杯であり、10周年記念行事は何一つできなかった。またスポーツ界全体の活動も活動も困難となり、柔剣道、相撲、野球および雪上総合戦技、障害物競走・土のう運搬競争などの戦技・国防競技などが行われるのみだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●各スポーツの名称が日本語化される時世、1943年3月、文部省は「戦時下学徒体育訓練要綱」で柔道、剣道、弓道等の戦技以外の運動全てを禁止した。 ●日本鑑球協会では5月23日、関東、関西の役員、主将、マネージャ等を東京に招集、今後の活動を協議、その結果、フットボール競技と各大学米式蹴部を存続させるため、戦況好転までフットボールを一時休止して海軍闘球（ラグビー、鑑球、サッカーの要素からなる集団競技）に転向することとし、学生の組織として海軍闘球連盟を設立した。 ●この会議では、今後の活動に関して次の6項目を定めた。 <ol style="list-style-type: none"> ①アメリカンフットボールと各大学の鑑球部をあくまで存続させるため戦局好転までフットボールは一時休止し、海軍闘球に転向すること。但し全面的に中止すると自然消滅のおそれがあるため、年に二ないし三回の試合を行う。 ②現役学生のみで海軍闘球連盟を設立 ③海軍闘球研究会を設立する ④海軍闘球を中学生及び実業団に普及 ⑤ルール改正を研究する ⑥試合を軍隊式に行う ●関西3大学は、6月中旬津航空隊に遠征、鑑球（アメリカンフットボール）の模範試合を行った後、初の闘球試合を行った。しかし7月、軍部命令により各大学運動部は解散させられ、以降、終戦までの2年間、全てのスポーツ、そしてスポーツ紙・誌は日本から姿を消した。 <p>アメリカンフットボールも1934年の誕生以来10年目にして活動中断となり、多くの卒業生、学生が戦場に向かった。卒業生に限らず、現役部員も軍の予備学生、幹部候補生に志願していった。</p>	

戦争激化、活動9年目で競技活動中断

社会

- ・ 2月 4日
 - ・ 2月 25日
 - ・ 5月 7日
 - ・ 8月 25日
 - ・ 9月 9日～11日:
 - ・ 10月 10日
 - ・ 11月 13日
 - ・ 12月 7日
- ・ 大学・高専での軍事教育全面強化
 - ・ 決戦非常措置要綱を閣議決定
 - ・ 疎開大相撲夏場所晴天 10日間興行
 - ・ 連合軍、パリ解放
 - ・ 甲子園、後楽園で日本野球総進軍優勝大会開催。以降、プロ野球活動休止
 - ・ 米機動部隊、沖縄本島を空襲
 - ・ 日本野球報国会がプロ野球休止声明
 - ・ 東海道沖で東南海地震発生 (M7.9)

フットボール

戦争激化に伴い、競技活動は中断された。

この年の活動
(競技年度)

日本フットボール復活。ポール・ラッシュ博士中心に再建活動始まる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月27日 ・ 3月10日 ・ 4月30日 ・ 8月 ・ 8月15日 ・ 8月30日 ・ 9月15日 ・ 10月 2日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アウシュヴィッツ強制収容所解放、2月4日：米英ソ、ヤルタ会談開始 ・ 米軍、東京を初空襲、4月1日：米軍、沖縄本島に上陸 ・ ドイツ総統ヒトラー、自殺 ・ 6日広島、9日長崎に原爆投下 ・ 日本、ポツダム宣言受諾を表明。日本の終戦 ・ 甲子園球場、進駐軍に接收、11月14日：後楽園球場、進駐軍に接收 ・ 明治神宮外苑競技場、進駐軍に接收。ナイルキニック競技場と改称 ・ 連合国総司令部を東京に設置
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 9月10日 ・ 秋 ・ 翌年1月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポール・ラッシュ博士、再来日 ・ 10月頃から、関西でチーム再建活動始まる。関東地区でも復活準備開始 ・ 米軍第1回ライスボウル、全在日米軍-全在韓米軍で開催
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>1945年8月15日に終戦を迎えた。1934年に活動を開始したアメリカンフットボールは、他の競技に比べ比較的「若いスポーツ」であり、OBなどの競技関係者も若く、殆どが戦地に出征していた。戦場で倒れたOBも多く、また社会の混乱もあり、消息不明のOBも多かった。</p> <p>このような状態の日本に、ポール・ラッシュ博士が総司令部陸軍中佐として9月に再び来日。1934年の競技活動開始の時と同様、戦後の活動再開の中心もポール・ラッシュ博士だった。</p> <p>ポール・ラッシュ博士は、直ちに連絡できる戦前の関係者、開戦時に日本に帰化した日系二世とともに、早速、フットボール復活に乗り出した。その結果、ポール・ラッシュ博士を中心に加納克亮理事長(朝日新聞社)、井上素行氏(早大)、島クレランス氏(立教大)、山本厚氏(慶大)、花岡惇氏(明大)らが中心となって関係者の組織化と再開への協議、復興への準備を行った。復活のための活動第一歩は、戦前のプレーヤー、関係者の消息把握、連絡先確認であったが、戦火で亡くなったOBも多かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 復活への活動は、不十分な連絡手段、行動困難な社会状況、また防具・装具類の消失等で大きな困難があった。しかし戦前の活動を担った関係者の連絡網は、徐々に作られていった。復活の第一歩は関西が先で、坪井義夫氏(関大)、井床國夫氏(関学)が中心に終戦3か月後の10月には、かつての選手(復員選手)への呼びかけが行われ、併せて米軍提供の防具、軍靴を改造したスパイク、千人針で補強したショルダーパット、ありあわせのユニフォームなどで不揃いながら段々と装具を整えていった。 ● さらに関西地区では駐留軍が終戦と共に接收した甲子園球場で米軍内の対抗試合を実施、米軍関西地区長官W・C・キーン少将の支援を受け、戦前フットボール活動したOBや新入部員がその観戦に招待され、活動復活の気運が高まった。この年後半から競技活動再開の活動が盛んになり、翌1946年3月の復活第1試合につながった。 ● 翌1946年1月1日、米軍はライスボウルを開催、第1回として在日米軍と在韓米軍のオールスター戦をナイルキニック競技場で開催した。在日米軍と在韓米軍とのオールスター戦は1948年第3回まで続き、第4回以降は在日米軍の陸、海、空、海兵隊のオールスター戦のトーナメント決勝となった。米軍ライスボウル等、公開された米軍間の試合は、日本人も観戦ができ、その時、その場は「アメリカ」となった。 <p>戦後、活動を再開した日本フットボールは、この年以降、米軍との交流、対戦が盛んに行われ、組織、戦術、技術等の面で日本のチームに大きな影響を与えた。</p>	

関西地区で、終戦7か月後に試合開催。関東地区でも11月に再開の試合。高校タッチフットボールも競技活動開始

社
会

- ・ 1月10日
 - ・ 3月6日
 - ・ 8月9日
 - ・ 8月15日
 - ・ 11月3日
 - ・ 12月21日
 - ・ 12月30日
- ・ 国際連合総会第1回開催
 - ・ 日本初のスポーツ専門紙、日刊スポーツ創刊
 - ・ 第1回国民体育大会夏季大会開幕（京阪神地区にて）
 - ・ 戦後初の全国中学校野球大会開幕。ポール・ラッシュ博士、開会式で祝辞
 - ・ 日本国憲法公布
 - ・ 昭和南海地震、和歌山県潮岬沖で発生（M8.0）
 - ・ 文部省、六三三四教育制度を発表

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 2月20日
 - ・ 3月19日
 - ・ 3月21日
 - ・ 4月21日～
 - ・ 6月29日
 - ・ 9月
 - ・ 10月12日
 - ・ 11月2日
 - ・ 11月18日
 - ・ 12月22日
 - ・ 12月28日
 - ・ 翌年1月18日
- ・ 関西米式蹴球連盟設立（会長：池尻浩三氏）
 - ・ 関東連盟、連盟創立委員会設立
 - ・ 戦後初の試合、関西地区OB-関西学生（西宮球技場）
 - ・ OBを含め、関西3大学で復活春季リーグ戦。全関大が優勝
 - ・ アメリカンフットボール関東連盟発足（会長：井上素行氏）
 - ・ 関西米式蹴球連盟、「関西フットボール連盟」に改称
 - ・ 関西リーグ開幕。同志社大優勝
 - ・ 第1回国民体育大会（京都）のオープン参加として全関東-全関西戦（西宮球技場）
 - ・ 関東大学リーグ、オープン戦開幕。慶大2勝
 - ・ 関東紅白戦開催。慶立法-早明日戦（ナイルキニック競技場）
 - ・ 中学（現高校）タッチフットボールの初試合、豊中中-池田中（西宮球技場）
 - ・ 全早大-全慶大戦（ナイルキニック競技場）

こ
の
年
の
活
動
（
競
技
年
度
）

戦後の復活2年目の動きとして、関西では、いち早く2月20日に関西米式蹴球連盟（同年9月に関西フットボール連盟と改称）を設立、3月21日には記念すべき戦後の最初の試合として関西OB対関西学生選抜の試合を開催、OBチームが勝利した。単独チームの対戦は、メンバー、装具などが不十分であり、先ずOB、現役の選抜チームの対戦であった。つづいて関西地区では4月に復活第1回春季リーグ戦をOBを加えた3大学で開催、全関大が戦前を通して4連覇を果たした。秋のシーズンは、同志社と関学がともに1勝1分けとなり、優勝決定戦を実施、同志社大が勝利し初の優勝を遂げた。

- 一方、出遅れていた関東では、この年3月に連盟設立委員会を組織化、6月に連盟が正式に発足した。戦後関東初の試合は、11月18日、立教大学体育の日の行事として、接収によりナイルキニック競技場と名前を変えた旧明治神宮外苑競技場で開催された立教大対法大の試合だった。続く関東大学リーグ戦は戦前から活動全6大学によるオープン戦4試合を、ナイルキニック競技場、東伏見、戸塚の各グラウンド開催し、慶大が2勝、早大と立教大が1勝を挙げた。
- 11月には、京都で開催された国民体育大会秋季大会にオープン競技としてフットボールも参加、全関東-全関西の試合が行われた。
- 12月23日には、競技普及を目的とし、関東紅白試合（慶立法-早明日）がナイルキニック競技場で開催され、翌1947年1月18日には全早慶戦を開催、両校応援団、多数の観客が観戦した。普及の一環としては、装具等の費用捻出のために、OBの親睦団体として組織化されたAFC（アメリカンフットボールクラブ）主催でダンスパーティが開催されるなど、遅れた関東地区の競技活動再開は急ピッチで進んだ。費用が掛かるフットボールでは、戦前、資金調達のため、各大学の部主催ダンスパーティが開催されたが、このダンスパーティによる資金調達は戦後しばらく続いた。
- またこの復活時期にピーター・岡田氏を中心とする駐留米軍の支援も受け、三隅珠一氏らの活動により池田中学、豊中中学、奈良中学の旧制中学（現高校）でタッチフットボール競技が早くも開始され、高校フットボール開始の年となった。最初の試合は、12月末、西宮球技場で豊中中と池田中で開催され、豊中中が記念すべき試合を勝利した。

活動 14 年目	1947年 (昭和22年)	
甲子園ボウル誕生、第1回開催を慶大が制す。ライスボウル開催を決定、第1回大会を1948年1月に開催		
社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月31日 ・ 4月2日 ・ 5月3日 ・ 11月22日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育基本法・学校教育法施行、六三三四制スタート ・ 大日本体育会、アマチュア規定施行 ・ 日本国憲法施行 ・ 東京ラグビー場竣工 (のちの秩父宮ラグビー場) ・ 学制改革：1947年～1950年頃は、旧制中学と新制高校が混在
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月22日 ・ 3月 ・ 3月11～14日 ・ 4月13日 ・ 4月13日 ・ 10月18日 ・ 11月16日 ・ ・ 翌年1月1日 ・ 翌年1月17日 ・ 翌年1月17日 ・ 翌年1月25日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 接收中の甲子園球場に使用許可 ・ 六三学制改革、中高の体育必須科目としてタッチフットボールを採用 ・ 関東連盟・文部省、高校教師向けタッチフットボール講習会開催 ・ 第1回関西中学タッチフットボール決勝戦、豊中中が池田中を下す (甲子園球場) ・ 第1回甲子園ボウル、慶大が同志社大を下し第1回覇者 ・ 関東連盟、関東地区戦後初の公式戦、明大-立教大 (早大東伏見グラウンド) ・ 関西連盟、京大が加盟し4大学でリーグ戦開幕 (西宮球技場) ・ 立教-同志社大定期戦開催 ・ 第2回甲子園ボウル、関大、明大を下し初優勝 ・ 復活東西大学選抜戦、第1回ライスボウル開催 (ナイルキニック競技場) ・ 日本フットボール協会設立 ・ 第1回明大-関学定期戦 (甲子園球場)
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ●この年、六三制の学制改革が決定し、前年、豊中中学と池田中学の対戦で我が国における最初の試合が行われたタッチフットボールが、中学、高校の体育必須科目に選定され、中・高体育教師を集めた講習会が関東、関西で開催された。高校フットボール拡大のきっかけとなった。 ●年初早々、日本フットボール連盟 (戦後から1960年までは、「アメリカン」が入らない、単に「日本フットボール連盟」の名称だった) と毎日新聞社は、毎年秋のシーズン後に関東と関西のそれぞれの勝者による大学選手権を「毎日甲子園ボウル」として開催することを決定した。これを受け、前年1946年度秋のオープン戦で好成績の慶大が関東代表に、秋のリーグ戦で優勝した同志社大が関西代表となり、4月13日に第1回甲子園ボウルとして対戦、慶大が初の大会の勝者となった。 ●10月18日、関東連盟は、戦後初の公式試合、明大-立教大を早大東伏見グラウンドで開催、この秋のシーズンは明大が戦後の初優勝を遂げた。2位からは、慶大、日大、早大、法大、立教大であった。関西秋季リーグは新加盟した京大を加え、4大学のリーグ戦を西宮球技場で開催、関大が優勝した。新加盟の京大は、同志社大に勝利し、同大、関学、京大が3すくみの共に2位となった。 ●1948年1月1日に開催された第2回甲子園ボウルは古豪同士の対戦となり2年生QB羽間平安選手の活躍で関大が6-0で明大を破り勝利、全国初制覇を遂げた。 ●戦前4回開催された東西選抜対抗戦は、新たに「米蹴東西学生オールスター対抗戦ライスボウル」の名称となり復活、その第1回大会が1948年1月17日にナイルキニック競技場にて開催された。開会式では、戦前我が国のフットボール誕生に中心的活動をされ、戦後では中断していたフットボールの再開に尽力されたポール・ラッシュ博士が「Here we are again」とフットボール競技の再開を宣言し、同博士の始球式で開始された。記念すべき第1回大会は33-12で関東が制した。またこの日をもって、日本フットボール協会が再結成され、日本協会理事長に服部慎吾氏が就任 (第2代) された。 ●なお大学戦に先立って「東西中等対抗タッチフットボール戦」として奈良中学 (のちの奈良高) - 都立六中 (のちの新宿高) の試合が行われた。 	

慶大、甲子園ボウルで2回目の優勝。関東でも高校の活動開始、高校日本一決定戦が始まる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 1月 4日 ・ 4月 7日 ・ 5月 15日 ・ 6月 28日 ・ 11月 13日 ・ 12月 10日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関税および貿易に関する一般協定 (GATT) 発効 ・ 日米国際電話再開 ・ 世界保健機関 (WHO) 設立 ・ 第一次中東戦争勃発 ・ 全国高等学校体育連盟 (高体連) 発足 ・ 大日本体育会が「日本体育協会」に改称 ・ 国際連合、世界人権宣言を採択
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 ・ 春 ・ 秋 ・ 11月 21日 ・ 翌年 1月 2日 ・ 翌年 1月 9日 ・ 翌年 1月 9日 ・ 翌年 1月 22日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文部省体育指導要領中央講習会でタッチフットボールが体育教材 ・ 関西、4大学に関西 OB、甲南高 (後の甲南大) を加えトーナメント開催 ・ 関東高校 6校によるトーナメント開催 ・ 法大神谷博選手、試合中の脳傷害で初の死亡事故 ・ 第2回ライスボウル、関東選抜が連覇 ・ 第1回東西高校タッチフットボール王座決定戦、池田高が麻布高を下す (甲子園球場) ・ 第3回甲子園ボウル、慶大が関東を下し2回目の優勝 ・ 名古屋パウル、関学-明大 (瑞穂競技場) ・ 初の実業団チーム、アンドリウス商会活動開始
この年の活動 (競技年度)	<p>終戦後の物資不足、経済活動低迷、社会的混乱が続くなか、関東では戦前使用していた芝公園運動競技場 (芝パーク競技場) は高射砲台座などが残り荒れた状態だったが、戦前の1935年のグラウンド整備と同様、協会加盟チーム部員が整備に協力し会場として使用再開、また関西では西宮球場を本拠地としてリーグ戦を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関西では、春季に加盟4大学に加え、関西 OB チーム、甲南高 (のちの甲南大) の6チームによるトーナメントを開催。関東では早大が初めてTフォーメーションを使用。関東リーグ戦11月23日の試合で、法大・神谷博選手が試合中のプレーが原因で死亡、日本フットボール界初の犠牲者となり、それを受け、健康管理の徹底の方針が決められた。 ● 秋のシーズンは、関東では慶大が5戦全勝で制し、関西は関大と関学がリーグ戦で引分け、ともに2勝1分けとなり両校優勝となった。甲子園ボウル出場を決める再戦は関大が制し、2年連続となる出場を決めた。なおこの年、関学は1982年の京大戦に敗れるまでの34年にわたるリーグ戦145連勝の始まりの年であった。 ● 慶大、関大の対決となった第3回甲子園ボウルは、1949年1月9日に開催され、FB 藤本武選手が負傷しながらも獅子奮迅の活躍、接戦を制し慶大2回目となる優勝を果たした。 ● 第2回ライスボウルは、甲子園ボウルの前週、1949年1月2日に開催、10,000名の観客を集め、関東が52-0で第1回大会に続く2連勝を果たした。 ● いち早く関西で開始された高校タッチフットボールは関東でも活動開始、麻布、慶応、九段、都立六高 (新宿高)、都立十高 (西高)、都立農高による第1回東京高校タッチフットボール大会が開催され、麻布高が優勝。甲子園ボウル時に開催された高校日本一決定試合は、第1回東西高等学校タッチフットボール王座決定戦として開催され、池田高が麻布高を破り、記念すべき初めての大会の栄冠を得た。 ● なおこの年、関東で11人制の我が国で初めての実業団チーム、アンドリウス商会 (横浜: 機械・自動車商社) が発足し、競技活動にオープン参加、AFC (1946年を参照) と対戦し0-19で敗戦した。(6人制は、戦前にビクター、三洋商会が活動)。 ● 翌1949年1月には、関東、関西以外の地区、名古屋で初の試合、名古屋パウルを開催、関学と明大が対戦した。 	

関学が関西リーグ初優勝と全国制覇、以降 33 年の連続関西制覇の開始。幻の全日本選手権計画

社会

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 4日 ・ 4月 25日 ・ 8月 ・ 9月 7日 ・ 10月 7日 ・ 11月 3日 ・ 11月 26日 ・ 11月 ・ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 米国を中心に北大西洋条約を調印。NATO 発足 ・ 1ドル=360 円の単一為替レート実施 ・ 水泳、古橋廣之進氏、全米選手権で 3 種目の世界新記録 ・ ドイツ連邦共和国 (西ドイツ) 発足 ・ ドイツ民主共和国 (東ドイツ) 発足。ドイツの東西分裂が確定 ・ 湯川秀樹博士、日本人初のノーベル賞受賞 ・ 日本プロ野球、2 リーグ分割を決定 ・ 後樂園競輪場開場 ・ 大日本体育会が「日本体育協会」に改称 |
|---|---|

フットボール

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 秋 ・ 11月 24日 ・ 12月 18日 ・ 翌年 1月 4日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 関西学生リーグ、関学優勝。以降 33 年間のリーグ優勝の始まり ・ 関学-米軍キャノニールズ戦 (福岡平和台球場) ・ 第 4 回甲子園ボウル、関学が慶大を下し初優勝 ・ 第 3 回ライスボウル、関西選抜初勝利 |
|---|--|

この年の活動 (競技年度)

- 日本フットボール誕生 15 年を記念して春に OB を加えたチーム編成とした「全日本選手権」との名称の試合が計画され、4 月から 5 月にその出場権をかけた関東、関西の地区内の対戦が行われた。6 チーム参加の関東は芝公園で開催し明大が、5 チーム参加の関西では西宮球技場で開催し関学が優勝を果たしたが、両校による全日本選手権は都合により中止となり、「全日本選手権」は実現できなかった。
- 秋季リーグ戦は、この頃から、米国の情報を基にこれまでの「力」に加えた「采配、技術、戦術」の重要性が認識され始め、各チームのコーチ陣の充実もあって熱のこもったシーズンとなった。米国からの情報は、この年から立教大監督に就任したドナルド・オークス氏、ともに日系 2 世の明大・花岡惇氏と法大・保科進氏など中心に伝えられた。これらのコーチ陣の持つ情報・知識は、オールスター戦の練習などを通じて他校にも伝播されていった。米国からの最新情報が徐々に日本にも入り始めた頃だった。
- 関西の秋季リーグは、関学が池田高、豊中高の高校タッチフットボール創世期のメンバーが育ち、練習量、チームワークも完璧でリーグ戦初優勝、以後 33 年に及ぶ関西の王座独占の最初の年だった。加盟 3 年目の京大が、関大、同志社大に勝利、関学戦にも 13-19 で敗れたものの健闘し 2 位となった。関東では、法大に敗れた慶大、慶大に敗れた早大がともに 4 勝 1 敗となったが、慶大が前年度順位の規定で甲子園出場となった。
- 第 4 回甲子園ボウルは、初めて米軍の審判員 4 人 (主審：コリンズ曹長) が担当、関学が開始直後に 13 点を挙げ、そのまま慶大を圧倒、初出場・初優勝を飾った。慶大は戦前・戦後を通じて関西の大学には無敗だったが、初めての敗戦を喫した。
- 甲子園ボウル前の 11 月、関学は福岡遠征、平和台陸上競技場返還記念・感謝祭記念として米軍福岡砲兵隊「キャノニールズ」と戦後、日本チーム初の日米親善試合を対戦した。
- 第 3 回ライスボウルは、ナイルキニック競技場に 5,000 名の観客を集め開催、関学を主体とした関西が息詰まる接戦を 19-13 で制し、劇的な勝利を挙げ、戦前、戦後を通じ 7 回の対戦で東西選抜対抗戦の初勝利をあげた。始球式は、元オールアメリカンのジム・ターレー中尉 (GHQ ヘッドコーチ) が行った。
- 甲子園ボウルで開催された第 2 回高校東西王座決定戦は、大学戦の慶大と共に出場した慶応高が奈良高を下し、初優勝を遂げた。

本格的 T 字型の出現。関学、対 T 体型を研究し 2 連覇。大阪市警、創部

社
会

・ 3月11日
・ 6月25日
・ 7月5日
・ 8月4日
・ 8月29日
・ 9月15日
・ 11月10日

・ 日本体育学会発足
・ 朝鮮戦争勃発
・ 後楽園球場、ナイター設備完成
・ 日米対抗水泳競技、15年ぶりの開催
・ IOC、日本のオリンピック参加を条件付き許可
・ 国連軍(米軍)、仁川上陸
・ NHK、テレビ実験局で定期実験放送開始

フ
ット
ボ
ール

・ 1月
・ 秋
・ 12月10日

・ 大阪市警視庁、チーム設立
・ 関東大学リーグ、早大、立教大が T 体型を本格的採用
・ 第 5 回甲子園ボウル、関学が 4 回目出場の慶大を下し 2 連覇

この年の活動
(競技年度)

日本フットボールに本格的 T フォーメーション (T 体型) が登場した記念の年であった。スピードとタイミングを重視する近代 T は、本場米国では、1940 年頃から普及しはじめていたが、日本への伝播は、戦争等の影響で約 10 年遅れた。この年の少し前より米国の様々な情報が国内にも伝えられ、T 体型の登場は、その結果であった。

- この年 1 月に大阪市警視庁(現大阪府警)が部員 50 名で関西初の社会人チームを設立した。大阪市警視庁は大学経験者も集め活動を開始、チーム結成 1 年目にはその記念試合を 1951 年 1 月に開催、大阪在住の大学 OB チーム・全大阪と対戦し、0-6 で敗れたが接戦を展開した。大阪市警視庁は、その後も関西在住の大学 OB チーム、在日米軍チームなどと対戦し、その活動は 1958 年まで続いた。
- 関東大学リーグは試合会場を芝生鮮やかな後楽園競輪場内のフィールドに移し開催された。競輪場は自転車走路のバンクがありスタンドが遠くなるが、バンクが傾斜しているため、全観客席が高い位置にあり、その分、見やすかった。前年度採用した早大に続いて立教大が近代 T 体型を採用、2 年目となるオクス監督の指導の下、スピードのあるプレーを展開した。リーグ戦はウイング体型の慶大が優勝の呼び声が高かった早大戦との全勝対決を 13-12 の接戦で制し、3 連覇を遂げた。立教大は、明大と引分け、明大と共に 3 位となった。
- 一方関西では、同志社大が T 体型を採用したが、ウイング体型の関学が、春に T 体型の早大に大敗した経験を基に研究した対 T 体型が効果をあげ同志社大戦を 25-13 で勝利、他の関大戦、京大戦には快勝し 3 戦全勝優勝を遂げた。
- 2 年連続の関学と慶大の対戦となった第 5 回甲子園ボウルは、強風が吹き気温も低いコンディションで開催され、慶大の経験と関学の若さの勝負となった。第 3Q 終了時に関学 7-6 慶大の大接戦を展開、T 体型も使用した慶大に大型ラインの井床由夫選手を中心としたラインの奮闘で関学が第 4Q に 2TD を挙げ慶大を突き放し 20-6 と快勝、甲子園ボウル初の 2 年連続優勝となった。慶大は T 体型も採用したが、この年の春に早大の T 体型に敗れた関学が、その後、対 T 体型を研究、その成果が実った。
- 翌年 1 月 3 日、雲一つない正月日和のナイルキニク競技場で観衆 7,000 人を集め開催された第 4 回ライスボウルでは、関東の T 体型対関西のウイングバック体型の対決となった。関東のキックで始まった試合は、そのキックを関東側がリカバー。これで得られた攻撃権の第 1 プレーを、早大、立教大の T 体型採用チームで構成した攻撃陣がダブルリバー・パスで TD を挙げ先制、以降も関東が変化とスピードに富む T 攻撃の威力を見せ 27-6 と完勝、前年の雪辱を遂げた。
- 甲子園ボウルの日に開催された第 3 回高校王座決定戦は、池田高が 2 年連続出場の慶応高を 15-6 で破り 2 回目の優勝を遂げた。またライスボウルと同時に開催された初めての関東、関西の高校選抜チームの対戦は慶応高主体の関東が、主に池田高、奈良高、関学高の選手からなる関西に 47-0 の大差で勝利した。

T 体型の立教大、初の甲子園ボウル制覇。近代フットボールの幕開け。神戸ボウル誕生

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 4日 ・ 4月 19日 ・ 5月 8日 ・ 5月 13日 ・ 6月 21日 ・ 7月 16日 ・ 9月 8日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回アジア大会開催 (ニューデリー) ・ ボストンマラソン、日本初参加の田中茂樹氏優勝 ・ IOC、日本の再加盟を決定 ・ ラジオ体操復活 ・ 日本のユネスコ正式加盟承認 ・ 日米陸上競技大会 (ナイルキニック競技場) ・ 日本、連合国 48 か国との講和条約調印、また米国との安全保障条約締結
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 ・ 12月 9日 ・ 12月 16日 ・ 翌年 1月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回長浜ボウル (のちの長浜ひょうたんボウル) 開催 ・ 第6回甲子園ボウル、立教大が関学を下し初優勝。NHK、毎日放送、朝日放送がラジオ中継 ・ 戦後初の全日本チーム、全日本学生-米軍京都キャンプ戦 (西京極運動場) ・ 第1回神戸ボウル開催 (全星稜高-全兵庫高)
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 3月、甲子園ボウル、ライスボウルに続く我が国 3 番目のボウルゲーム「長浜ひょうたんボウル」の第 1 回大会が滋賀県連盟吉川太逸氏を中心に長浜北高グラウンドで開催され、中学は長浜南中、高校は彦根東高が優勝した。 ● 関東では前年同様、後楽園競輪場を使用し 9月 29日開幕、監督となって 3年目のオクス監督によって磨き上げられた T 体型による攻撃で立教大が関東大学リーグで全勝優勝を遂げた。1934年活動開始の日本のフットボール 1 期生立教大は、戦前・戦後を通じて初の関東大学リーグ制覇だった。 ● 関西では 3年前 1948年の同志社大戦の敗戦から以降無敗 9連勝 (1949年関大戦の引分けが有) でシーズンを迎え総合力が充実した関学が、この年も危なげなくリーグ戦を全勝で飾り優勝した。 ● 第6回甲子園ボウルは、T 体型対シングルウィングの対決となり、立教大は QB の野村正憲選手、関学の大型 FB 高橋治夫選手の活躍で接戦となったが、終盤の関学の猛追をゴール前 3 ヤードで抑えた立教大が初出場で全国制覇、関学の 3 連覇を阻んだ。立教大は T 字型の採用、ツープラトン制、スポッターの使用等、新しい戦術を活用、他のチームへも影響を与え近代フットボール時代の幕開けとなった。またこの回の甲子園ボウルでは、NHK、朝日放送、毎日放送の 3 局がラジオ中継を行った。 ● 甲子園ボウルの一週間後、接收解除の京都西京極運動場でその記念試合として、戦前・戦後を通じて初めての関西を含めた全日本チームが編成され、米軍京都キャンプ選抜と親善試合を行い、再々逆転で全日本が 18-13 で勝利した。戦後直ちに日本国内で米軍内の競技活動を始めた米軍は、この頃より日本チームと対戦することが多くなり、1950年代から 1970年代まで、日米の交流が盛んに行われた。 ● 翌年 1月 5日の第5回ライスボウルは「復活第5回東西学生オールスター戦」と銘打って、接收解除され名称が「ナイルキニック競技場」から従来の名称に戻った「明治神宮外苑競技場」で開催、東西の T 体型の対決となったが、関東が勝利、2年連続 4 勝目を挙げた。この頃のライスボウルは「復活」の名称の通り、戦前 4 回開催された「東西対抗戦の後継の試合」、との認識が高かった。 ● 甲子園ボウルで開催された全国高校タッチフットボールは、中等部活動を創立したメンバーが主力の関学高が慶応高を破り初優勝を飾った。また新制中学対象の第1回大会が開催された関西ジュニア・タッチフットボール大会の決勝も同時に開催され、長浜南中が 13-0 で関学中を下した。 ● 年が明けた 1952年 1月 1日関西地区で学生、社会人が出場する神戸ボウルが誕生、第1回大会は、全星稜高-全兵庫高の対戦で開催された。その後、神戸ボウルはこの第1回大会のように、ユニークな対戦カードの試合が展開された。 	

立教大、連覇。明治神宮競技場返還、記念試合開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月28日 ・ 3月20日 ・ 3月31日 ・ 4月28日 ・ 5月19日 ・ 10月14日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日米行政協定調印 ・ 米、日本との平和条約を批准 ・ 明治神宮外苑競技場、講和条約発効前に進駐軍から接收解除 ・ サンフランシスコ講和条約発効、連合軍司令部活動終了 ・ 白井義男氏、ボクシング世界フライ級王座に ・ 国際連合、ニューヨークの本部ビルの利用開始
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 春 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ナイルキニック競技場、日本返還。記念試合として、その後、定期戦として続く大学の試合を開催 ・ 1936年の発行に続き2冊目となる公式規則書「公式フットボール競技規則書」発行
この年の活動 (競技年度)	<p>前年の日米講和条約に基づき、ナイルキニック競技場が米軍より返還され、名称も以前の明治神宮外苑競技場に戻り、それを記念し、春、東西の大学の対戦が行われた。この対戦は定期戦を主としたもので、立教大－同志社大、早大－関大、法大－関大、関学－明大の各試合が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東では、返還された明治神宮外苑競技場を3年ぶりに主会場に使用。T体型とともにオクラホマ5-2体型の守備、ツープラトン、キッキング戦術の重視と次々に近代フットボールを充実した立教大が洗練された攻守で、危なげなく各試合に勝利し、リーグ制覇。ユニフォームもこの年から白色を使用。法大は、再建5か年計画2年目を迎え、米国の情報、技術をいち早く取り入れた保科進監督の下でリーグ2位の躍進を遂げた。立教大HB中澤貞夫氏が、2年連続の関東大学リーグ最優秀選手に選ばれた。 ● 関西では厚いバックス陣で伝統のウイングバック体型に加えスプリットTも採用した関学が、この年も危なげなくリーグ戦で関大、同志社大を零封し優勝、関西学生リーグ戦連勝を続けた。同志社大もT体型を採用、リーグ2位となった。 ● 第7回甲子園ボウルは、2年連続、立教大－関学の対戦となったが、立教大が終始主導権を握り、関学を破り2連覇を遂げた。立教大は、神父服姿で指揮を執るオクス監督の下、練られた戦術、絶妙なタイミングとスピード、正確で粘り強いダウンフィールド・ブロックで近代フットボールを展開、黄金期を築いた。この試合では、1932年ロスアンジェルス五輪・三段跳金メダリスト、南部忠平氏が開会の挨拶を行った。 ● 第6回ライスボウルは絶好の試合日和となり、6,000名の観客を集め開催。前年同様、関東、関西両チームのT体型対決となったが、関東が43-0で圧勝。完封勝ちは、第2回大会以来であった。この試合で増田守邦選手(法大)が戦後初のフィールドゴールを決めた。また同日開催され、当時、ジュニア・ライスボウルと呼ばれていた東西高校タッチフットボール戦は、関学高主体の関西が大学戦とは逆に44-0と完封勝利した。 ● 甲子園ボウルで開催された高校タッチフットボールは、都立西高を関学高が破り2年連続優勝を果たし、連勝記録を24とした。 ● 戦前1936年に最初に発行された公式規則書は、この年2回目の発行として、関東、関西の委員で編成する競技制定委員会(沖健吉委員長、委員7名)の下でNCAA1949年版を基に、戦後初めての改訂を行い日本フットボール協会として作成、この年より適用した。規則書には、従来の競技活動の経緯を記した「諸言」とともに、その後の公式規則書にも掲載された「フットボール綱領」が初めて掲載され、チーム、選手に対するその後の活動の一大指針となった。 	

活動 20 年目	1953年 (昭和28年)	
T字型普及。関西学院、中学、高校、大学がそれぞれ全国制覇		
社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月15日 ・ 2月 1日 ・ 4月12日 ・ 5月29日 ・ 6月25日 ・ 7月27日 ・ 8月28日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早川電機、国産初のテレビ発売 ・ NHK、テレビ本放送開始 (参考：1925年7月：NHKラジオ本放送開始) ・ NHK、東京六大学野球の入場式と開幕戦をテレビ中継 (日本初のテレビスポーツ中継) ・ エドモンド・ヒラリー氏とテンジン・ノルゲイ氏、エベレスト初登頂 ・ 昭和28年西日本水害 ・ 朝鮮戦争休戦協定 ・ 日本初の民間テレビ局・日本テレビ放送網、本放送開始
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ 4月29日 ・ 春 ・ 秋 ・ 秋 ・ 翌年1月1日 ・ 翌年1月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手製フェイスガード使用チームが増加 ・ 第1回早大-慶大定期戦 (明治神宮外苑競技場) ・ 第1回慶応高-関学高定期戦 (高校、最初の定期戦) ・ 関西学生リーグ、立命館大加盟で5校に ・ 関西学院、中学・高校・大学がそれぞれ優勝 ・ 第7回ライスボウル、米軍第8回ライスボウルと共同開催 (明治神宮外苑競技場) ・ 第1回正月ボウル開催 (長浜南中-長浜西中)
この年の活動 (競技年度)	<p>競技活動20年目を迎えた。戦争による中断、困難な競技活動の時期があったが、関係者の努力により、徐々に復興しつつある時期だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●3~4年前から徐々に各チームに取り入れられたT体型が普及、殆どのチームがこの体型を採用した年となった。近代的手法、戦術にも各大学が取りくみ、装具関係では、2年ほど前から立教大が使用してきた手製のフェイスガードが各チームに普及、その他の装備面、技術面、戦略面も米軍チーム等を通じて徐々に充実してきた。 ●この年、関西学生リーグでは、5番目のチームとして立命館大が関西地区で6年ぶりに新加盟。伝統のシングルウイングからT体型に変えた関学は、大量新入部員を迎え井床國夫監督の下、いずれの試合も失点0の完封で優勝、リーグ戦5連覇を果たす。同志社大が関学に健闘したが0-15で敗戦、2位となった。関学は、シーズン半ばの10月3日、明治神宮外苑競技場で西日本水害地域救済基金募集日米親善試合として極東空軍と慈善試合を行った。 ●関東は、立教大が、オークス監督が帰米、有力選手の卒業があったものの近代戦法が群を抜いており、また守備も安定、5試合を危なげなく勝利しリーグ戦3連覇の優勝。2位は1敗の慶大だった。 ●第8回甲子園ボウルは、3年連続の関学-立教大の対戦となったが、前半、関学が1TDを挙げリード、後半開始直後、立教大が追いつき7-7の同点としたが、その後関学ラインが健闘、19-7で立教大の3連覇を阻み3年ぶり、3回目の優勝を遂げた。一方、立教大は公式戦3年間無敗にピリオドが打たれた。 ●第7回ライスボウルは米軍の第8回 RICEBOWL (在日米軍海兵隊-同空軍) と共同で開催 (米軍は既に1946年から米軍内の選抜戦ライスボウルを開催していた)、好天下、日米の観客15,000人を集めた。日本の関東、関西の大学選抜戦は、前半、関西が関東のミスから先制したが、後半、立教勢を中心に3TDを挙げ逆転。明大花岡惇総監督が好采配、関西の5-3チャージング守備の裏をかき、20-7で関東が4連覇を果たした。 ●高校の第6回東西高校タッチフットボール王座決定戦は、関学高が麻布高を破り3連覇を達成、連勝記録を58連勝とした。1949年創部の関学中も、新設された中学大会で優勝、関西学院は中学、高校、大学ともそれぞれ全国優勝を果たし、この年、関学フットボール一貫教育体制が見事に開花した。 ●この年から桑原梓氏が日本協会理事長 (第3代) に就任、1955年まで務められた。 	

活動 20 周年記念として協会旗制定、西宮ボウル誕生。全国高校タッチフットボール大会の開始

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月23日 ・ 2月 ・ 4月14日 ・ 8月5日 ・ 9月26日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米 NBC が世界初となるカラーテレビの本放送開始 ・ 日本航空、サンフランシスコに第 1 便 ・ 世界卓球選手権で荻村伊知朗氏、男子シングルスで優勝 ・ 日本女子体育連盟結成 ・ 台風 15 号による洞爺丸事故
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月28日 ・ 9月15日 ・ 11月25日 ・ 12月27日 ・ 翌年1月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本フットボール 20 周年記念、日本協会旗制定 (青地に 11 の星)。記念東西対抗 - 現役戦、OB 戦開催 (後楽園球場) ・ 日本フットボール 20 周年記念、西宮ボウル創設 (西宮球場) ・ 日本フットボール 20 周年記念、日本選抜-極東米軍 (明治神宮外苑競技場) ・ 第 1 回全国高校タッチフットボール選手権、関学高が日吉ヶ丘高を下す (藤井寺球場) ・ 日本アメリカンフットボール審判協会設立 ・ 第 8 回ライスボウル、米軍第 9 回ライスボウルと共同開催で観客 4 万人
1 つ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>「日本フットボール 10 年」は戦時中だったため記念行事は全く開催できなかったが、この年、開始 20 年を迎え協会各組織は各地で記念行事を開催。5月28日に後楽園球場で 20 周年記念ナイターとして関東、関西の学生現役戦、および OB 戦が開催され、同時に青地にアメリカンフットボールの「ア」を当時の攻撃体型から 11 の星で表した日本協会旗を制定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●また同じく 20 周年を記念して関西初の夜間試合西宮ボウルが、現役、OB 混成チームの全関東、全関西の試合として 9月16日に開催され、全関西が第 1 回大会を制した。西宮ボウルは翌年より 5~6 月に開催し、西宮球場閉場となる 2002 年の第 48 回大会まで続き、フットボール界の初夏の催しとなった。 ●更に、記念事業の締めくくりとして 11月25日、明治神宮外苑競技場で全日本 (関東選抜) - 極東米空軍のチャリティ試合を開催し、20 周年を多くのイベントで祝った。20 周年の様々なイベントの開催で 1954 年は、戦後の「再建」の活動から、一段飛躍する記念の年だった。 ●関東では秋季リーグ戦を後楽園球場を使用した 1 日を除き、すべての試合を明治神宮外苑競技場で土日で開催した。多くのスポーツがある中で、スポーツの秋の休日、当時、国内最高級施設で開催した。リーグ戦はパス攻撃を取り入れた立教大が 4 連覇、他の 5 大学の対戦は、近年の実力接近を反映し接戦が多かった。 ●関西では重量ラインを持つ関大が健闘したが、関学が対関大戦に圧勝、関学が 6 連覇を果たした。ただ関学の 1952 年から 2 年間続けてきたリーグ戦無失点記録は関大、同志社大が得点、途絶えた。 ●4 年連続で関学 - 立教大の対戦となった第 9 回甲子園ボウルは、大会初の雨中戦となり、関学が逆転に次ぐ逆転の接戦を制し 2 連覇、4 度目の日本一となった。 ●高校では、甲子園ボウルと同時開催の東西王座決定戦とは別に、東西上位校からなるトーナメント戦として全国高校タッチフットボール大会をこの年より開始した。その第 1 回大会は藤井寺球場で開催、関学高が日吉ヶ丘高を下し初優勝を遂げた。 ●戦後、在日米軍の各種のボウルゲームはフットボールの興隆に大きな影響を与えてきたが、この年の第 8 回ライスボウルは、前年に続き米軍の第 9 回 RICE BOWL (在日極東空軍 - 同海兵隊) とともに、1955 年 1 月 1 日に明治神宮外苑競技場で開催された。この日、東西の高校の選抜戦も含め 3 試合が行われ、明治神宮外苑競技場の定員一杯の 4 万人の観客を集め、大きな話題となった。大学戦は、20-0 で関東が勝利、5 連勝を果たした。 ●服部慎吾氏、安藤信和氏、羽間平安氏、古川明氏を中心に日本アメリカンフットボール審判協会が設立され、初代理事長に服部慎吾氏が就任した。 	

宿命の対決、日大対関学の始まり。甲子園ボウル、史上初の両校優勝

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 2日 ・ 5月 11日 ・ 5月 14日 ・ 7月 9日 ・ 7月 ・ 9月 10日 ・ 10月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツ検証委員会、「スポーツマン綱領」決定 ・ 紫雲丸事故 ・ ワルシャワ条約機構結成、冷戦激化 ・ 後樂園遊園地完成 ・ 全国中学校体育連盟発足 ・ 日本、関税および貿易に関する一般協定 (GATT) に正式加盟 ・ 新潟大火
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月 22日 ・ 春 ・ 11月 23日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 西宮ボウル、開催を春に移し第2回大会開催 ・ 関西地区、OB、クラブチームを含めた西日本選手権創設 ・ 第10回甲子園ボウル、引分けにより関学・日大の両校優勝 (日大、初優勝)
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ●前年、協会設立20年を記念して9月に新設された西宮ボウルは、この年から春に開催することとなり、第2回大会は5月22日ナイターで開催された。試合は各大学からの混成チームの全関東が、関学主体の全関西を20-13の接戦で勝利した。 ●また関西では、この年春、大学、OBチーム、クラブチームが参加する春季トーナメント戦として西日本選手権大会を創設。参加は大学4大学、関学OBによる全神戸、大阪警視庁を中心とした大阪クラブ、関大卒業生を入れた全奈良の7チームで開催、決勝で関学が関大を下し、記念すべき第1回大会で優勝をした。この西日本選手権は、1985年まで継続的に開催され、1986年より学生、社会人を分離した形態となった。関西地区の春のイベントとして人気を集めた。 ●大学リーグでは、日大の台頭により日本フットボール界も新時代の幕開けを迎えた。関東大学リーグは、この年も明治神宮外苑競技場を主会場に開催。低迷を続けてきた日大が竹本君三新監督の下、2年ほど前よりチーム力が強化され、80人と多い部員数でリーグ戦に参戦。T体型のスピードを活かした日大独特のアンバランスT体型が圧倒的な力を発揮し、慶大と引分けたが4勝1分けで初のリーグ優勝。2位は、日大との接戦に敗れた立教大であった。 ●秋の関西学生リーグでは、関学が米田満新監督の下で指導陣が充実、古川明コーチが米国留学から持ち帰ったデンバーT体型を併用、リーグ戦4試合を何れも70点以上の得点を挙げ、リーグ戦7連覇を遂げた。2位は前年同様、関大であった。 ●記念すべき第10回となった甲子園ボウルは、好天の絶好の試合日より観客3,000名が見守る中開催され、日大が初出場、7年連続出場の関学と対戦した。試合は、第3Qまで日大がリードしたが、第4Q、13点差を関学が追いつき史上に残る接戦の末、日大が最後の関学のトライを防ぎ26-26の同点で試合終了、大会史上初の両校優勝となった。甲子園ボウルでの対戦で語られる「赤の日大」と「青の関学」の対決の始まりだった。 ●第9回ライスボウルは、この年米軍の試合はなく、高校、大学の2試合に観客10,000名を集めて開催。大学戦は関東が日大のバックス陣、慶大・立教大のパスプレーで安定した試合を展開、19-0と前回に続いて無失点勝利で関西に6連勝、通算成績を8勝1敗とした。 ●高校は関学高の連勝が続き、甲子園ボウルで開催された東西王座決定戦、翌1956年1月藤井寺球場で開催された全国大会とも聖学院高を下した。 ●この年から中山晃氏が日本協会理事長(第4代)に就任、1959年まで務められた。 	

関西、西宮・甲子園・ライスの三大ボウル制覇

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月31日 ・ 5月 3日 ・ 5月 9日 ・ 7月17日 ・ 12月18日 ・ 12月28日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 猪谷千春氏、コルチナ・ダンハッツオで冬季五輪日本初のメダル（銀メダル） ・ 第1回世界柔道選手権大会、蔵前国技館で開催 ・ 日本登山隊、マナスル初登頂 ・ 経済白書、「もはや戦後ではない」と宣言 ・ 日本、80番目の国連加盟国へ ・ 国立競技場起工式
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋： ・ 11月23日 ・ 翌年1月13日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関東大学リーグ、学習院大加盟で7校、関西学生リーグ、甲南大加盟で6校へ ・ 第11回甲子園ボウル、NHKテレビが初のテレビ全国中継 ・ 第10回ライスボウル、初めての後楽園競輪場開催
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>関東学生リーグでは、前年までの戦後10年、戦前創部の6大学でリーグ戦を開催してきたが、戦後初めての加盟となる学習院大が部員20名で加わり7大学となった。また関西でも、甲南大が加盟、6大学となった。この年、関学は、1949年中学チーム創設のメンバーが4年となり史上に残る攻守の強さを見せ、春季の西日本選手権、関西学生リーグ、甲子園ボウルに優勝。チーム編成の中核となった西宮ボウル、ライスボウルの二つの選抜戦でも完勝した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東大学リーグは、7大学による21試合を、前半戦は明治神宮外苑競技場、後半戦は、同競技場が1958年開催のアジア競技大会用の国立競技場としての建設に入ることから、後楽園球場で開催。前年度に続き日大と立教大の争いとなったが、最終週での直接対決に日大が完勝し2年連続のリーグ優勝を遂げた。日大は前年度メンバーから大量の卒業生がありシーズン前は下位の予想であったがそれを覆した優勝であった。 ● 関西学生リーグは、6大学による15試合を関学、京大、立命館大の各グラウンドを使用し開催、関学が初の6校によるリーグ戦の全試合を得点60点以上、失点0で優勝、リーグ8連覇を果たした。2位は関大、以下、同志社大、京大、立命館大、甲南大となった。 ● 第11回甲子園ボウルは、2年連続となる日大、関学の対戦となり、快晴微風の好コンディションに5,000名の観客を集め開催。甲子園ボウルに正QBとして3回目の出場となる鈴木智之選手が活躍、攻守均衡がとれた関学が日大の攻撃を完封、6度目の優勝を飾った。この甲子園ボウルでは、NHKが甲子園ボウルとしては初めてのテレビの全国中継を行った。1953年、初のテレビのスポーツ中継・東京6大学野球から早くも3年後の中継だった。 ● ライスボウルでは初めて後楽園競輪場を使用して開催。甲子園ボウル圧勝の関学勢が活躍、関西が前半のリードを守り切り、7年ぶりに2回目の勝利を挙げた。 ● 関東では、秋のリーグ戦終了後の11月24日、秩父宮ラグビー場で、結核予防慈善試合として米極東空軍－関東学生選抜の試合が開催された。 ● 高校の東西王座決定戦は、聖学院高が奮闘し連勝が続く関学高と引分けの殊勲、両校優勝となった。全国大会は、藤井寺球場で開催、関学高が15-0で、1947年から県を挙げてタッチフットボールの普及に取り組んできた滋賀県の八幡商高を破り3連覇を遂げた。敗れはしたものの永年の滋賀フットボールの存在が光った試合であり、その後も滋賀県は多くの名選手を育てた。 ● この年、1936年、1952年に続き我が国で3冊目となる公式規則書「公式フットボール競技規則」が発行され、適用された。 	

日大が2回目の全国制覇。戦術面での重要性高まる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月29日 ・ 2月14日 ・ 7月25日 ・ 8月31日 ・ 10月4日 ・ 10月4日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の南極越冬隊が南極大陸初上陸 ・ スポーツ振興審議会設置決定 ・ 諫早豪雨 ・ 国際学生スポーツ週間を「ユニバシアード」と改称 ・ 「国民体育デー」の設置決定 ・ ソ連、人工衛星スプートニク1号の打上げ
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋 ・ 11月24日) ・ 翌年1月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関東大学リーグ、防大加盟で8校に ・ 第12回甲子園ボウル、日大が関学を下し2回目の優勝(単独では初) ・ 第11回ライスボウル、初めての後楽園球場開催
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 6月1日に開催された第4回西宮ボウルは、前年の関学黄金期の新卒生を中心とした関西が関東を下し、対戦成績を2勝2敗の五分とした。 ● 関東大学リーグに防大が新加盟、8大学となり、総当たりのリーグ戦28試合を後楽園競輪場、立教大と日大のグラウンドで開催した。防大は、関東大学リーグ加盟校中最大の50名近くの部員を擁し、コーチに野崎和夫氏、ウィーリー杉原氏を迎え、この最初のシーズンに早大、学習院大に勝利、2勝を挙げ一躍6位となる健闘であった。その関東大学リーグ戦は、小畑重雄監督率いる日大が徹底した基礎の習得と猛練習によるスタミナ、積極的なスカウティングと新戦術の採用より全勝、リーグ2連覇を遂げた。 ● 関西学生リーグは、京大が部員不足で不参加、5大学で西宮球技場を主会場としてリーグ戦を開催、関学中1期生からの10年選手が大量卒業で各ポジションともメンバーが一変した関学だったが、層の厚さで2年連続無失点での優勝。2位は接戦となった関大戦を逆転で制した同志社大となった。3位から関大、甲南大、立命館大の順となった。 ● 第12回甲子園ボウルでは、スタートメンバーの大半が新しくなった関学が意表を突いた右アンバランス・スプリットT体型を展開、息詰まる守備戦となった。第3Qに日大が、突然使用したマン・イン・モーションの効果により14-6で試合を制し2回目、単独としては初の優勝を果たすとともに関学の5連覇を阻んだ。この試合では甲子園ボウル用に準備した様々な新戦法が展開され、「準備のスポーツ」フットボールが戦術的色彩を強めていく転機となった。甲子園ボウルを制覇した日大は、後に、この年から1959年まで第1期黄金時代と言われた。NHKが前年に続き、テレビ中継を行った。 ● 天候に恵まれた第11回ライスボウルは、前年の後楽園競輪場からライスボウルでは最初で最後の利用となった後楽園球場に会場を移し8,000人の観客の下で開催。着実な攻撃で、第1Q、第2Qに1TDを挙げた関東が、その後も豊富なバックス陣の快走で完勝、前年の雪辱を遂げ対戦成績を9勝2敗とした。同日開催された東西タッチフットボール戦は、関学高が主体の関西が慶応高主体の関東に快勝した。 ● 高校は、甲子園ボウルで開催された第10回となる東西高校タッチフットボール王座決定戦で関学高が28-7で慶応高を下し公式戦125連勝、また藤井寺球技場で開催された第4回高校タッチフットボール全国大会でもやはり関学高が、彦根東高、聖学院高、決勝で慶応高を19-0で下し優勝、128連勝と記録を伸ばした。 ● この年、以降、感謝祭の時期に恒例となる関東学生選抜と在日米海軍シーホークス(横須賀)との試合、ターキーボウルの第1回が米軍横須賀基地のバーギーフィールドで開催され33-7で在日米海軍が初戦を勝利した。 	

関学・日大二強時代。ショットガン初登場

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月30日 ・ 4月5日 ・ 5月1日 ・ 5月4日 ・ 9月27日 ・ 10月14日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国立競技場落成。5月24日：第3回アジア競技大会、東京で開幕 ・ プロ野球長嶋茂雄氏初試合（1974年引退） ・ 文部省に体育局設置 ・ 初めての「国民体育デー」実施 ・ 狩野川台風、神奈川に上陸 ・ 東京タワー竣工
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 9月6日 ・ 翌年1月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関東大学リーグ、新装国立競技場で開幕 ・ 第12回ライスボウル、初めての国立競技場開催

フットボールの基本的魅力である戦略・戦術の重視とそれに基づいた技術、体力の向上により、この年も熱戦、好試合が続いた。戦後最強の年は1951年と言われていたが、この年の各チーム力もそれに優るとも劣らない年だった。

この年の活動
(競技年度)

- 西宮ボウルは第5回を迎え、関学OBが健在な全関西が学生主体の全関東に勝利、3連勝を遂げ、対戦成績を全関西の3勝2敗の勝ち越しとした。
- 関東大学リーグは、全試合の半数をアジア大会に向けて改装された国立競技場で開催、リーグ戦で若さの慶大に敗戦した日大と日大に敗戦した立教大がともにリーグ戦1敗となった。両チームは1週間後に甲子園出場をかけた出場決定戦で再戦、雨中のこの対戦は両チーム得点が挙げられず7-7の引分けとなり、規定により前年度上位の日大が甲子園ボウルに出場。シーズン前、下馬評の高かった立教大は涙をのんだ。関東4連覇を達成した日大は、この日、のちにショットガン体型として開花するクイックパント体型を雨中戦に使用、成果をあげた。
- 関西学生リーグは、前年、部員不足で欠場した京大が復帰、6大学が参加し西宮球技場、関学グラウンドで開催、関学がライン、バックスとも選手層が厚く、試合平均80得点、全試合無失点の圧倒的強さで優勝、リーグ10連覇を達成、3年連続のリーグ戦無失点だった。今期は、米田満監督が在京で、木谷直行ヘッドコーチが実践指導にあたった。2位には、対関学戦に善戦した同志社大となった。
- 両者による4年連続の対戦となった第13回甲子園ボウルは、予想通りの接戦となった。関学はシングルウイング体型で対戦、効果が薄いとみるとタイトTに変更、第2Q、3Qにエンドランで2つのTDを挙げ、12-0とリードした。しかし疲れを知らない日大が、バックス陣のその後の活躍で第3QにバントリターンでのTDを含め2TDを挙げ逆転、日大が13-12の僅差で勝利、小畑重雄監督、最後の年を2連覇、1955年の関学との両校優勝を含む3度目の優勝で飾った。この頃から、その後も続く青の関学と赤の日大の対戦と言われる二強時代となった。
- 翌1959年1月1日、新装国立競技場で最初の開催となった第12回ライスボウルは、監督は関東が日大の小畑重夫監督、関西が関学OBの古川明氏が務めた。試合は、甲子園ボウルの出場を規定で逃した立教大勢が活躍、関東が快勝、対戦成績を10勝2敗とした。当日は、あいにくの降雪の悪コンディション、グラウンドの状態は戦前の1935年全米学生来日時の日全日本戦以来と言われた。この天候により、観客はライスボウル史上最少の3,000人、この最少観客数の記録は現在も続いている。
- 高校は、東西王座決定戦、全国大会とともに関学高が聖学院高に勝利し連勝記録を伸ばした。関学高は、東西王座決定戦で公式戦140連勝、全国大会で大会開始以来の5連覇を遂げた。
- 12月、不味堂書店より、三隅珠一氏著・体育図書館シリーズ「図解タッチフットボール」が出版された、戦前・戦後を通じ、またアメリカンフットボールを含み、わが国最初の専門書であった。

リーグ戦中の雨、台風の来襲、また大試合でのグラウンド状態が悪く、天候に恵まれない年だった。

第一期日大黄金時代。関東大学リーグが10校となり一・二部制へ。社会人クラブチーム活動開始

社会

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 1月 6日 ・ 1月10日 ・ 4月10日 ・ 4月20日 ・ 5月26日 ・ 6月 1日 ・ 9月26日 | <ul style="list-style-type: none"> ・メートル法実施 ・秩父宮記念スポーツ博物館開館 ・NHK 教育テレビ放送開始 ・皇太子・美智子妃、結婚の儀 ・東海道新幹線起工式 ・1964年東京オリンピック開催決定 ・第1回アジア・レクリエーション大会、東京で開催 ・伊勢湾台風。明治以降、最悪の台風災害 |
|--|--|

フットボール

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・秋 ・ | <ul style="list-style-type: none"> ・関東大学リーグ、10チームとなり、1, 2部制に ・社会人チーム、不死倶楽部、東京ラムズ創部 |
|---|--|

この年の活動 (競技年度)

- 第6回西宮ボウルは例年通りナイターで開催され、日大勢中心の全関東がライン戦を制し、通算2勝目を挙げるとともに全関西の4連勝を阻んだ。
- 日体大、東大が加盟し10校となった関東大学リーグは、一部6校、二部4校の一、二部制となった。リーグ戦は、後楽園競輪場、小石川運動場を主として開催し、最後の1-2部入替戦は国立競技場で開催した。1部リーグでは、日大が篠竹幹夫新監督の下、基礎練習を徹底し全試合に大勝し優勝した。
- 関西学生リーグは関学が5試合すべてを大差で勝利、4年連続のリーグ戦無失点で優勝。関大が前年の同志社大に代わり2位に、新鋭甲南大が前年に続き3位となった。関西大学リーグは、関学が各試合、圧倒的勝利を挙げるため、甲子園ボウルで競った試合の勝負強さが低下しているのではないかと話題になった。
- 第14回甲子園ボウルは、5年連続「赤」日大対「青」関学の対決となり、アンバランスTの日大が、終始、フランカーTの関学を圧倒し、快足吉岡龍一選手を中心に攻撃を展開。多彩なプレーで6名のプレーヤーがそれぞれタッチダウンを挙げ、各Q得点、42-0で3年連続4回目の優勝を遂げた。
- 第13回ライスボウルは、雨上がりの試合となったが、10,000名の観客を集め開催、日大勢主体の関東が試合開始のキックオフリタンのTDを皮切りに第1Qで46点と驚異的な得点を挙げ、その後も記録として残る大差の68対0で圧勝した。
- シーズン最後を飾る第3回ターキーボウルは、関東学生が在日米軍海兵隊を44-13で破り、ターキーボウル初勝利を挙げた。
- 高校タッチフットボールは、東西王座決定戦は都立戸山高が初出場したが関学高が勝利、第6回全国大会も関学高が聖学院高を下し優勝、関学高は連勝記録を160とした。
- 関東社会人に日大OB主体の不死倶楽部、明大OB主体の東京ラムズが発足し、関東協会に加盟、9月に両者が対戦し、不死倶楽部が快勝した。社会人クラブチームの本格的な活動が始まった年だった。
- この年、1936年、1952年、1956年に続き我が国で4冊目となる公式規則書「公式フットボール規則」が発行され、適用された。
- 公式規則の変更で、トライの成功はどのような方法でも1点だったものが、ランあるいはパスによる成功は2点、キックは1点となった。しかし、まだキックによるトライを採用するチームは少なく、ラン・パスによる2点を狙うトライがしばらくの間続いた。
- この年から鳥取義雄氏が日本協会理事長(第5代)に就任、1963年まで務められた。

在日米軍との交流活発。立教大が6年ぶりの王座に

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月19日 ・ 5月22日 ・ 6月23日 ・ 9月10日 ・ 9月14日 ・ 9月18日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安全保障条約（新安保条約）調印 ・ チリ地震、日本でも津波の被害 ・ 安保闘争激化の後、日米新安保条約発効 ・ NHK・民放、カラーテレビ本放送開始 ・ 石油輸出国機構（OPEC）結成 ・ 第1回パラリンピック、ローマで開催 ・ 米国プロフットボール新リーグ、AFL (American Football League) 誕生
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋 ・ 12月 4日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関東大学リーグ、13チームとなり、3部制に ・ 甲子園ボウル、甲子園球場の改装により西宮球場で開催
この年の活動 (競技年度)	<p>戦後空席だった日本協会会長に小松隆氏が就任、1962年までの3年間務められた。初代の浅野良三氏（在任1938-1942）に続く戦後初、2代目の会長だったになられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 毎年、興味ある対戦カードが組まれる神戸ボウルが、この年10回大会として開催、全神戸が全大阪を下した。 ● 5月開催された第7回西宮ボウルは、全関東が14-12の僅差で3年連続、3回目の勝利を挙げた。 ● 前年二部制になったばかりの関東大学リーグは、この年、青山学院大、成城大、東京経済大の3校が加盟し三部を構成、一部6校、二部4校、新加盟3校が三部の三部制13校となった。一部リーグは日大、立教大、慶大で争われ、攻守ライン、バックの均衡がとれた立教大が日大を下し6年ぶり6回目の優勝、監督就任2年目の中沢貞夫監督の指導が花開いた。 ● これらの大学リーグに加え、関東連盟には、社会人4チーム、米海軍（横須賀）、米空軍（立川）も加わり、各リーグ内の公式戦に加えて、大学-米軍、社会人-米軍、一部校JV-新加盟校など、特色のある試合カードがシーズン中に生まれ関東連盟全体でこれまでにない50試合を開催した。米軍との試合は、ターキーボウル、新設された菊ボウルが国立競技場で開催、その他の試合も国立競技場が使用されたが米軍基地内での試合も多く、基地内での交流が進んだ。社会人チームの組織的活動の始まりであった。 ● 関西学生リーグは、春の西日本選手権でOB主体の全神戸に敗れ、また春の日大との交流戦にも大敗し心配された関学がパス攻撃を充実させ、各試合40~90点台の得点、全試合無失点で、5年連続リーグ戦無失点となった。大量の卒業生を出した関学だったが、関西学生リーグ制覇の伝統は守られた。近年躍進をしてきた甲南大が関学戦を除く他の試合に危なげなく勝利、加盟5年目で2位となった。 ● 第15回甲子園ボウルは甲子園が改装で使用できず、西宮球場で「毎日ボウル」として開催。6年ぶりの対戦となった立教大と関学の対戦は、重量ラインと速いランプレーを中心とした多彩な攻撃で終始試合をリードした立教大が関学を下し8年ぶり3度目の王座についた。 ● 第14回ライスボウルは例年通り新春スポーツのトップを切って元旦に国立競技場に15,000名の観客を集め開催。関学主体の関西と立教、日大、慶大主体の関東との対戦となり、両チームともパスプレーを多用し観客を沸かせる試合展開となった。第3Qまで関東8-6関西の接戦を関東が逃げ切り22-12で勝利、4連勝を果たすとともに対戦成績を12勝2敗と大きく勝ち越した。 ● 高校タッチフットボールは、関学高が東西王座決定戦では都立戸山高を、全国大会では市立西宮高をそれぞれ下し優勝した。 	

関学高、驚異の200連勝。初のリーグ戦テレビ中継。高校タッチフット王座決定戦、最後の開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 ・ 4月12日 ・ 6月15日 ・ 8月13日 ・ 10月 2日 ・ 10月 7日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駐日米大使に東京生れのエドウィン・ライシャワー氏就任。在任中、日本のフットボール活動を支援された（1966年まで大使） ・ 人類初の有人衛星、ソ連・ガガーリン飛行士による地球一周に成功 ・ スポーツ振興法公布 ・ 東ドイツが東西ベルリンの境界を封鎖。のちに境界線上に壁（ベルリンの壁）を建設 ・ 柏戸関と大鵬関、横綱昇進 ・ 第1回「スポーツの日」（国民体育デーを改称。その後、1966年「体育の日」に、2019年再び「スポーツの日」に）
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月 6日 ・ 9月22日 ・ 12月 3日 ・ 12月16日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回法大－関大定期戦（西京極競技場） ・ リーグ戦、初めてのTV中継。日大－防大戦 ・ 最後の東西高校タッチフットボール王座決定戦、関学高が日大櫻丘高を下す。関学高公式戦200連勝達成（甲子園球場） ・ ポール・ラッシュ博士に「日本アメリカンフットボールの父」の称号 ・ 実業団チーム、三菱樹脂創部
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>近年、大学では4年間ほど東高西低が続いたが、高校では関学高が、この年、1951年春以降の200連勝（引分けを含む）を達成。甲子園ボウルの第1試合「高校の甲子園ボウル」第14回東西高等学校タッチフットボール王座決定戦は、この年がタッチフットボール最後の王座決定戦となったが、関学高が日大櫻丘高を下し、また関学高は年末の第8回全国大会でも市立西宮高を破り、過去開催された同大会すべての優勝を継続する8回目の大会優勝を遂げるとともに、連勝記録を203と伸ばした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●この頃、春に東西の大学の交流戦の開催が定着してきた。この年は関西の王者関学が、明治に接戦で敗れるなど、関東勢の優勢が目立った。 ●春のボウルゲーム、第8回西宮ボウルは全関西が全関東のミスを突き先制したが、全関東が後半逆転、接戦を制し対戦成績を4勝4敗の5分とした。 ●関東大学リーグは、開幕戦の日大－防大戦を、初めてのリーグ戦テレビ中継としてTBSテレビが放映。日大、慶大、立教大の3強の争いとみられたが、日大史上初の3年生主将木村洋選手を中心とした日大が、慶大、立教大戦をはじめ各試合、安定した試合運びで2年ぶりの優勝を果たした。 ●近年、関学の優勝が続く関西学生リーグは、この年も関学が圧倒的な勝利で優勝、2位甲南大、3位同志社大で終了した。関学は1956年シーズンから前年までの5シーズン、リーグ戦無失点であったが、この年、2位となった甲南大に8点を許し6年ぶりの失点となった。 ●2年ぶり、6度目の対戦となった日大対関学の第16回甲子園ボウルは、両チームのバスの対決と予想されたが、十分な練習量と精神的、体力的耐久力のある日大が4年生不在の中で14-6の接戦を制し、2年ぶり5度目の王座に就いた。 ●第15回ライスボウルは1958年に続いて2回目使用の後楽園競輪場で開催、13,000名の観客を集め、慶大ラインに日大ボックスを組み合わせた関東が勝利5連勝、通算成績を13勝2敗とした。 ●12月16日、後楽園競輪場で開催された第2回菊ボウル（米空軍選抜－関東学生選抜）の開会式の場で、日本協会はポール・ラッシュ博士に「日本アメリカンフットボールの父」の称号を贈り、同博士の功績を称えるとともに感謝を表した。 ●1951年第6回甲子園ボウルから同時開催されてきた関西ジュニア・タッチフットボール大会決勝は、この年第11回大会が最後となり、長浜西中が関学中を破り最後を飾った。甲子園ボウルの中学タッチフットボールは、翌年から招待試合となった。 	

関学高連勝記録を市立西宮高がストップ。日大、第2期黄金時代に

社
会

- ・ 6月23日
 - ・ 7月3日
 - ・ 7月11日
 - ・ 10月22日
- ・ 日本体育協会、スポーツ少年団結成
 - ・ 第15回世界体操競技選手権で日本の男子団体が初優勝
 - ・ 米と英仏間の初の大陸間衛星中継成功
 - ・ 米、キューバ海上封鎖。11月1日：ソ連、キューバのミサイル撤収開始

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 6月10日
 - ・ 秋
 - ・ 11月11,18日
 - ・ 翌年1月1日
- ・ 市立西宮高、関学高に勝利、関学高の連勝記録を204で止める
 - ・ 関東大学リーグ、3部制から1部(6校)、2部(7校)制に
 - ・ NHKテレビスポーツ教室「アメリカンフットボール」放映
 - ・ 第10回ライスボウル、関東が2回目の6連覇

こ
の
年
の
活
動
(競
技
年
度)

この頃、高校タッチフットボール界で無敵だった関学高が、春の兵庫県総合体育大会で市立西宮高の部創設者・藤村重美監督率いる市立西宮高に0-12で敗れ、1951年から11年間続いた連勝記録(1956年11月、対聖学院高戦引分けを挟む)を204連勝で阻まれた。試合は、市立西宮高がダブルリバーズで先制、第4Qに中央突破のTDを挙げ、守っては関学高の得点を許さず勝利した。市立西宮高は続く近畿大会決勝でも関学高を下し優勝した。関学高の連勝ストップは、世間にも大きなニュースとして取り上げられた。

- 春恒例のボウルゲームとして定着した西宮ボウルは第9回を迎え、関学主体の全関西に各大学現役混成チームの全関東が快勝、対戦成績を5勝4敗とした。
- 2部と3部を合併させ2部制となった関東大学リーグでは、主会場を後楽園競輪場として開催、前年度メンバーがそっくり残り強カラインを擁する日大が圧勝、続いて立教大、明大、慶大、早大、日体大となった。1960年から2部に所属していた伝統校法大は、この年2部で優勝、入替戦で日体大を破り翌年の1部復帰を決めた。
- 関西学生リーグは春のシーズンを1、2年生主体部員数25名でスタートした関学が6年余りの米国留学から帰国した武田建氏をヘッドコーチに迎えシングルT体型を採用。秋のリーグ戦では危なげなく各試合に勝利、14年連続のリーグ制覇を果たした。2位は甲南大、続いて近年力をつけてきた京大と関大の対戦が引分けとなり、ともに3位となった。以下、同志社大、立命館大となった。
- 第17回甲子園ボウルは前年度のメンバーがほとんど残った日大の「力」、一方、若手中心の関学の「技」の対戦となり、その特徴が十二分に出た好試合となった。先制した関学を日大が逆転、それを関学が再逆転、接戦を展開。日大12-18関学で始まった第4Qに日大が大量16点を挙げ大逆転、28-24で2年連続6回目の優勝(1回の両校優勝を含む)を遂げた。試合前に関学、ハーフタイムに日大の応援団がバトンガールを先頭にパレードを行い、フットボールの新しい応援スタイルを披露するとともに試合を盛り上げた。
- 第16回ライスボウルは3度目となる後楽園競輪場で開催、試合は立ち上がりパス攻撃で関西が先制したが、層の厚い関東が強力なラインを活用した多彩な攻撃と関西のパスプレーを封じ、関学主体の関西を圧倒、2度目の6連覇、対戦成績を14勝2敗とした。
- 高校タッチフットボールは、この年から甲子園ボウルで開催されてきた東西王座決定戦が無くなり、全国大会一本になった。12月、前年に続き藤井寺球場で開催された第9回全国高校タッチフットボール大会では春に関学高の連勝記録を204で止めた市立西宮高が全国大会も勝ち進み、決勝で日大櫻丘高を下し、初の王座についた。高校は市立西宮高の関学高の連勝ストップ、大学は気鋭の各校コーチ陣の努力で好試合の展開と、世間からも注目されたシーズンだった。
- 10月にベースボール・マガジン社より、中沢貞夫氏訳の「図解・アメリカンフットボール」が発行された。戦前・戦後を通じ我が国初のアメリカンフットボール専門書であった(注:「タッチフットボール」専門書は、1958年)。

日大、関学が圧倒的にリーグ制覇。高校アメリカン胎動

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月18日 ・ 3月22日 ・ 6月5日 ・ 6月26日 ・ 7月16日 ・ 11月22日 ・ 11月23日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ バリ島のアグン山噴火、世界的な気温低下 ・ ビートルズ、初のアルバム発売 ・ 関西電力の黒部川第四発電所、黒四ダム完成 ・ ケネディ米大統領、西ベルリン訪問、演説 ・ 日本初の高速道路、名神高速道路の栗東－尼崎が開通 ・ ケネディ米大統領、ダラスで暗殺 ・ 初の日米間の衛星中継実験に成功
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月14日 ・ 9月23日 ・ 秋： ・ 冬 ・ 翌年2月14日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 慶応高・早大学院、アメリカンフットボールとして米ナイルキニック高と対戦 ・ 日本フットボール開始30周年記念試合、全関東学生－在日米海軍厚木 ・ 関西大学リーグ、西宮球場工事により各校グラウンドで開催 ・ ケネディ米大統領暗殺に伴い、全ての対在日米軍交流試合中止 ・ 高校ターキーボウル、東京高校選抜－在日米高校選抜戦、アメリカンフットボールで開催
この年の活動 (競技年度)	<p>競技活動30年目を迎えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 神戸ボウルは、この年第13回を迎え、全神戸－全市立西宮高の対戦、前年、関学高の連勝を止めた市立西宮高が高校としては珍しいOBを含めた出場となった。 ● 1934年の日本フットボール活動開始20周年を記念して第1回を開催した西宮ボウルは、この年記念すべき第10回大会を迎え、5月21日西宮球場で開催、全関東が接戦を制し、対戦成績を5勝5敗の5分とした。 ● 日本フットボール開始30周年を記念し、後楽園競輪場で全関東学生(日大、立教大、明大、慶大がチーム単位で参加)－米海軍厚木と記念試合を開催した。 ● 関東大学リーグは後楽園競輪場を主会場として開催。日大はアンバランスTからのラン、クイックパント体型からのパスで卓越した実力を発揮、圧倒的な勝利で優勝。注目された2位は野崎和夫新監督の明大が、その後伝統となる効果的なオプションプレーを展開し、日大に続いた。 ● 例年使用していた西宮球場が名神高速道路建設工事のため使用できず、この年の秋季公式戦を関学、立命館大、甲南大、京大の各大学グラウンドで開催した関西学生リーグは、関学が連年通り圧倒的な試合展開で優勝、長手功監督率いる甲南大が4年連続の2位となった。 ● 8回目、3年連続の日大－関学の対戦となった第18回甲子園ボウルは、スポッターをコーチ陣に加えた関学が健闘し接戦となったが第4Q残り6分、ショートパント体型に切替えた日大が逆転、勝利をつかんだ。関学は甲子園ボウル7連敗となった。日大は1957～1959年の第1期黄金時代に続き、第2期黄金時代を迎えた。 ● 第17回ライスボウルは、最後の開催となった後楽園競輪場で、第1Q、関学勢が挙げた2TDを守りきり、12-6で7年ぶり関西が勝利、ライスボウル3勝目をあげた。関東は混成ラインに日大、明大のバックス陣で臨んだが及ばなかった。 ● 高校タッチフットボール全国大会は、決勝で市立西宮高と関学高が対戦し、市立西宮高が勝利、2連覇を遂げた。関東では6、7年前から慶応高、早大学院でタッチフットボールと併せてアメリカンフットボールが行われていたが、翌1964年2月に、第1回(高校)ターキーボウル(関東高校選抜対米軍ナイルキニック高)が「アメリカン」フットボールとして開催された。 ● ケネディ大統領暗殺により、以降に予定されていた在日米軍との交流戦は喪に服し全て中止となった。 ● この年から小川徳治氏が日本協会理事長(第6代)に就任、1965年まで務められた。小川徳治氏は、1969年から2年間、再び日本協会理事長に就任された。 	

日本フットボール 30 周年、全日本ハワイ遠征。甲子園ボウル、関学 8 連敗

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 1日 ・ 4月 1日 ・ 8月 20日 ・ 10月 1日 ・ 10月 3日 ・ 10月 10日 ・ 11月 8日 ・ 12月 1日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本、IMF8 条国に、円が国際通貨に ・ 日本、海外旅行自由化 ・ 国立代々木競技場完成 ・ 世界初の高速鉄道、東海道新幹線開業 ・ 日本武道館開館 ・ 第 18 回夏季オリンピック開幕 (東京) ・ アジア初のパラリンピック、東京で開催 ・ 東京都立駒沢オリンピック公園開園 ・ 岸記念体育会館移転 (渋谷神南へ)
フ ツ ト ボ ウ ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10月 24日 ・ 12月 ・ 翌年 1月 1日 ・ 翌年 1月 15日) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京オリンピックの影響で、関東、関西秋季リーグ、遅れて 10 月開幕 ・ 日本フットボール 30 周年記念、全日本、戦後初の米国 (ハワイ) 遠征 ・ 第 18 回ライスボウル、1 月 15 日開催の甲子園ボウルの前に開催 ・ ハワイ遠征の影響で前年シーズンの第 19 回甲子園ボウル開催、日大-関学
この年の活動 (競技年度)	<p>日本フットボール 30 周年を記念して戦後初の米国ハワイ遠征が実現し、総監督竹下正晃氏、コーチに篠竹幹夫氏、米田満氏、選手は関東 4 連覇の日大、関西 16 連覇の関学各 12 名を中心に 26 名の全日本が編成され、12 月 9 日日本を出発。ハワイ大学に 0 対 40 と完敗したがハワイ大 OB 主体の 49 ナイナーズとの第 2 試合は 28 対 10 と本場チームに対し、戦前の米国遠征を含め、初勝利をあげた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 西宮ボウルは、球場の日程の都合が悪く初めての開催中止となった。 ● 秋季大学リーグは東西とも東京オリンピック終了後の 10 月 24 日に開幕。 関東大学リーグはオリンピックの影響で各校グラウンドでの開催となり、圧勝を続ける日大と攻守に切れ味の良い攻撃の明大の全勝対決となり、日大が勝利、7 連覇を遂げた。以下、明大、慶大となった。一方関西学生リーグは服部緑地公園を主会場に開催され、強力なラインと豊富なバックスの関学が優勝。以下、粒ぞろいのラインを揃えた関大、ここ数年上位で安定する甲南大となった。 ● 第 19 回甲子園ボウルは、東京オリンピック、全日本学生選抜のハワイ遠征の関係で翌年 1965 年 1 月 15 日に開催された。主力がハワイ遠征で同行した日大と関学の対決となったが、関学の先制を日大が第 2Q に逆転。日大は、ラン、パス攻撃ともに活躍した横溝裕利選手を中心にその後も得点を重ね完勝、甲子園ボウル 4 連覇、通算 8 回目の優勝を飾った。一方、関学はこれで甲子園ボウル 8 連敗となった。 ● 第 18 回ライスボウルは翌 1965 年 1 月 1 日に 4 年ぶりに国立競技場で開催された (以降 22 年間、国立競技場を使用)。試合は関東・関西とも甲子園ボウルを控えた日大と関学を除く選抜チームとなり、関東が明大、慶大、関西が関大中心のチーム編成で対戦し、関東が勝利した。この試合で、華やかなバトン・トワラーが登場、ハーフタイムを盛り上げた。以降、アメリカンフットボールの試合では徐々にハーフタイムを中心に趣向を凝らしたイベント、ショーなどが行われ観客の目を楽しませた。永年、1 月 1 日に開催されてきたライスボウルは、翌年から 1 月 15 日開催となり、「新春スポーツの先陣」はこの年が最後となった。 ● 高校の第 11 回全国高校タッチフットボール大会は、2 年連続優勝の市立西宮高を決勝で破った関学高が 3 年ぶりの優勝を果たした。 <p>東京オリンピック開催、30 周年記念の全日本ハワイ遠征の関係で、関東、関西とも秋のシーズン開始は 10 月下旬から、甲子園ボウルはライスボウル開催の後の翌年 1 月 15 日開催、と例年のフットボールカレンダーと大きく異なった年だった。</p>	

立教大、前年最下位から劇的な復活。戦国時代の幕開け。東海地区活動開始、全国展開の始まり

社
会

- ・ 2月 7日
 - ・ 7月 1日
 - ・ 8月 3日
 - ・ 9月 13日
 - ・ 11月 1日
 - ・ 12月 10日
- ・ 米軍による北ベトナム爆撃（北爆）開始
 - ・ 名神高速道路全線（小牧－西宮間）開通
 - ・ 長野県松代町、約5年間続く松代群発地震の始まり
 - ・ 1970年万国博覧会、大阪開催決定
 - ・ 東海道新幹線「ひかり」、東京-新大阪間を3時間10分で運転開始
 - ・ 日本、国連安全保障理事会の非常任理事国に

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 12月 26、27日
 - ・ 12月 5日
- ・ 第12回高校タッチフットボール全国大会、初の関東開催（駒沢公園）
 - ・ 第20回甲子園ボウル、引分けで関学・立教大両校優勝

こ
の
年
の
活
動
（
競
技
年
度
）

この年、関東・関西以外で初めてとなる東海地区で愛知学院大、名古屋学院大の活動が始まった。我が国におけるフットボール活動の全国展開の始まりだった。

- 前年、球場の日程の都合で開催中止となった西宮ボウルは、この年第11回大会を例年通りの西宮球場で開催、全関東が接戦を制し6連勝、対戦成績を7勝4敗とした。
- 学園紛争の火が付き始めた中、関東大学リーグでは、この年から東京オリンピックで整備された駒沢公園（駒沢第二球場、駒沢補助グラウンド）を主会場として開催、立教大が初戦で過去4年無敵だった日大を20-18の接戦で破り、慶大とは引分けのもの4勝1分けで前年の最下位から5年ぶりのリーグ優勝を果たす。最下位からの翌年優勝は、日本フットボール史上初の快挙であり、1959年就任した中澤貞夫監督の指導が光った。日大は2位だった。
- 関西では、関学が全国大会優勝の市立西宮高出身選手が健闘した関大に大苦戦したが12-0で勝利、他の4試合は完勝し17連覇の優勝。関大は、西日本選手権では関学に敗れたものの接戦、OBを加えた神戸ボウルの対戦では関学に勝利したが秋の公式戦は関学に及ばなかった。関大－甲南大戦は引分けとなり、ともに2位となった。関東、関西とも戦国時代の幕明けのシーズンだった。
- 5年ぶりの顔合わせとなった関学－立教大の第20回甲子園ボウルは、第2Q半ば関学が22-0と大きくリードしたが、立教大はパスを有効に決め試合終了3分前に22-22に追いつき、終了。1955年第10回大会（日大－関学）以来の2回目の両校優勝となり、関学は1957年第12回大会からの甲子園ボウルの連敗を8連敗で止め7回目の優勝、一方、立教大は、4回目の優勝となった。この年は立教大の躍進が光ったシーズンだった。
- 第19回ライスボウルは元旦開催から1月15日開催と変更になり、国立競技場に9,000名の観客を集めて開催、この日に成人を迎えた7名が祝福を受けた。1月15日（16日）の成人の日の祝日開催は、1973年の第26回大会まで続いた。試合は、関学勢の攻撃陣、関大勢の守備の健闘で関西が20-14と2年ぶり4度目の勝利をあげた。
- 高校タッチフットボール全国大会は、第12回で初めて東京開催（駒沢第二、駒沢補助）となりで、全国から14校が集まり2日間のトーナメントを実施、決勝は3年連続の対決となった関学高が市立西宮高を下し、連覇を果たした。
- この年、1936年の我が国の最初の公式規則書の発行から5冊目となる「アメリカンフットボール規則」が発行された。前回1959年の発行から6年ぶりの公式規則書の発行であった。
- この年から原田嘉兵衛氏が日本協合理事長（第7代）に就任、1969年まで務められた。

甲子園・ライスとも観衆一万を超す。関西の関学天下に陰り

社会

- ・ 1月 1日
 - ・ 1月 10日
 - ・ 1月 24日
 - ・ 2月 4日
 - ・ 4月 1日
 - ・ 4月 10日
 - ・ 4月 26日
 - ・ 6月 29日
 - ・ 6月
- ・ 日本人の海外観光渡航回数制限撤廃、持出し外貨も 1 回 500US ドルまでとなる
 - ・ オリンピック記念青少年総合センター開設
 - ・ 早稲田紛争泥沼化。以降、全国的な大学紛争へ
 - ・ 全日空機、東京湾に墜落、続けて、羽田空港、富士山上空で連続 3 件の航空機事故
 - ・ 日本でメートル法完全施行。尺貫法、ヤード・ポンド法などの公的使用が禁止
 - ・ 国立競技場トレーニングセンター開設
 - ・ 1972 年札幌冬季オリンピック開催決定
 - ・ ビートルズ来日、3 日間日本武道館で公演
 - ・ 米プロフットボール、NFL と AFL の合併決定

フットボール

- ・ 1月
 - ・ 4月 24日
 - ・ 9月
 - ・ 翌年 1月 21日
- ・ 実業団チーム、ヴァンジャケツト活動開始
 - ・ 西日本選手権、関大が初優勝
 - ・ 関東大学リーグ、4 校の新加盟で 3 部制を採用。以降、新加盟校急増
 - ・ 九州初のフットボール試合・平和台ボウル開催、全日本学生-米軍グリーンウェイブ

この年の活動
(競技年度)

徐々にフットボールの人気も高まり、西宮、甲子園、ライスの 3 大ボウルゲームの観客数がともに 10,000 名を超え、「関係者のスポーツ」から「社会のスポーツ」として展開し始めるスタートのシーズンだった。

- 過去、関西学生リーグ 17 連覇と独走の関学だったが、関西地区における公式戦で 6 年ぶりに勝星を失った。春に開催された第 12 回西日本選手権 2 回戦で関大に 0 対 0 で引分け、抽選で 3 回戦に進めなかった。決勝に進んだ関大は、関学 OB チームに勝利、初優勝を遂げた。
- 5 月 14 日開催の第 12 回西宮ボウルは、関学、関大、京大、甲南大の混成で臨んだ全関西が第 4Q に逆転、7 年ぶりの勝利を挙げた。
- 関東大学リーグは、新たに 4 校が加盟、18 大学となり、1961 年シーズンと同様の 3 部制を採用し、1 部は 8 校で 28 試合のリーグ戦を行った。その秋のシーズンでは、日大が立教大、慶大との争いを制し、2 年ぶり 10 回目の優勝を果たした。
- 関西大学リーグでは、関学はこの年、米田満氏が総監督に就任、豊中中学 (旧制) タッチフットボール一期生の徳永義雄氏が監督に就任。関学は近代トレーニングを採用、相手チームの分析を徹底、春に引分けた関大との対戦では相手のパス攻撃を封じ 46-0 の完封、連続 18 度目の優勝を果たした。
- 10 回目の対戦となった日大対関学の第 21 回甲子園ボウルは、日大の軽量で不利とみられていたラインが粘り強い押しと機動力を発揮し 40-12 と完勝、2 年ぶり 9 回目の全国制覇。この試合の観客は甲子園ボウル史上初の 10,000 人を超えた。
- 第 20 回ライスボウルは、これも史上最高の 16,000 人の観客を集め開催され、ダブルウィングからパスに徹した関西が第 2Q に大量 22 点を挙げ 40-34 と前年に続き関東を破り勝利、通算成績を関西の 5 勝 15 敗とした。
- 高校はこの年も西高東低で、タッチフットボール全国大会決勝は兵庫県勢の関学高と市立西宮高の 6 度目となる対戦を関学高が制し、3 年連続 11 回目の優勝を遂げた。
- 年が明けた 1967 年 1 月 21 日、九州初のフットボール試合、平和台ボウルが観客 11,000 名を集め開催。全日本学生が在日米軍グリーンウェイブと対戦、接戦を制した。テレビの全国中継もあり、九州地区にフットボール活動のきっかけを作った。
- 実業団ヴァンジャケツトが活動を開始。フットボールとアメリカ、ファッションを関連付けた活動で注目を浴びた最初の年だった。

4 月、メートル法完全施行でヤード・ポンドの公的使用が禁止されたが、アメリカンフットボールでは「ヤードの使用」が競技規則の基本であることを関係当局に説明、そのままヤードの使用可となった。

関学、11年ぶりの甲子園ボウル単独優勝。増加する加盟校、急増時代を迎える

社
会

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 1月15日 ・ 1月28日 ・ 3月6日 ・ 8月3日 ・ 8月8日 ・ 8月27日 ・ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 米国プロフットボール、NFLとAFLの優勝チームによる最初の試合。のちに第1回スーパーボウルと呼ぶ ・ KDDが日米間の通信衛星中継業務を開始 ・ 日本航空、世界一周線の運航開始 ・ 公害対策基本法公布 ・ 東南アジア諸国連合(ASEAN)結成 ・ ユニバシアード東京大会開催(9月4日まで) ・ 日本、国民総生産(GNP)世界3位に |
|--|---|

フ
ツ
ト
ボ
ウ
ル

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 5月14日 ・ 12月10日 ・ 12月24日 ・ 翌年1月15日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回日大-関学定期戦(西宮球技場) ・ 第22回甲子園ボウル、関学11年ぶりの優勝、対日大(甲子園球場) ・ 第1回シルクボウル、在日米軍厚木-関東学生(駒沢陸上) ・ ライスボウルの高校招待試合がアメリカンフットボールへ。関学高、日大櫻丘高を下す |
|--|--|

こ
の
年
の
活
動
(
競
技
年
度
)

- 春にこれまで不定期に対戦してきた日大と関学が、この年から東西交代で開催する定期戦となり、その第1回が西宮球技場で開催され22-20で関学が勝利した。また西日本選手権は大学チームに加え、全京大、全立命館、実業団の三菱樹脂(長浜工場)など12チームが参加し開催、関学が11回目の優勝を遂げた。
- 大学紛争が深刻化していく年であったが関東大学リーグに3校、関西学生リーグに近畿大が新たに加盟し、日本協会加盟大学は関東21校、関西7校となった。その後、各地区で加盟校が急増する前触れであった。
- 関東大学リーグでは、前年同様1部リーグを8校で開催、大躍進の法大が日大に迫ったが、日大がラスト4分で2TDを挙げ辛くも逆転、11度目の優勝を飾った。明治、立教大、慶大が互いの対戦を1勝1敗とし、2位に並んだ。
- 関西学生リーグでは、初の7校によるリーグ戦21試合を開催、徳永義雄監督、武田建ヘッドコーチ率いる関学が、本場米国技術の導入に積極的に取り組み、関大に16失点、京大に22失点を許したが関西学生リーグを制覇、19連覇を遂げた。
- 第22回甲子園ボウルは過去最高の15,000人の観客となり、関学が相手のチーム力を分析し日大の弱点をついた戦術と気力で、1956年以来11年ぶりの甲子園ボウル単独優勝を遂げた(2年前の大会で立教大と引き分け、両校優勝)。戦略・戦術の重視で10年ほど前から徐々に日本でも対応されてきた「準備のスポーツ、アメリカンフットボール」が、わが国でも本格的に始まってきた時期だった。
- 第21回ライスボウルは、10,000名の観客の下に開催、関西が関東を破り初の3連勝、対戦成績を6勝15敗とした。このライスボウルで、高校招待試合として初めてアメリカンフットボールの試合が関学高と日大櫻丘高の間で行われ、関学高が32-22で勝利した。
- 高校タッチフットボール大会は、2年連続7度目の関学高-市立西宮高の対戦となったが、大接戦の末、市立西宮高が4年ぶり3度目の全国制覇を果たした。
- 関東では、日米交流試合としてシルクボウルが発足し、その第1回としてが関東学生選抜と在日米海軍厚木フライヤーズが対戦、関東学生選抜が勝利した。この米軍との試合シルクボウルは1977年まで10回開催され、本場米国のフットボールの雰囲気味わえる対戦で人気を集めた。

甲子園ボウル、ライスボウルの共に関西勢勝利は11年ぶりであった。

加盟校増加が続き、関西 1、2 部制へ。明大、21 年ぶりの甲子園へ。大接戦の甲子園ボウル

社会

- ・ 1月29日
 - ・ 1月30日
 - ・ 2月26日
 - ・ 4月4日
 - ・ 6月26日
 - ・ 12月10日
 - ・ 12月22日
 - ・ 1968～1969年
- ・ 東大医学部無期限スト突入、東大闘争始まる
 - ・ ベトナム戦争、南ベトナムのゲリラが蜂起、テト攻勢開始
 - ・ 成田空港開港阻止デモ隊と警官隊が衝突
 - ・ 米黒人運動指導者キング牧師暗殺
 - ・ 小笠原諸島、日本復帰
 - ・ 東京府中で3億円強奪事件
 - ・ 中国、文化大革命の指示
 - ・ 大学紛争拡大

フットボール

- ・ 3月30日
 - ・ 6月3日
 - ・ 秋
 - ・ 12月15日
 - ・ 12月29日
 - ・
- ・ 日本フットボール35年記念試合、全明治-全立教(駒沢第二)
 - ・ 西宮ボウル、大学紛争の影響で、全関東は日大OBのみのチーム編成
 - ・ 関東大学リーグ、2部を4ブロック制に。関西学生リーグ、1・2部制へ
 - ・ 第23回甲子園ボウル、明大21年ぶり出場。接戦を関学が制す(甲子園球場)
 - ・ 全国高校タッチフット決勝、初の関東勢対戦。日大櫻丘高が法政二高を破る(西宮球技場)
 - ・ 少年チーム、立川ジェッツ設立

この年の活動
(競技年度)

加盟校の増加は続き、関東は3校が新加入し計24校、3部制を2部制に変更、1部8校と2部は16校を4ブロックに分けたリーグ編成とした。また関西は5校が新加入し計12校、1部7校、2部5校の2部制とした。加盟校急増期を迎え部活動が活発してきたが、一方、大学紛争が激化し、関東、関西とも少なからず活動に影響があった年だった。

- 第14回西日本選手権決勝は関学と関大が対戦、関大が健闘したが、14-0で関学が優勝した。また春の東西交流戦、定期戦では、関学は日大に勝利したが明大に敗れた。明大の好調を印象付けた。
- 6月3日の第14回西宮ボウルは、関東が大学チームの練習が大学紛争で不十分なため、日大OBのみのチーム編成となり、観客15,000名を集め開催。パス攻撃を中心とした全関西が勝利、3連勝とともに対戦成績を7勝7敗の五分にした。
- 関東大学リーグでは、この年も駒沢公園を主会場として開催、春のオープン戦では振るわなかった明大が、秋までに見事にチーム力を向上させた。明大は各試合伝統のオプションプレーを鮮やかに展開し、毎年、リーグ戦では上位となるものの制覇ができなかった明大が1947年以来21年ぶりの優勝、1962年就任の野崎和夫監督の関東初制覇だった。2年連続優勝を遂げていた日大は、明大、法大に敗れ、明大、立教大に敗れた法大とともに同率2位となった。
- 関西学生リーグは、西宮球技場を主会場として関学が各試合危なげなく勝利、20回連続の全勝優勝を飾った。関大と京大の接戦をそれぞれ制した同志社大が10年ぶりの2位となった。
- 第23回甲子園ボウルは、快晴のフットボール日和となり観客10,000人を集め開催。甲子園ボウルは、第5回大会の慶大の出場以降、関東代表はここ17年間、日大か立教大であったが、1948年の第2回大会以降、甲子園ボウルから遠ざかっていた明大が21年ぶりとなる2回目の出場で話題となった。ともに攻撃型の関学と明大の初めての対戦となり予想通りの大接戦を展開した。試合終了直前の明大の猛反撃をゴールラインまであと4ヤードで関学が抑え、選手層の厚い関学が6回も得点の主導権が代わった試合を38-36で制し2連覇、9度目の全国制覇を遂げた。
- 第22回ライスボウルは、法大ラインと明大バックスを組み合わせた関東が、京大を加えた関学主体の関西を16-12の4点差の接戦で制し、4年ぶり通算16勝目の勝利をあげた。
- 第15回全国高校タッチフットボール大会は、日大櫻丘高と2回戦で関学高を下した法政二高の史上初の関東勢同士の対戦となり、日大櫻丘高が初優勝を遂げた。法政二高は、続くライスボウルのアメリカンフットボールの招待試合で関学高も下した。

大平正芳氏、会長就任。加盟大学増加が続く

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月18～19日 ・ 5月26日 ・ 6月8日 ・ 6月10日 ・ 7月20日 ・ 8月27日 ・ 10月15日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安田講堂事件。以降、学園紛争沈静化へ ・ 東名高速道路全区間開通 ・ 南ベトナム解放民族戦線、南ベトナム共和国臨時革命政府を樹立 ・ 日本のGNP（国民総生産）が世界第2位へ ・ アポロ11号、人類初めての月面着陸 ・ 松竹映画「男はつらいよ」第1作公開 ・ 全米でベトナム戦争反対デモ ・ 人工芝、日本で初めての商品化
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6月10日 ・ 秋 ・ 秋 ・ 12月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回日大－法大定期戦（駒沢第二） ・ 関東、関西とも新規加盟校続き、日本協会加盟大学は46校に ・ 関西学生リーグ、2部を2ブロック制に ・ 大平正芳氏、日本協会会長に就任
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>過去5年間空席となっていた日本協会会長に、大平正芳通産大臣（当時）が就任、1976年までの7年間、日本フットボールの国際化が進むこの期間、会長を務められ、精力的に活動された。また同時に日本協会理事長（第8代）に1934年の日本のアメリカンフットボールの始動から協会活動に貢献された小川徳治氏が就任された。小川徳治氏は、1963～1965年に続き2回目の理事長であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●この頃、新規チームの設立が続いたが、この年も関東大学リーグでは4校が、関西学生リーグでは6校が新規に加盟、日本協会加盟の大学は46校に増加した。関西学生リーグでは、一挙に12校から18校に増加したため、2部を2つのブロックにする編成とした。各組織は、リーグ編成、試合会場手配、試合開催、技術力向上の施策等、多忙な毎日であった。 ●西日本選手権は、近年実力をつけてきた京大が決勝で関学と対戦したが、関学が勝利。関学は13度目の優勝であった。 ●恒例のナイトゲーム第15回西宮ボウルは、関東は前年リーグ制覇の明大中心で臨んだが、関学の現役、OB主体の全関西が完勝した。 ●秋の関東大学リーグは駒沢球技場（駒沢第二、駒沢補助）を主会場として開催され、日大が最終週で全勝対決となった明大を22-12の接戦で破り優勝、2年ぶりの制覇を遂げた。 ●関西学生リーグは部活動の運営・練習を更にシステム化した関学が、安定した試合展開で6試合を相手をわずか2TDに抑え21年連続の全勝優勝、同志社大、関大、京大が三つ巴でともに2位となった。 ●第24回甲子園ボウルは、12度目の対決となる日大と関学の対戦となり、関学がパスで先制したが第2Qに日大が逆転、前半リードした日大は、4QにFB板哲夫選手が80ヤードのキックオフリターンで追いつがる関学を突き放し、10度目の王座に返り咲いた。 ●観客20,000名（米軍RICEBOWLと共催した1958年第8回大会の40,000名に次ぐ観客数）を集めた第23回ライスボウルは、第1プレーで関東が奇策ロンリーセンターを成功させ明大バックス陣が先制点を挙げたが、第4Qで関西が逆転、勝利し対戦成績を関西の7勝16敗とした。 ●高校では、タッチフットボール全国大会、ライスボウル招待アメリカンフットボール試合でいずれも関学高を下した法政二高が栄冠を得た。 ●第3回シルクボウル（米軍厚木－関東学生）の試合前に立川リトルリーグのフットボール部が登場、ミルクボウルとして小学生アメリカンフットボールを披露、話題となった。 	

関東並列リーグへ。社会人リーグの始動。高校、アメリカンフットボールの選手権へ
専門誌「TOUCHDOWN」創刊

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月11日 ・ 3月15日 ・ 4月11日 ・ 12月10日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本初の人工衛星「おおすみ」打上げ成功 ・ 万国博覧会（大阪万博）開幕 ・ 米・アポロ13号打上げ。酸素タンク爆発するも地球に帰還 ・ スポーツ安全協会設立 ・ 米国プロフットボール、NFLとAFLが統合
フ ット ボ ール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月28日～ ・ 春 ・ 8月30日 ・ 9月15日 ・ 10月22日・ ・ 12月25～27日 ・ 翌年1月31日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米軍コーチクリニック開催（米軍横須賀基地） ・ 関西社会人、ホワイトベアーズ設立。関西社会人アメリカンフットボール連盟設立 ・ アメリカンフットボール専門誌「TOUCHDOWN」創刊 ・ 東西クラブチーム王座決定戦開催（西宮球技場） ・ 関東社会人サンダラス、グアム遠征 ・ 第1回高校アメリカンフットボール選手権開催。関学高、日大櫻丘高を下す（駒沢第二） ・ 全日本社会人王座決定戦。シルバースター、ホワイトベアーズを下す（駒沢第二）
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 第16回西宮ボウルは関東が日大、関西が関学のそれぞれ現役、OB主体のチーム編成で対戦、前半両チーム無得点の拮抗した試合となった。後半、両チームとも2TDを挙げ、そのトライの差で関東が14-12で5年振り8度目の勝利を挙げた。 ● 関東大学リーグが従来の2部制から、並列5ブロック制に編成替えをした。そのブロックは、それぞれ「東京6大学」、「関東学生」、「関東6大学」、「さつき」、「首都6大学」のリーグ名称とし、各リーグの優勝チーム5校によるトーナメントである関東大学選手権を開催した。関東学生リーグでは日大が、144-0、162-0の試合など圧倒的な強さを示した。初めてのこの年の関東選手権は各リーグ1位の明大、日大、防大、明学大、一橋大で行われ、決勝は勝ち進んだ関東大学リーグの日大と東京6大学リーグの明大が対戦、日大が完勝、甲子園ボウル出場を遂げた。この並列ブロック制は1980年まで11年間続けられた。 ● 関西学生リーグは、今季より東海地区の名古屋学院大、愛知学院大の2チームが加盟し20校で開催。従来の「2部」は近畿学生リーグと改称し「京阪ブロック」、「阪神ブロック」の2ブロックとした。従来から1校増加し8校で開催した1部リーグ「関西学生リーグ」は関学が圧倒的な強さで22年連続の全勝優勝、京大が初の単独2位となった。京大の躍進時代の始まりだった。 ● 第25回甲子園ボウルは好天ながら強風が吹く中で開催、日大、関学両者互角の予想であったが、関学が完璧なブロックと素早いダッシュ、QB 廣瀬慶次郎選手の巧みなパスプレーコントロールで13回目の対戦となる日大を圧倒し前年の雪辱を果たす10度目の優勝を遂げた。 ● 第24回ライスボウルは、関東選抜は日大が所属する関東学生リーグからの選抜チームで対戦、その関東に対し関西はライン戦で主導権をとり第1Qに立て続けに3TDを挙げ、その後も絶えず主導権をとり完勝した。 ● 高校では防具を付けたアメリカンフットボールの近年の普及に対応し、駒沢第二球技場、同補助グラウンドにアメリカンフットボール6校、タッチフットボール4校が駒沢球技場に集い、アメリカンとタッチを同時に開催する画期的な年となった。のちにクリスマスボウルと名付けられたアメリカンフットボール高校選手権、記念すべき第1回大会は12月27日に開催され関学高が日大櫻丘高を35-0で下し優勝、タッチフットボールは八日市高が崇徳高を20-0で下し初優勝した。 ● 社会人で活発化してきたクラブチームは、この年、東西の対戦が行われた。その東西クラブチーム王座決定戦は9月に西宮球技場で開催され倉智春吉氏中心に設立されたホワイトベアーズが、翌年1月の全日本社会人王座決定戦は駒沢第二球技場で開催されシルバースターがそれぞれ栄冠を勝ち取った。 ● この年、秋のシーズン開始前に日本で初めてのアメリカンフットボール専門誌「TOUCHDOWN」が発行人・後藤完夫氏で創刊された。当初は季刊誌として発行、徐々に発行間隔を短くし、1976年より月刊誌化、休刊となる2016年10月号(568号)まで発行された。 	

大きな影響を与えたユタ州立大学、来日。活性化してきた社会人が日本リーグ設立

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月10日 ・ 6月17日 ・ 8月15日 ・ 8月28日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米卓球チーム、北京へ (米中ピンポン外交) ・ 日米政府間で沖縄返還協定調印式 ・ ニクソン・ショック (アメリカが金とドルの交換停止) ・ 円変動相場制移行
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 ・ 4月 ・ 8月 ・ 9月15日 ・ 11月 9日 ・ 12月 ・ 翌年1月30日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本社会人アメリカンフットボール協会設立 ・ 東京サンダラス、グアム遠征 ・ 関学高、初のハワイ遠征。カワイ高、ヒロ高と対戦 ・ 日本社会人アメリカンフットボールリーグ発足 ・ シルバースター、ハワイ遠征。ハワイ大と対戦 ・ ユタ州立大来日 (関東・関西で試合) ・ 日本リーグ第1回東西王座決定戦、サイドワインダーズ、シルバースターを下す
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>チャック・ミルズ監督率いる本場の強豪ユタ州立大学が来日。米国チームの来日は、日本のフットボール活動開始半年後の1935年3月の全米学生選抜来日以来36年ぶり、戦後初であった。同チームは、12月19日に国立競技場で関東学生選抜と対戦(ユタ州立大50-6 関東学生)、12月26日に甲子園球場で関西学生選抜と対戦(ユタ州立大45-6 関西学生)の2試合を行った。体格が大きく異なるユタ州立大との試合は一方的であったが、日本チームもパスなどで果敢に対戦した。関西では関西出身選手主体の全日本と合同練習を開催し、技術・戦術面での交流を深めた。これを契機に、その後、米国大学の来日が頻繁となり、日本フットボールの普及、向上に大きな影響を与え、その後も語り継がれる来日であった。また、関学高のハワイ、東京サンダラスのグアム、シルバースターのハワイなどの海外遠征もあり、国際的なフットボール活動の夜明けとなった記念すべき年だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 伸び悩んでいた社会人は、この年、関東6チーム、関西4チームで日本フットボールリーグを発足させ、1972年1月に東西王座決定戦を開催、サイドワインダーズ(関西)がシルバースター(関東)を下し、第1回の王者となった。 ● 関東大学リーグは、2回目となる関東大学選手権を前年同様、各リーグ優勝の5大学で開催、明大、日大、防大、明学大、国商大が出場、前年に続く日大と明大の決勝を日大が制し優勝、14回目の関東制覇を遂げた。 ● 関西学生リーグは関大が対関学戦で26-38と健闘したが関学が勝利、関学は他の6試合は完勝し、23連覇のリーグ優勝とした。前年6位の甲南大が関学には敗れたが他の試合に全勝し2位。3位は近年上位校として安定してきた京大となり、関学に善戦した関大は4位であった。 ● 日大、関学の14回目の対戦となった第26回甲子園ボウルは15,000人の観客の下、両チームのパスプレーで見ごたえのある試合となった。その大接戦を日大が第4Qに決勝TDを挙げ勝利、甲子園ボウルの成績を10勝3敗1分とした。日大のQB 佐曾利正良選手は、3TDパス、自らのランの1TDとすべての得点に直接関係する活躍だった。 ● 第25回ライスボウルは、15,000名の観客を集め開催、前半の関東の大量リードを後半、関西が追いつける展開となったが及ばず、関東が3年ぶりの勝利を挙げた。 ● 高校全国大会は、12月22日から3日間、駒沢公園で開催され、第18回のタッチフットボールの部は東海大付高が長浜北高を、第2回大会となるアメリカンフットボールの部は関学高が前年と同じ対決の日大櫻丘高をそれぞれ下し優勝した。 ● 日本リーグが発足した社会人は、翌1972年1月30日に日本リーグ東西王座決定戦を駒沢第二球場で開催、サイドワインダーズがシルバースターを破り王座に就いた。 ● この年から藤堂太郎氏が日本協会理事長(第9代)に就任、1979年まで8年間務められた。 	

社会人チームの実力が向上。第19回高校タッチフットボール、最後の大会

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 3日 ・ 2月 19~28日 ・ 2月 21日 ・ 5月 15日 ・ 9月 5日 ・ 12月 19日 ・ 12月 21日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第11回冬季オリンピック開幕(札幌) ・ 浅間山荘事件 ・ ニクソン米大統領、訪中 ・ 沖縄、日本に返還 ・ ミュンヘンオリンピック、テロ事件 ・ 米アポロ17号、月から帰還。アポロ計画終了 ・ 東西両ドイツ、互いを国家承認。基本条約を締結 ・ 万博記念競技場開場
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 春 ・ 夏 ・ 春 ・ 6月 ・ 6月 ・ 12月 10日 ・ 12月 25日 ・ 翌年 1月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハワイ・カウアイ高来日(関学高、慶応高と試合) ・ ハワイ・ヒロ高来日(日大櫻丘高、関学高と試合) ・ 第18回西日本選手権、サイドワインダーズ優勝。社会人チームが久々の優勝 ・ 韓国・高麗大来日(関東・関西で3試合) ・ 日本協会、NFLコーチ、マイク・ギディング氏招へい、クリニック開催 ・ 第27回甲子園ボウル、初出場の法大が関学を下す(甲子園球場) ・ タッチフットボール最後の第19回全国大会、虎姫高が都立西高を下す(駒沢第二) ・ ハワイ大来日(関西・関東で試合)
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>前年、近代的攻守のユタ州立大との対戦をから、急速に本場米国の戦術・技術に対する研究への関心が高まった。日本協会ではそれを受けて米国NFLサンフランシスコの守備コーチ、マイク・ギディング氏を招へい。関東、関西でクリニックを開催、各チームに大きな影響を与えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関西地区で春季恒例となっている学生、社会人のチームが参加する西日本選手権では、この年、学生チームを破ったサイドワインダーズとホワイトベアーズの社会人同士の決勝となり、サイドワインダーズが優勝、前年度、日本リーグが発足したこともあり、社会人チームのレベルアップを印象付けた。 ● 6月には、アジアで日本以外唯一国内大学チームがある韓国から高麗大が来日、関東大学選抜(国立競技場)、早大(駒沢第二)、関学(西宮球技場)と3試合を行ったが、いずれも日本チームが快勝した。 ● 並列リーグ3年目を迎えた関東大学リーグは、シーズン前5つのリーグの編成替えを実施、日大が伝統校の多い東京6大学リーグへ、日体大が関東学生リーグへ、桜美林大がさつきリーグへ移り、関東選手権はこれまでの各リーグ優勝5校から、推薦3大学を加えた8チームのトーナメントとなった。日大はかろうじて所属する東京7大学リーグの優勝は遂げたが、関東選手権決勝は同じ東京7大学リーグから出場の法大に逆転で敗れた。1935年創部の法大は戦前・戦後を通じての初優勝を果たした。 ● 関西学生リーグは若手中心の関学の監督に武田建氏が就任、追手門大には1TD差の勝利だったが、他の試合には危なげなく勝利、武田建監督の就任1年目を優勝で飾り、リーグ24連覇を達成、このところ上位で安定してきた京大が2位となった。 ● ランの法大、パスの関学の初対戦となった第27回甲子園ボウルは15,000名の観客を集め開催、初出場にも動じない法大がFB川口久選手の3TDの活躍などで勝利し、輝く初の学生日本一となった。 ● 前年のユタ州立大の来日に続き、1月、日米交流の第2弾としてハワイ大学が来日。関西(西宮球技場)での全日本との試合の1週間後、第26回ライスボウルと同時開催で2試合目(国立競技場)を行った。ライスボウルの第1試合として開催された従来の東西の大学選抜戦は関西が勝利した。 ● 高校は、1954年の第1回大会から続いてきた全国高校タッチフットボール全国大会が、この年、第19回で最後の大会となり、滋賀の虎姫高が都立西高を下した。戦後、フットボールの発展に高校タッチフットボールが果たした役割は大きく、その延長として大学チームの興隆があった。同時に開催されたアメリカンフットボールの部は、関学高が日大櫻丘高を下し、3連覇を果たした。 	

日米交流、来日・渡米とも活発。高校、全国大会 3 日間のトーナメントを開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月27日 ・ 2月14日 ・ 4月27日 ・ 9月18日 ・ 10月 6日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベトナム和平協定調印 ・ 円、変動相場制に ・ ウォーターゲート事件、政治スキャンダルに ・ 国連総会で東西ドイツの国連加盟承認 ・ 第4次中東戦争勃発、第1次石油危機へ
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月 ・ 6月 ・ 9月21日 ・ 秋 ・ 翌年1月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ グアム大来日 (関西・関東で試合) ・ 関学、韓国遠征。高麗大、成均館大と対戦 ・ サイドワインダーズ、米本土遠征。ロヨラ大と対戦 ・ 関西学生リーグ、2部を3ブロック制に ・ ウェイクフォレスト大来日 (関西・関東で試合)

競技活動 40 年目を迎えた。

- 春先 3 月に前年度日本リーグの関東・関西の覇者、イエローシャークスとサイドワインダーズとの間で第 2 回東西王座決定戦が行われ、サイドワインダーズが 2 連覇を遂げた。また学生チームも参加する西日本選手権では、サイドワインダーズとブラックイーグルスの 2 年連続社会人チームの対戦となり、サイドワインダーズが優勝、第 19 回西宮ボウルは、サイドワインダーズ主体の全関西が、学生主体の全関東を下した。
- この年、関学の韓国遠征、グアムからグアム大学と J.F.ケネディ高校の帯同来日、チャック・ミルズ氏率いるウェイクフォレスト大学 (1974 年 1 月) 来日、逆に日本から関学高、東京ヴァンガードスのハワイ遠征、サイドワインダーズの米国遠征など、海外交流戦が盛んに行われ、近代フットボールでの更なる実力の向上に資した。
- 関東大学リーグは、4 季目の並列 5 リーグ制で開催、第 4 回関東選手権は駒沢陸上競技場に 2,000 名の観客の下に前年に続き東京 7 大学リーグの 1 位日大、2 位法大が決勝で対戦、両チーム譲らず 20-20 の引分け、両校優勝となった。甲子園ボウル出場は、両チーム 11 名のプレーヤーのそれぞれの抽選となり日大が出場権を得た。
- 関西では初めて北陸から福井大、金沢工大が加盟、24 校となり、近畿学生リーグを 3 ブロック編成とした。8 チームからなる 1 部相当の関西学生リーグは、監督 2 年目の武田建氏率いる関学と、1 年半の米国留学から帰国した水野彌一コーチ率いる京大がともに好調、リーグ戦は大いに盛り上がった。両校対決のリーグ最終戦は 5,000 人の観客を集め西宮球技場で開催、関学が 17-0 で勝利しリーグ 25 連覇を達成した。
- 日大・関学の 15 回目の対戦となった第 28 回甲子園ボウルは、前半 7-7 の息詰まる戦いを展開、後半、重量で優るラインの関学が力を出し 2TD、1FG を挙げ 24-7 で勝利、3 年ぶり 11 回目の優勝を果たした。関学の近代戦法が実を結んだ。
- 第 27 回ライスボウルは、当日、関東学生のウェイクフォレスト大学戦と従来からの東西学生選抜戦の 2 試合を開催、米軍と共催した第 8 回大会を除くライスボウル史上最大の 30,000 名の観客を集めた。東西大学選抜戦は、パス攻撃を中心とした関西が終始攻勢、47-0 と関東を零封、大勝した。
- 高校のアメリカンフットボールの第 4 回選手権は、初の関西開催となり西宮球技場に 8 校が集まり 3 日間のトーナメントで開催。決勝は関学高と日大櫻丘高の 4 年連続の対戦となったが関学高が勝利し、4 連覇を達成した。
- 関東では社会人にレナウン、三井物産などの企業チームの参加が増え 11 チームとなり、関東社会人アメリカンフットボール協会が設立された。徐々に社会人チームの活動が増え始めた。

この年の活動
(競技年度)

ボブ・ヘイズ氏の来日試合、大観衆を集める。社会で広く競技活動が報じられる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月 1日 ・ 8月 8日 ・ 10月 21日 ・ 11月 25日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本初の身障者専用スポーツ施設「大阪身障者スポーツセンター」オープン ・ ウォーターゲート事件でニクソン米大統領辞任 ・ IOC アマチュア規定改正 ・ 第1回世界スポーツ科学会議、モスクワで開幕
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 ・ 8月 ・ 8月 31日 ・ 秋 ・ 秋 ・ 10月 26日 ・ 11月 ・ 12月 ・ 12月 14日 ・ 12月 29日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボブ・ヘイズ氏来日（在日米軍チームに加わり、関東・関西で試合） ・ ハワイ・マウイ高来日（関学高、慶応高と試合） ・ アメリカンフットボール専門誌「FRESHDOWN」創刊 ・ 駒沢第二球技場にゴールポスト常設。キッキングが重要視される時代になる ・ 関西学生リーグ、2部を4ブロック制に ・ 第1回プレジャーボウル（後の平和台ボウル）。九州学生選抜－在日米軍佐世保 ・ 第1回ポテトボウル、札幌ラングラーズ－旭川大 ・ ノースウェスタン大来日（関西・関東で試合） ・ 第29回甲子園ボウル。この年から年間最優秀選手賞チャック・ミルズ杯を授与 ・ 関学高、高校アメリカンフットボール5連覇 ・ 九州アメリカンフットボール連盟設立
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>日本でのフットボール40周年のこの年、1939年東京オリンピックの男子100米走のゴールドメダリスト、NFLの代表的WRのダラス・カーボイズのボブ・ヘイズ氏が来日。在日米軍チームに加わり、関東（観客38,000人）、関西（観客28,000人）で全日本と対戦、社会的にも大きな話題となった。またNFL公式戦がテレビ定期番組で放送開始となり、ファッションにもフットボールが取り入れられるなど、一般からも強い関心を集めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 春季から関学の活躍が目立った。春の日大、明大との定期戦に勝利、西日本選手権では社会人のNACLを破り優勝、チームの中核となった西宮ボウルでも勝利した。 ● 社会人は新たな企業チームが台頭、10月に千葉天台競技場で、第1回ピーナツボウルをラングラーズ－三井物産、ヴァンガーズ－パリス東京の2試合で開催。スタンドの応援風景が話題を集めた。 ● 関東大学リーグでは、第5回関東選手権決勝はこの年も東京7大学リーグに所属する日大と明大の対戦となり、日大が若さとスピードで明大を圧倒し16回目の関東制覇を遂げた。 ● この年5校が新加盟し全29校となった関西では、近畿学生リーグを3ブロックから4ブロック編成とした。1部に相当する関西学生リーグは、関学が巧みな戦術で水野彌一新監督の下でウィッシュボーン体型を採用した京大を破って優勝した。京大が2位、以下、近大、甲南大となった。 ● 第29回甲子園ボウルは25,000人の観客を集め開催、5年連続の対戦となった関学－日大戦は、シーソーゲームの展開から史上に残る好試合を展開、関学が接戦を制し勝利、2連勝、12回目の優勝を遂げた。この年から甲子園ボウルの場で大学年間最優秀選手にチャック・ミルズ杯が授与されることになり、第1回目は柴田尚選手（関学）が受賞した。 ● 第28回ライスボウルは、翌年1月12日に開催、1か月の合同練習と、年末のノースウェスタン・カレッジ戦でチーム力をつけた関東が、関西の前半のリードを後半逆転し、前年の大敗の雪辱を遂げる3年ぶりの勝利を挙げた。 ● 社会人日本リーグは、関東地区はクラブチームリーグ、企業リーグに編成替えをし、両リーグ上位2チームによる優勝決定戦ではシルバースターが優勝、2連覇を達成。関西地区は、ブラックイーグルスが初優勝を飾った。 ● 第5回全国高校選手権は、関学高が初の決勝進出の法政二高を下し5連覇を果たした。 ● 来日が続く米国からはこの年12月、1973年NCAA2部優勝のアイオワ州ノースウェスタン・カレッジが来日、関東、関西でそれぞれの地区の大学選抜と2試合を開催した。 ● この年以降の主な公式規則変更は当協会HPで公開 ： 「日本協会HP」→「殿堂・歴史」→「アメリカンフットボール公式規則変更の歴史」 	

各地区で加盟校急増、全国的普及が開始。ジャパンプォール、始まる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月30日 ・ 5月16日 ・ 7月5日 ・ 7月20日 ・ 11月15日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ サイゴン陥落、ベトナム戦争終結 ・ エベレスト日本女子登山隊田部井淳子氏、女性として世界初の登頂成功 ・ 沢松和子・アン清村組、ウィンブルドン・テニス女子ダブルスで優勝 ・ 沖縄国際海洋博覧会開幕 ・ 第1回先進国首脳会議、フランスのランブイエで開催
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 春 ・ 4月1日 ・ 6月 ・ 5月23日～ ・ 7月6日 ・ 8月 ・ 9月 ・ 10月 ・ 11月 ・ 12月28日 ・ 秋 ・ 翌年1月18日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回全国歯科学生アメリカンフットボール競技大会(岐阜歯科大G) ・ 広島アメリカンフットボール連盟設立 ・ 北海道学生アメリカンフットボール連盟発足 ・ アメリカンフットボール・フェア開催(渋谷パルコ) ・ 第1回スズランボウル、札幌大-北海学園大、北大-札幌ラングラーズ(札幌大競技場) ・ ハワイ・カウアイ高来日(関学高、駒場学園高と試合) ・ 東海学生アメリカンフットボール連盟設立、5大学で関西学生リーグから独立 ・ 東北学生アメリカンフットボール連盟設立 ・ 社会人全日本(関東社会人)、フィリピン遠征(在比米海軍、同空軍と2試合) ・ 関大一高、関学高の6連覇を阻んだ東海大付高を破り、初の高校日本一 ・ 関西社会人リーグ発足 ・ 第1回ジャパンプォール開催(国立競技場)
この年の活動 (競技年度)	<p>この頃、関東、関西でのチーム増加が続いていたが、加えてその動きが日本全国に広まった。この年、北海道、東海、広島、九州でもチーム結成が進み、全国で11校が新加盟、競技活動範囲の広域化となった。特に東海地区は、関西学生リーグから独立し新たに5大学(愛知学院大、中京大、名古屋学院大、愛知大、岐阜大)で東海学生リーグを開催することになった。この結果、関西地区は、関西学生リーグと3ブロックからなる近畿学生リーグの編成となった。日本全国、各地区の連盟、事務局、委員会等各組織は大忙しの年だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 秋のシーズン開始前に1975年版の公式規則書が発行された。これまで、不定期的に発行されてきたが、この年以降、ほぼ隔年に発行の方針が策定され、また公式規則の制定、解釈をする競技規則委員会が水田吉春氏、古川明氏を中心に充実、規則適用、変更の仕組みが組織的に確立された。この年の公式規則変更で、キックオフ、およびスクリーメージキックでの「腰から下のブロック」が禁止された。この年以降、特にプレイヤーの安全性確保の観点からの公式規則変更が度々おこなわれた。 ● 関東大学リーグの第5回関東選手権では、準決勝で日大を破った日体大と明大が決勝で対戦、明大が快勝し優勝。日大はこの制度になって初めて決勝に進めず、また準決勝で明大と接戦を演じた防大の健闘が光った。 ● 関西学生リーグは、雨中の西宮球場で関学が京大に辛勝、リーグ戦連勝記録を139とした。 ● 7年ぶり2度目の関学対明大の対戦となった第30回甲子園ボウルは、関学が終始、明大を圧倒、甲子園ボウル最多となる得点、56-7で明大を破り3連覇を遂げた。 ● 第29回ライスボウルは接戦となったが、関西が、再三自陣1ヤードで関東の攻撃を止めた守備陣の健闘で、14-10の接戦を制し、11勝目をあげた。 ● 第6回高校全国大会は、関大一高とこれまで5連覇の関学高を準決勝で破った東海大付高で争われ、関大一高が初めての優勝を遂げた。 ● 社会人日本リーグは、関東ではシルバースター、関西ではサイドワインダーズが優勝。関西地区のチーム増加に伴い、関西社会人リーグが発足した。 <p>米国建国二百年を記念して、米大学4年生の選手からなる米国NCAA公認の東西オールスター戦ジャパンプォールがスタートした。来日チームには大学卒業後、プロに進む選手も多く、社会的にも大きな話題となり国立競技場に68,000名の観客を集めた。ジャパンプォールは以降、1993年まで18回続いて開催され、我が国のフットボール界の発展に大きな影響を与えた。</p>	

関学、リーグ戦連勝記録 145 で止まる。京大台頭、関西 2 強時代に。本場米国の公式戦日本開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 4日 ・ 3月 1日 ・ 7月 1日 ・ 7月 4日 ・ 8月 26日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米上院でロッキード事件発覚。7月 27日：田中角栄前首相逮捕 ・ 後楽園球場、日本初の人工芝に ・ 南北ベトナム統一、ベトナム社会主義共和国成立 ・ アメリカ独立宣言 200 周年 ・ エボラ出血熱、世界初の患者発生
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 7日 ・ 4月 ・ 5月 22日 ・ 5月 23日 ・ 6月 16日 ・ 8月 1日 ・ 8月 11日 ・ 8月 16日 ・ 秋 ・ 秋 ・ 11月 13日 ・ 11月～12月 ・ 12月 ・ 翌年 1月 15日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 後楽園人工芝化記念グリーンボウル、全東日本－全西日本 ・ 東日本実業団アメリカンフットボール連盟設立、東日本実業団リーグ発足 ・ 九州学生選抜、韓国遠征。九州学生選抜－韓国学生選抜（ソウル運動公園） ・ 第 1 回オイスターボウル（広島県宮陸上競技場） ・ 第 1 回パールボウル、日大－東京ヴァンガーズ（後楽園球場） ・ キディ・フットボール教室、第 1 回パス・キックコンテスト開催（よみうりランド） ・ アメリカンフットボール・フェア開幕（科学技術館） ・ NFL スターボウル、サンディエゴ－セントルイス（後楽園球場） ・ 関東大学リーグ、10 校による医科歯科リーグ創設 ・ 東北学生連盟、第 1 回リーグ戦開催 ・ 京大、関学のリーグ戦連勝記録を 145 で止める。リーグ戦、関学と同率の初優勝 ・ 高校選手権を 6 校増やし 14 校によるトーナメント戦へ ・ コーネル大軽量級チーム来日（関東・東海で試合） ・ 沖縄ボウル、関西学生選抜－在沖米軍（沖縄市宮競技場）
この年 の活動 (競技年度)	<p>後楽園球場のフィールドが人工芝に改装され、記念試合として、北海道、九州等の選手を含んだ東日本選抜対西日本選抜のグリーンボウルが 3 月開催された。土のグラウンドから、天然芝（既にボウルゲームでは使用）、そして人工芝と競技環境が変わって最初の年であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本場米国チームの来日は続き、NFL プレシーズン試合スターボウル（セントルイス－サンディエゴ）と米国カレッジの我が国における最初の NCAA 公式戦パイオニアボウル（グランプリング州立大－モーガン州立大）が人工芝となった後楽園球場のナイターとして開催され、日本のファンを魅了した。 ● またシーズン最後には、米国 IVY リーグのコーネル大学軽量チームが来日、国立競技場と瑞穂競技場で 2 年振りとなる日米交流の試合を行い、2 戦目に全日本が勝利、対米国戦初勝利を挙げた。第 2 回ジャパンボウルも多くの観客を集め開催、来日米国チームの試合開催が多い年であった。 ● かねてから準備を進めてきた東北学生リーグが、この年、4 大学で活動を開始した。 ● 関東大学リーグは、関東選手権で明大が日大を準決勝で破った東海大に勝利、優勝した。日大は 2 年連続関東選手権決勝に進めなかった。 ● 関西学生リーグは、京大が関学に勝利、関学のリーグ連勝記録を 145 で止めた。1 敗でともにリーグ優勝となった関学と京大は、甲子園ボウル出場をかけて万博陸上競技場に 15,500 名の観客を集め再戦、関学が勝利し甲子園ボウル 28 回連続出場を決めた。関学、京大の関西 2 強時代の到来だった。 ● 2 年連続の関学－明大となった第 31 回甲子園ボウルは、第 4Q に逆転した関学が接戦を制し、3 度目の 4 連覇を遂げた。 ● 第 30 回ライスボウルは 1 月 9 日開催、関学、京大勢が主力の関西が終始主導権をとり勝利、対戦成績を 12 勝 18 敗とした。 ● 関東では実業団チームが関東社会人協会に復帰。実業団チームの招待試合として初夏に後楽園球場でパールボウルを開催、第 1 回は東京ヴァンガーズが日大と対戦した。パールボウルの実業団が関東学生チームを招待とする形式は 1984 年の第 9 回大会まで続き、初夏、ナイターで観戦する関東の話題のカードだった。広島では、第 1 回オイスターボウルが開催され、広島ヴァンガーズ－横浜ハーバーズ、オール広島－近畿コカ・コーラの 2 試合が行われた。 ● 第 7 回高校全国大会は、4 年ぶりに関東開催となった駒沢第二球場で開催、関学高が早大学院を破り 6 回目の全国制覇を遂げた。 	

甲子園ボウル、関学史上初の5連覇。ライスボウル、積雪で史上初の延期開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月26日 ・ 3月27日 ・ 6月13日 ・ 8月20日 ・ 9月3日 ・ 11月30日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本体育協会、公認スポーツ指導者制度制定 ・ カナリア諸島でジャンボ機同士の史上最悪の衝突事故 ・ 全米女子プロゴルフ選手権で樋口久子氏優勝。日本人初のメジャータイトル獲得 ・ 無人宇宙探査機「ボイジャー2号」打上げ。9月5日「ボイジャー1号」打上げ ・ プロ野球王貞治氏、756号の本塁打 ・ 米軍立川基地返還
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月13日 ・ 春 ・ 秋 ・ 秋 ・ 12月4日 ・ 12月11日 ・ 12月 ・ 12月25日 ・ 翌年1月15日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初の中学生アメリカンフットボール試合。麻布中－浅野中・日大中連合（浅野学園G） ・ 第1回刈谷ナイトゲーム、東海連盟ブロック別選抜戦 ・ 北海道学生リーグ、5大学でリーグ戦開始、九州学生リーグ、4大学でリーグ戦開始 ・ 東海連盟、2ブロック制へ。関西学生リーグ、公式記録の公表開始 ・ シーガルボウル、関東クラブチーム選抜－在日米軍横須賀（三ツ沢競技場） ・ 第32回甲子園ボウル、日大を破り関学が史上初の5連覇達成 ・ ブリガムヤング大来日（関東・東海で試合） ・ 駒場学園高、関学高を破り関東勢初のアメリカンフットボール高校日本一 ・ 第31回ライスボウル、当初予定の1月3日が積雪のため史上初の延期開催
この年の活動 (競技年度)	<p>新規加盟チームが、この年も多かった。関東大学リーグには、医科歯科大学10校が加盟、2ブロック編成で医科歯科リーグ戦を開始。加盟大学数は東日本56、西日本49、合計105大学となった。また北海道学生リーグがリーグ戦を5校（札幌大、北海道学園大、北海道大、旭川大、酪農学園大）で、九州学生リーグが4校（福岡大、西南学院大、久留米大、福岡歯科大）で開始。東海学生リーグは、一挙に新加盟が6校となり、1部、2部制の編成となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 前年、関西学生リーグで関学と同率優勝した京大が、春の西日本選手権で関学、ブラックイーグルスを下し優勝した。 ● 混戦となった関東大学リーグは、日大、明大、法大が東京7大学リーグで3すくみの3校1位となり、前年順位で日大と明大が関東選手権に出場、第8回関東選手権で日大が明大を破り、3年ぶりの甲子園出場を決めた。 ● 関西学生リーグは、リーグ最終戦、小雨の日生球場で関学と京大が全勝対決、第3Qまで京大が2TD差のリードをしたが、第4Qに関学が3TDを挙げ逆転勝利、「涙の日生球場」と語り継がれる劇的な試合を飾った。 ● 第32回甲子園ボウルは、過去最高の35,000名の観客を集め開催、2年ぶり17回目の関学－日大のカードとなったが、攻守に関学が上回り、史上初の5連覇を遂げ関学第2期黄金時代を築いた。 ● 翌年1978年1月3日に開催予定されていた第31回ライスボウルは、前日の積雪でグラウンドが厚く雪に覆われ、同15日に延期され開催。ライスボウルが予定日に開催できず延期されたのは、雨天順延をあらかじめ決めていた第5回大会までをも含み、またこの年以降を含み、この第31回大会のみであった。延期された試合は7,000人が観戦、関東が4つのFGを活かし、3年ぶりの勝利をあげた。 ● 社会人は東実業団リーグでレナウンが初優勝。社会人リーグはシルバースターが優勝。関西はサイドワインダースとブラックイーグルスの同率優勝となった。 ● 翌1978年1月8日、神戸中央球技場で開催された第27回神戸ボウルは、関西社会人選抜が初めて関西学生選抜に勝利した。 ● 第8回高校全国大会は神戸中央球技場で開催、大型チームの駒場学園高が関学高を下し初優勝を遂げた。高校がアメリカンフットボールで開催されるようになってからの関東チームの初優勝だった。 ● 全米20位の強豪ブリガムヤング大学が12月に来日、東・西の全日本と対戦したが、大差で全日本は敗れた。 ● 第3回となるジャパンボウルは、前年来日しその後、癌と闘病の末亡くなったQB ジョー・ロス氏の追悼試合として翌1978年1月14日に国立競技場で開催された。 ● わが国で初めてのアメリカンフットボールによる中学生の試合が、浅野学園グラウンドで2月13日、麻布学園中－浅野学園中・日大中連合で開催された。 	

日大、ショットガンで復活。急激な社会の関心増大と普及への警鐘

社
会

- ・ 5月20日
- ・ 6月28日
- ・ 8月12日
- ・ 10月16日
- ・ 11月21日

- ・ 新東京国際空港開港（成田）
- ・ 日本オリンピックアカデミー発足
- ・ 日中平和友好条約調印
- ・ 青木功氏、世界マッチプレー選手権で初優勝
- ・ ユネスコ「体育・スポーツに関する国際憲章」採択

フ
ット
ボ
ール

- ・ 4月 1日
- ・ 4月 9日
- ・ 秋
- ・ 9月 3日
- ・ 11月 5日
- ・ 12月 2日
- ・ 翌年1月14日
- ・ 翌年2月19日

- ・ ジョージ・ワシントン高（グアム）来日、駒場学園高と試合
- ・ 横浜スタジアムオープニング記念フェスティバル開催
- ・ 関東大学リーグ、6校による新加盟リーグ創設
- ・ NCAA 公式戦よみうりボウル、ユタ州立大-アイダホ州立大（西宮球場）
- ・ 関東大学選手権に北海道から札幌大、初出場
- ・ NCAA 公式戦横浜ボウル、プリガムヤング大-ネバダラスベガス大（横浜スタジアム）
- ・ 愛媛県連盟（後の四国連盟）第1回オレンジボウル、四国選抜-中国選抜（松山市営球場）
- ・ プライベートリーグ、第1回横浜フィエスタボウル（横浜スタジアム）

こ
の
年
の
活
動
（
競
技
年
度
）

- 米国 NCAA 公式戦がこの年、4 試合、日本で開催された。4 試合は、関西初の NCAA 公式戦となった西宮球場でのよみうりボウル（ユタ州立大-アイダホ州立大）、12 月には改装、人工芝化となった横浜スタジアムでの横浜ボウル（プリガムヤング大-ネバダラスベガス大）、国立競技場での第 2 回ミラージュボウル（テンプル大-ボストンカレッジ）、翌 1 月の第 4 回ジャパボウルであり、ジャパボウルには QB ジョー・モンタナ氏が来日し、国立競技場に 55,000 名が集まった。
- この年も関東 3 校、関西 3 校、九州 1 校の加盟で大学は全部で 112 校となった。一方で、急激に普及した日本フットボール界だが死亡、麻痺等の重大事故が相次ぎ、選手への安全管理体制に課題が多く残る年となった。
- 関東大学リーグは、春の試合で日大と関学に勝利した日体大が目撃されたが、秋の公式戦では関東大学選手権準決勝で法大に接戦で敗れ、決勝はともに東京 7 大学リーグに所属する日大と法大の対戦となった。決勝は日大がショットガン体型の攻撃の威力で大型ラインの法大を大差で破り優勝した。なお、前年度発足した北海道連盟から札幌大が関東選手権の予選として出場、宇都宮大と対戦した。
- 関西学生リーグは、関学と京大の全勝対決となった長居陸上競技場に 18,000 名の観客を集め開催。前年の「涙の日生球場」の再現となった。試合は両軍堅守の戦いとなり、逆転、再逆転から最後まで結果が分からない好試合となり、関学が 10-8 で辛勝。3 位は京大に善戦した近大となった。
- 第 33 回甲子園ボウルは、2 年連続の日大と関学の対戦、前年に続く 35,000 人の観客となり開催。後半 2 人 QB のショットガン、ドラゴンフライ体型の日大が一方向的に得点を挙げ 63-7 で圧勝した。日大は 7 年ぶり、12 度目の全国制覇を遂げ、関学の 6 連覇を阻むとともに、以降の日大 5 連覇となるスタートの年となった。
- 第 32 回ライスボウルは、守備戦となったがパス攻撃で攻める日大勢の活躍で関東が勝利、過去最高の 63 点を挙げ 2 連覇を遂げた。
- 第 9 回高校全国大会は、駒沢第二球技場で開催、慶応高が関学高に逆転勝ち、初優勝を遂げた。
- 社会人は東実業団リーグでレナウンが、社会人リーグはシルバースターが、関西ではブラックイーグルスが優勝した。春の後楽園球場で開催された第 3 回パールボウルは、初めてレナウンが、日大と対戦した。

近年、西高東低の勢力図であったが、この年は、西宮、甲子園、ライスの 3 大ボウルゲーム、および高校選手権とも東が勝利し、数年間続いた西高東低に終止符が打たれた。

日大、ショットガンで圧倒的な得点力。名門ノートルダム大来日。ポール・ラッシュ博士永眠

社会

・ 1月 1日
・ 3月 28日
・ 6月 28-29日
・ 10月 26日
・ 11月 18日

・ 米、中国と国交樹立、中華民国と国交断絶
・ 米スリーマイル島原発で放射能漏れ事故
・ 第5回 G7 サミット、東京で開催
・ WHO、天然痘根絶の宣言
・ 国際陸連初公認の女子マラソン、第1回東京国際女子マラソン開催

フットボール

・ 秋
・ 秋
・ 10月 7日
・ 12月 12日
・ 翌年1月 13日

・ 関西学生リーグ、近畿学生リーグに新ブロックを創設、5ブロック制に
・ 北陸学生連盟設立、4校でリーグ戦開幕
・ 愛媛連盟、初のリーグ戦開始
・ ポール・ラッシュ博士永眠
・ 第5回ジャパンボウル、横浜スタジアムに移し開催

この年の活動
(競技年度)

- 北陸地区で3校（金沢工業大、福井大、金沢経済大）による北陸学生リーグが活動を開始した。
- 初夏の風物詩となってきたパールボウル、第4回を迎え、日大、日体大の出身者を集めた新鋭二葉組が初めて実業団リーグを勝ち抜き日大と対戦、ショットガン攻撃の波に乗る日大が完勝した。
- 第25回を迎えた西宮ボウルは、全関東が日大のQB陣のショットガン体型から繰り出す攻撃で全関西に完勝、対戦成績を11勝13敗1分けとした。
- 関東大学リーグでは、前年全国制覇した日大が、東京7大学リーグで平均得点88点、失点は全体で13点と圧倒的強さで優勝。駒沢陸上競技場で開催された関東選手権決勝でも法大を大差で破り圧勝した。関東選手権は、この年も北海道から北海学園大が予選に参加した。
- 関西地区では北陸学生リーグの独立で、関西学生リーグ、近畿学生リーグ（5ブロック）、東海学生リーグ（2ブロック）、北陸学生リーグ、九州学生リーグのリーグ編成となった。関西学生リーグは、同志社大が関学に勝利したものの関大に敗れ、関学と同志社大が1敗同率優勝。同志社大は1946年以来34年ぶり2度目の優勝であった。甲子園ボウル出場をかけた両チームの対戦は関学が勝利し31年連続出場を決めた。
- 第34回甲子園ボウルは30,000の観客を集め開催、ショットガン体型に複数のQBを配置するドラゴンフライを織り交ぜた日大が各Q得点を重ね関学に圧勝、2連覇を果たした。
- 第33回ライスボウルは翌1980年1月4日国立競技場で開催、甲子園ボウルの勢いそのまま、関東が勝利した。
- 第10回高校アメリカンフットボール全国大会は、西宮球技場で開催、ともに準決勝で関東勢を破った関西勢の決勝戦となり、関学高が関西大倉高を下し、3年ぶり7回目の優勝を果たした。
- 社会人は、東実業団リーグではレナウン、社会人リーグでは関東でシルバースター、関西でブラックイーグルスが優勝し前年度と同じ結果となった。
- 11月25日、米国大学公式戦であるミラージュボウルに、米国フットボール界の象徴である名門ノートルダム大学が出場しマイアミ大と対戦、大きな話題を集めた。
- 第5回ジャパンボウルは、この回から横浜スタジアムにグラウンドを移し翌年1980年1月13日に開催された。試合開始から雪が降り始め徐々に積もる悪コンディションだったが、熱戦が繰り広げられた。
- この年、日本協会理事長（第10代）に安藤信和氏が就任、1993年までの14年間、その任にあたられた。

「日本アメリカンフットボールの父」ポール・ラッシュ博士が、この年12月12日、自らが再建に関わった聖路加国際病院で永眠、日本とフットボールを愛した82歳の生涯を日本で閉じた。

日大、圧倒的攻守で3連覇。加盟校急増続く。関東勢3大ボウルゲーム9連勝

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月26日 ・ 1月20日 ・ 4月24日 ・ 9月22日 ・ 12月12日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ エジプト、イスラエル国交樹立 ・ 米、モスクワ五輪ボイコット決定。5月24日、日本も不参加決定 ・ 国立オリンピック記念青少年総合センター発足 ・ イラン・イラク戦争勃発 ・ 日本車、生産台数で世界一に
フ ツ ト ボ ウ ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋 ・ 秋 ・ 10月 3日 ・ 10月26日 ・ 11月24日 ・ 12月21日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東北学生リーグ、新たに6校でリーグ戦開催 ・ 広島学生リーグ、新たに3校でリーグ戦開催 ・ 湖北ファイニーズ、地域貢献でフットボール界初の文部大臣賞受賞 ・ 第1回びわこボウル開催 ・ 第11回関東選手権第1回パルサーボウル、日大-日体大(横浜スタジアム) ・ 東日本社会人協会設立。記念試合横浜シティボウル、東日本社会人選抜-東日本実業団選抜(横浜スタジアム)
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>1975年から活動を始めていた東北地区で6校(東北学院大、日大工学部、仙台大、北里大水産学部、東北工業大、山形大)による秋季の東北学生リーグが、広島で3校(広島大、広島経済大、広島修道大)による広島学生リーグが活動開始、日本全国での活動が活発になってきた。加盟校の急増が続く中、関東社会人が関東協会から独立、関東協会は大学が加盟する組織となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 第26回西宮ボウルは雨天の中での開催、全関西の守備陣が健闘したが、ショットガン体型の全関東が勝利した。 ● 関東大学リーグは、翌年からのリーグ編成を並列リーグから、1部~3部制とすることに決定、この年並列5リーグが最後の年となった関東大学リーグは、翌年の1部リーグ入りを目指した熾烈なリーグ戦となった。各リーグの優勝校を中心としたトーナメントの形態の関東選手権は、この年、最後となったが、北海道から北海学園も参加し開催、決勝は決勝進出2度目となる日体大を日大が大差で下し、4年連続となる優勝を遂げた。 ● 近年接戦が続く関西学生リーグは、リーグ戦で京大に敗れた関学、関学に敗れた近大がともに6勝1敗の同率優勝となった。甲子園ボウル出場をかけた両校による決定戦は、万博陸上競技場で開催、最後まで勝敗が分からない接戦の末、関学が辛勝し、32回連続の甲子園ボウル出場を決めた。 ● 30,000人の観客を集めた第35回甲子園ボウルは第2Qまで7-7の同点であったが、ラン、パス、インターセプト・リターンのTDをあげた日大が圧倒的な攻守で関学を撃破し42-7で勝利、3連覇を達成した。年間最優秀選手賞チャック・ミルズ杯は2年連続で日大QB鈴木隆之選手に贈られた。2年連続は初めてのことだった。 ● 第34回ライスボウルは18,000名の観客を集め開催、前半で差をつけた関東が厚い守備陣が守り勝利、4連覇。通算成績を22勝12敗とした。これで西宮、甲子園、ライスの3大ボウルは関東勢9連勝となった。 ● 第11回高校全国大会は、駒沢第二球技場で開催、関学高が駒場学園高を破り、3年連続、11回の大会開催で8回目の優勝と果たした。 ● 関東協会から独立した関東社会人は、東日本社会人協会を設立、実業団リーグはレナウン、社会人リーグはシルバースターが優勝し、関西社会人は松下電工が優勝した。 ● 東日本社会人協会創立を記念した社会人对実業団選抜対抗戦・横浜シティボウルが開催され、社会人選抜が24-0で実業団選抜に快勝した。 ● 11月に行われたミラージュボウルでは国立競技場が超満員の観衆で埋まり、人気のUCLAとオレゴン州立大学の対戦に声援を送った。 	

関東大学リーグ、並列リーグから3部制に。社会人の活動本格化、東西社会人王座決定戦開催

社
会

- ・ 2月 8日
 - ・ 3月 20日
 - ・ 4月 12日
 - ・ 9月 2日
- ・ 第1回東京国際マラソン開催
 - ・ 神戸ポートアイランド博覧会開幕
 - ・ コロンビア号が初のスペースシャトルミッションで打上げ
 - ・ 日本体育協会、冠大会を事実上承認

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 9月
 - ・ 秋
 - ・ 秋
 - ・ 秋
 - ・ 12月 19日
 - ・ 12月 20日
- ・ 関西学生連盟、主会場で計時盤使用
 - ・ 広島、四国学生リーグ、中国四国学生リーグとしてリーグ戦試行(翌年正式発足)
 - ・ 九州学生リーグ、1、2部制に
 - ・ 関東大学リーグ、並列制から3部制に
 - ・ グラム大-日体大(駒沢第二)
 - ・ 第1回東西社会人王座決定戦、シルバースター-松下電工(横浜スタジアム)

こ
の
年
の
活
動

(
競
技
年
度
)

過去4年間空席となっていた日本協会会長に、森田一氏が就任、第4代会長として2005年までの25年間、フットボール興隆期の会長を務められた。

- 新加盟大学は東日本で9校、西日本で6校となり、151校となった。広島学生リーグに四国のチームが加わり、6校(愛媛大、広島経済大、広島修道大、広島大、山口大、島根大)の中四国学生リーグとして拡大した。
- 5月10日に開催された西日本選手権では、前年度近畿学生リーグの大阪市立大が躍進、決勝で関学に挑み健闘したが敗れ準優勝となった。
- 関東大学リーグが11年間にわたる並列制から直列の3部制(1部は2つのブロック(ブロック内6校))に編成替え。1部リーグの両ブロック1位の対戦を「パルサーボウル」として横浜スタジアムで行うこととした。そのパルサーボウルではそれぞれのブロックで1位となった日大と日体大が25,000名の観客の下で対戦。日体大が先制したが、日大が逆転勝利、5年連続21回目の関東優勝となった。
- 関西学生リーグは、3年ぶりに関学と京大が全勝対決。対京大作戦を準備して試合に臨んだ関学が開始から終了まで試合を制し優勝。甲子園ボウルの33年連続出場を決めた。以下、近大、大体大となり、初めて大体大が上位グループになった。
- 第36回甲子園ボウルは21回目の日大-関学の対戦となったが、点の取り合いとなり、後半の関学の猛追をかわした日大がショットガン体型からの攻撃で42-31の勝利、4連覇を果たした。この勝利で甲子園ボウルの単独優勝回数を14回とし、関学の13回を超えた。学生の年間最優秀選手賞チャック・ミルズ杯は、初めてラインから日大TE、渋谷光二選手に贈られた。
- 第35回ライスボウルは第3Qで関学勢の活躍で9-3と関西がリードしたが、関東がキックオフリターンの89ヤードTDから逆転勝利、5連覇23回目の勝利を挙げた。
- 第12回高校選手権は西宮球場で開催され、前年同様、力の駒場学園高と技の関学高の対戦となったが、重量ラインの駒場学園高が勝利、4年ぶり2回目の優勝となった。
- 東日本実業団リーグは、各ブロック1位のレナウンと日産で優勝決定戦が行われ延長戦の未引分け、リーグ戦の得失点差でレナウンが優勝となった。この年より、東西社会人王座決定戦が開催され、横浜スタジアムでの第1回大会で、シルバースターが松下電工を接戦で破り初優勝した。この東西社会人王座決定戦は、1985年1月開催の第4回まで開催された。
- 米大学公式戦第5回ミラージュボウルは、11月29日国立競技場に75,000人の観客で開催され、空軍士官学校がサンディエゴ州立大を破った。

この年、5大ゲーム(西宮、甲子園、ライス、社会人選手権、高校)すべてを関東側が制した。

日大も5連覇達成。京大、関学の連覇止め甲子園ボウル初出場。歴史の節目のシーズンとなる

社
会

- ・ 2月 7日
 - ・ 4月 1日
 - ・ 4月 2日
- ・ IOC 医事委員会、筋肉増強剤のテストロンを禁止薬物に
 - ・ 日本体育協会、公認スポーツドクター制度発足
 - ・ アルゼンチン、イギリスでフォークランド紛争勃発。6月14日：紛争終結

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 9月 4日
 - ・ 11月 21日
 - ・ 12月 5日
 - ・ 12月 12日
 - ・ 12月 26日
 - ・ 翌年1月1日
- ・ 駒沢第二、計時盤設置
 - ・ 関西学生リーグ、京大、関学を破り関学のリーグ34連覇を止める
 - ・ 実業団リーグ、ニッサンがレナウンを破り優勝
 - ・ 第37回甲子園ボウル、日大5連覇。京大初出場
 - ・ 第13回高校選手権、関学高-慶応高、高校初のテレビ中継(横浜スタジアム)
 - ・ 最後の学生選抜戦第36回ライスボウル、関東が6連勝。関東24勝関西12勝で終える

こ
の
年
の
活
動
(
競
技
年
度
)

1948年第4回大会から33年連続で甲子園ボウル出場を続けていた関学がついに関西学生の覇者の座を京大に譲った。春夏の多くの重大事故の発生、関学の無冠、東西学生選抜としては最後となるライスボウルなど、1934年の競技開始から49年目、フットボールの歴史の中で特に記憶に残る年であった。

- 春季の練習・試合で3名、8月に練習で2名の選手が死亡する事故が起きた。これまでにない事故件数でもあり、協会、各組織で緊急な周知、安全対策等が行われた。
- 第28回西日本選手権は、関学が2回戦で松下電工に敗れ、京大が準決勝でサイドワインダーズに敗れ、社会人・学生の実力接近の時代となった。同じく関西の春のイベント、第28回西宮ボウルは、関東が49-0の大会史上最大の得点差で勝利した。
- 関西学生リーグ最終週、長居陸上競技場に超満員20,000名の観客を集めて開催された関学と京大の全勝対決は、京大重量ラインが3度のゴールライン間近の関学の攻撃を守りきり、京大が17-7で勝利、初のリーグ単独優勝を遂げ、関学は34年目の無冠となった。監督就任9年目の水野彌一監督率いる京大は1976年同率優勝を遂げてから6年ぶり2回目のリーグ制覇、初の単独優勝を飾った。関学は1976年リーグ戦145連勝で止められてから以降も、リーグ戦を競りながらも制し優勝を飾ってきたが、ついにその座を明け渡すこととなった。
- 関東大学リーグは、関東選手権が3年連続日大-日体大の対戦となり、前日体大が守備ラインを随時交代させるラッシュ作戦で善戦したが、後半ショートパスで逆転したのち、縦横の攻めを展開、日大が大差で勝利した。
- 第37回甲子園ボウルは、史上2番目となる観客32,000名が見守る中、念願の初出場の京大だったが、スピードで優る日大が重量ラインの京大を大差で下し勝利、関学と並ぶ全国5連覇を達成、16度目の王座についた。京大の甲子園ボウル初出場は、社会で大きな話題となった。
- 翌1983年度から学生・社会人間の全日本選手権となるライスボウルは、この年が最後の関東、関西の学生選抜戦となったが、関東が辛勝し最後のオールスター戦を3度目の6連勝で飾った。通算成績は、関東が24勝、関西が12勝であった。
- 第13回高校選手権は初めて横浜スタジアムで開催、雨中、接戦となる攻防を関学高が慶応高を制し、2年ぶり9度目の優勝を果たした。
- 東日本実業団はニッサンが初優勝。第2回東西社会人選手権は前回大会と同じ顔合わせとなりシルバースターが松下電工を僅差で下した。
- 第6回ミラージュボウルは11月28日、国立競技場、ほぼ満員の観客を集め国立競技場で開催。1981年全米第1位のクレムソン大がウェイクフォレスト大との接戦を制した。

ライスボウルが、大学－社会人の全日本選手権に。日本フットボール 50 年を祝う

社会

- ・ 4月 4日
 - ・ 4月 15日
 - ・ 5月 26日
 - ・ 9月 1日
 - ・ 10月 6日
- ・ NHK「おしん」第1回放映
 - ・ 千葉県浦安市に東京ディズニーランド開園
 - ・ 日本海中部地震発生 (M7.7)
 - ・ ソ連領空侵犯で大韓航空機撃墜
 - ・ 国際スポーツフェア'83 秋、東京で開催

フットボール

- ・ 5月 3日
 - ・ 5月 29日
 - ・ 秋
 - ・ 12月 10日
 - ・ 12月 11日
 - ・ 12月 25日
 - ・ 翌年 1月 3日
 - ・ 翌年 1月 15日
- ・ 関東協会、早慶戦で初のミニ FM 局実施
 - ・ 第1回北陸ボウル、北陸学生連合－京都産業大 (金沢市宮競技場)
 - ・ 日大、関東大学リーグ 50 連勝
 - ・ 第1回実業団王座決定戦、レナウンが松下電工を下す (西が丘競技場)
 - ・ 第38回甲子園ボウル、京大、日大を下し初の学生日本一
 - ・ 第14回高校選手権、慶応高、関学高、引分けて史上初の両校優勝
 - ・ ライスボウル、東西大学選抜から全日本選手権に。京大がレナウンを下し初代日本一。この年から優秀選手にポール・ラッシュ杯を授与
 - ・ 東西の大学 4 年生の選抜試合、第1回カレッジ・シックボウル開催 (駒沢陸上)

この年の活動 (競技年度)

1934年の日本の最初のシーズンから半世紀、競技活動 50 年目を迎えた。日本フットボール誕生 50 周年を記念して、ボウルゲームの新設、模様替えが行われ記念すべき年となった。近年の社会人フットボールの興隆を反映し、ライスボウルは学生－社会人のチャンピオン同士の全日本選手権となった。これに伴いこれまで OB を含めた選抜チームが対戦した西宮ボウルは、ライスボウルを引継ぎ学生のみでの東西大学選抜対抗戦となった。

- 関東大学リーグ関東選手権第3回パルサーボウルは、ブロック戦で明治との全勝対決を制した日大と、夏のハワイ合宿で鍛えた日体大の4年連続の対戦となったが、日大が勝利、優勝を飾った。
- 関西学生リーグは、3年連続京大と関学のリーグ最終戦での全勝対決となった。京大が前半 30-14 と大きくリードしたが、後半関学が猛追、終了2分前に TD を挙げ 30-28 と2点差まで迫ったが、同点を狙った2点のトライが京大に抑えられ試合終了。京大が前年に続く2連覇を遂げた。
- 第38回甲子園ボウルは 32,000 人の観客を集め2年連続で京大と日大が対戦し、京大が重量ラインで攻守に日大を圧倒、前年の雪辱となる日大の6連覇を阻むとともに、初の大学王座に就いた。京大の大学日本一の達成は、この年も社会で大きな話題を集めた。
- 社会人のライスボウル出場をかけた第1回実業団選手権は西が丘競技場で開催され、レナウンが松下電工を破り初代のチャンピオンとなった。クラブチームの王者決定戦となった第3回東西社会人王座決定戦は、シルバースターがブラックイーグルスを破り3連覇を果たした。
- 日本フットボール 50 周年を記念して初の日本選手権となった第37回ライスボウルは 35,000 名の観客を集め、学生王者京大と社会人王者レナウンが国立競技場で対戦、最後まで息詰まる展開となったが、京大がレナウンを 29-28 の接戦で下し優勝、記念すべき第1回の全日本王座を獲得した。この年の日本選手権化を記念し最優秀選手にポール・ラッシュ杯を授与することとし、第1回受賞者は梅津泰久選手 (京大) が選ばれた。この初の日本選手権開催と併せてライスボウルの開催日を従来の1月15日から1月3日に開催することとし、この1月3日の開催日はその後も続いた。
- 卒業する大学4年生の選抜試合、第1回カレッジ・シックボウルが新たに誕生し、翌1984年1月15日、駒沢陸上競技場で開催され関東4年生選抜が第1回の勝利をした。
- 全国高校選手権は、関学高と慶応高が史上初の同点試合となり、両校が優勝をした。
- 第9回ジャパンボウルは、史上最多14名のオールアメリカン迎え開催、第7回ミラージュボウルは、1982年全米2位のサザンメソジスト大とヒューストン大が対戦した。
- 第3回東西社会人王座決定戦は、シルバースターとブラックイーグルスの間で戦われ、シルバースターが勝利した。

活動 51 年目	1984年 (昭和59年)
----------	----------------------

大学リーグ、劇的試合が続く。甲子園ボウル、日大、関学両校優勝

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6月 ・ 7月28日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本人の平均寿命世界一へ ・ 第23回夏季オリンピック・ロサンゼルス大会開幕、共産圏不参加
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6月 ・ 9月1日 ・ 12月4日 ・ 12月9日 ・ 12月16日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月13日 ・ 翌年2月5日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ NCAAルール委員会セクレタリ、ディビッド・ネルソン氏初来日。クリニック開催 ・ 日本協会50周年史「限りなき前進」発行 ・ 第1回西日本学生王座決定戦、西南学院大-広島大(九州大学貝塚グラウンド) ・ 第39回甲子園ボウル、日大、関学引分けて両校優勝。ライスボウルは抽選で日大出場 ・ 東海連盟、学生-社会人選抜対抗戦第1回名古屋ボウル開催(名古屋鶴舞陸上競技場) ・ 第38回ライスボウル、日大、レナウンを下し初優勝 ・ 第34回神戸ボウル、この年から全日本社会人選手権として開催 ・ 日本アメリカンフットボール50周年祝賀会。8名に功労賞(東京アメリカンクラブ)

日本のフットボールは、この年満50年、活動51年目を迎えた。それを祝い1985年2月5日、東京アメリカンクラブで50周年祝賀会を開催、531名の出席者で盛大に祝った。席上、これまでの協会の発展に貢献された8名の方に功労賞が贈られた。

- この年の活動 (競技年度)
- 6月、NCAAルール委員会セクレタリのディビッド・ネルソン氏が初来日、関東・関西でルール説明会を開催した。以降、NCAAと日本のパイプが強まり日米間の緊密な関係が構築された来日であった。
 - 競技開始20周年記念として開始された西宮ボウルは、第30回大会を迎えた。試合は関東選抜が勝利、対戦成績を17勝12敗1分けとした。
 - 関東の学生と社会人の春の対戦、第9回パールボウルは、レナウンが先制したものの日大が逆転、日大が7年連続8度目の優勝、翌年から社会人間の対戦となるため最後の社会人-学生の試合を制した。
 - 関東大学リーグは、パールボウルで5年連続となった日大と日体大が対戦、63-51の大乱戦を日大が制し、24回目の関東制覇、関東代表初の8年連続の甲子園ボウル出場を決めた。
 - 近年、実力接近の関西学生リーグも波乱の展開となった。関学と近大がともに1敗で関西リーグ史上4度目の両校優勝となった。近大は1967年加盟以来18年目の初優勝。甲子園ボウル出場をかけた決定戦では関学がリーグ初の延長戦となる大接戦に勝利した。ここ2年、関西を制覇していた京大は、関学、近大に敗戦、立命館大と引分けて大体大に続く4位となった。
 - 第39回甲子園ボウルは、史上最高の35,000名の観客を集め開催。試合終了4秒前に関学が2点差に追い上げるTDを挙げ、その後の2点のトライを決め42-42の関学、日大の両校優勝となった。出場選手11名の各々のコイントスで日大が学生代表としてのライスボウルの出場権を得た。年間最優秀選手に贈られるチャック・ミルス杯にはQBとしてチームを引っ張った松岡秀樹選手が選出された。
 - 実業団日本一には、松下電工を破ったレナウンが勝利し、2年連続のライスボウル出場を果たした。
 - 第2回日本選手権のライスボウルは、日大とレナウンで争われ、レナウンのパス攻撃を阻んだ日大が勝利、初の日本一となるとともに、前年の京大に続き学生代表の連勝とした。
 - 高校全国選手権は武田建監督率いる関学高が初出場の日大三高を下し、3年連続11度目の全国優勝を果たした。
 - 最後の大会となった東西社会人王座決定戦は、第4回大会を王子陸上競技場で開催し、シルバースターがブラックイーグルスを破り4連覇を遂げた。
 - ジャパンボウルはこの年10回目を迎え、横浜スタジアムで開催。第8回ミラージュボウルは名門陸軍士官学校がモンタナ大と大接戦を演じ勝利した。

1984年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、高校97、大学168、社会人33の合計298チームであった。

戦国の様相、ピークへ。日大、関東9連覇ならず。レナウン、社会人初の日本一に

社
会

- ・ 3月17日
- ・ 4月1日
- ・ 8月12日
- ・ 9月19日
- ・ 9月22日

- ・ 国際科学技術博覧会（つくば'85）開幕
- ・ NTT、日本たばこ、民営化でスタート
- ・ 日本航空機、御巣鷹山墜落事故
- ・ メキシコ地震（M8.1）
- ・ 米ニューヨークで G5 がプラザ合意

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 7月5日
- ・ 8月1日
- ・ 8月25日
- ・ 秋
- ・ 10月12日
- ・ 12月22日
- ・ 12月18日～：
- ・ 翌年1月3日

- ・ 第10回パールボウル、東日本実業団の決勝に。最初の対戦はレナウン-日産（後楽園）
- ・ 日本社会人アメリカンフットボール協会設立
- ・ 日本社会人リーグ、松下電工-朝日生命で開幕（西宮球技場）
- ・ 関東協会、テレビ、ラジオで広報番組提供
- ・ 大井ふ頭に大井球技場完成、関東大学リーグ使用開始
- ・ 関学、オレゴン州立大と対戦。戦後初の単独対米本土大学戦
- ・ アメリカンフットボール・フェア、銀座三菱電機ビルで開催
- ・ 第39回ライスボウル、レナウン、関学を下し初優勝。社会人チームの初勝利

こ
の
年
の
活
動

(
競
技
年
度
)

実力伯仲と言われた大学リーグは、東西とも接戦を展開、これまでの戦力地図が大きく変わった。また社会人も実力を向上させライスボウルに初勝利、試合予想を許さない、戦国時代到来のシーズンだった。

- 第31回西宮ボウルは、全関東が全関西に完勝、10連勝を遂げた。
- 初夏の関東の後楽園球場のナイターとして定着したパールボウルは、これまで関東の実業団と大学の対戦であったが、この年第10回大会から東日本実業団選手権として関東実業団のトーナメントの決勝となった。その最初の年は、レナウンとニッサンが対戦し、レナウンが第1回目の選手権を獲得した。
- 関東大学リーグは、Aブロックのそれまで全勝の日大が同じく1敗の明大に敗れ、9回連続出場の関東選手権への出場権を逸し、Bブロックは前年まで4年連続1位の日体大が4位、東海大が1位となった。第16回関東選手権（パルサーボウル）は明大と9年ぶり出場の東海大が対戦、明大が優勝した。
- 関西学生リーグは、京大のリーグ戦独走との前評判であったが、京大は第5戦の近大、続く関学に敗れ、関学が最終戦の京大戦を20-18の接戦を制し2年連続35度目の優勝を遂げた。2位に同率で京大と躍進著しい立命館大、4位に近大、大体大、神戸大が並び、2位以下は混戦模様となった。
- 9年ぶり4度目の関学と明大の対戦となった第40回甲子園ボウルは35,000名の観客の前で開催。点の取り合いとなり、試合終了32秒前で関学がTDで逆転、2点差としたが、明治が残り時間で反撃、ゴールラインに迫った試合終了6秒前のFGが外れ、関学が48-46の接戦を制し、2年連続17回目の優勝を果たした。両チームの激しい点の取り合いで、合計得点94点は過去最高の得点だった。
- 12月22日、関学が、オレゴン州立大と対戦、29-49で敗れたが日本チームとして初の単独対米国本土チームの対戦だった。試合外での文化交流も積極的に行われた。
- 社会人は、この年日本社会人アメリカンフットボール協会が発足する記念の年となった。その日本リーグでは、レナウンがニッサンを破り、ライスボウル3年連続出場を決めた。またクラブチームの第1回全日本社会人選手権が開催され NACL が棚橋寛衛門氏を中心に設立されたシルバーオックスを破り王者となった。
- ライスボウルは、3回目の出場となるレナウンが鈴木隆之、松岡秀樹の両QB選手の活躍で戦半から大きくリードし、後半の関学の猛烈な反撃を45-42の接戦で下し、社会人初の日本一となった。
- 第16回高校選手権は関学高が日大櫻丘高を破り4連覇の優勝を遂げた。
- 米大学公式戦のミラージュボウルでは、強豪南カリフォルニア大学（USC）が来日、オレゴン大学と対戦、多くの観客を集めた。戦前1935年3月来日の全米学生オールスターの7名の選手もこの試合に合わせ50年ぶりに来日、話題を集めた。

地区対抗学生王座決定戦開催。早大学院、悲願の高校日本一。京大、2度目の日本一

社会

- ・ 1月28日
 - ・ 2月
 - ・ 3月 6日
 - ・ 4月26日
 - ・ 5月 4~6日
 - ・ 5月 7日
- ・ 米スペースシャトル・チャレンジャー号打上げ時爆発事故
 - ・ ソ連ゴルパチョフ書記長「ペレストロイカ」を提唱
 - ・ G5、初の協調利下げで合意
 - ・ チェルノブイリ原子力発電所で大規模な爆発事故
 - ・ 第12回G7サミット、東京で開催
 - ・ 日本体育協会、プロ登録・賞金大会を含む「新しいスポーツ憲章」承認

フットボール

- ・
 - ・ 4月
 - ・ 11月 2日
 - ・ 11月16日
 - ・ 11月23日
 - ・ 11月30日
 - ・ 12月21日
 - ・ 翌年1月3日
- ・ 第1回グラジュエーションボウル、九州学生選抜-九州社会人選抜（春日公園球技場）
 - ・ 西日本選手権、学生と社会人を分離、それぞれ「第32回西日本学生選手権大会」および「第32回西日本社会人選手権（後のグリーンボウル）」として開催
 - ・ '86 平和台ボウルが第1回南日本学生王座決定戦へ
 - ・ 第1回東日本学生王座決定戦パインボウル、東北大-北大（大井球技場）
 - ・ 第1回地区対抗学生王座決定戦。東北大が福岡大を下し第1回王座に（横浜スタジアム）
 - ・ ミラージュボウルがコカ・コーラボウルとなり開催、スタンフォード大-アリゾナ大（国立競技場）
 - ・ 第1回金鯨ボウル、湖北ファイニーズ-東海社会人選抜（名古屋鶴舞陸上競技場）
 - ・ 第40回ライスボウル、京大がレナウンを下し2回目の優勝

この年の活動
(競技年度)

北海道、東北、中四国、九州の各地区優勝チームによる地区対抗学生王座決定戦が新たに設けられ、バルサーボウルの招待試合として開催された。この年の決勝の東北大-福岡大は東北大が勝利、記念すべき第1回地区対抗戦の王座についた。

- 関東大学リーグは、この年から1部校を2校増やし14校（2ブロック制）で開催、Aブロックでは日大が全勝で、Bブロックは専修大が桜美林大と引分けたものの無敗で関東選手権に進んだ。関東選手権バルサーボウルでは、日大が初出場の専大を大差で破り優勝した。
- 関西学生リーグは、春、2勝4敗と不調だった京大が秋には復調、南オレゴン大と本場米国で合同合宿を行った関学との全勝対決に35-7で圧勝、3年ぶり4度目の優勝を果たした。
- 史上最多の36,000人を集めて開催された京大-日大の第41回甲子園ボウルは小雨模様となり、第3Qまで接戦であったが、第4Qで京大がランプレーで3TDを挙げ、日大を一気に突離し、3年ぶり2度目の学生日本一についた。
- 2シーズン目を迎えた日本社会人リーグでは、負傷者続出で懸念されていたレナウンが5戦全勝でリーグを制し、ライスボウル出場を決めた。加盟3年目の三和銀行が躍進、2位となった。
- 第40回ライスボウルは、3年前の第1回全日本選手権の対戦と同様、京大-レナウンの2度目の対戦となり、大接戦を展開、試合終了直前の逆転を狙ったレナウンのFGが外れ京大が2度目の全国制覇を成し遂げた。
- 第2回となった全日本社会人選手権は、前年に続き王子陸上競技場で開催され、第1回大会で敗れたシルバーオックスが初出場の湖北ファイニーズを下し、優勝した。
- 第17回高校選手権は、雪解けて泥沼化したグラウンドの駒沢第二球技場で開催され、早大学院が10年連続出場の関学高との試合を6-0で制し、創部38年目にして悲願の初優勝を遂げた。過去4年間無敗の関学高は、連勝記録が57でストップした。またこの勝利は以降関東勢5連覇の始まりだった。
- これまでのミラージュボウルはコカ・コーラボウルとなり国立競技場で開催、スタンフォード大が接戦でアリゾナ大を破った。
- 12月21日に開催された第4回カレッジボウルで関東が関西に勝利、これまでの4回の大会を全勝とした。これで関東は、大学オールスター戦で、1977年5月の第23回西宮ボウルから関西に対し20連勝を飾った。（西宮：10連勝、ライス：6連勝、カレッジ：4連勝）

第1回日本社会人選手権がスタート。多くのボウルゲームが始動。全体で過去最高の観客数を記録

社会

- ・ 4月 1日
- ・ 10月 19日
- ・ 11月 8日
- ・

- ・ 国鉄分割民営化、JR7社に事業継承
- ・ ニューヨーク株式市場大暴落（ブラックマンデー）
- ・ 東京ドーム建設のため後楽園球場閉場
- ・ 日本の貿易黒字 827億ドルに、円高加速、1年半で100円上昇も

フットボール

- ・ 3月 10日
- ・ 3月 21日
- ・ 4月
- ・ 6月 4日
- ・ 6月 12日
- ・ 6月
- ・ 12月 6日
- ・
- ・ 翌年1月3日

- ・ 日本協会、社会人クラブチームにライスボウルへの道を開くことを決定
- ・ 平塚競技場（平塚市）、使用開始
- ・ 日本協会、関東大学連盟の事務所、新宿区大久保に移転
- ・ ヨコハマボウル創設、第1回は日大-京大、関学-明大（横浜スタジアム）
- ・ ジュニア・パールボウル創設、第1回は富士通-朝日生命（東京ドーム）
- ・ 第1回瀬戸大橋ドリームボウル、岡山大-京大（坂出競技場）
- ・ 第1回日本社会人選手権開催、レナウン、シルバースター下し初優勝（横浜スタジアム）
- ・ 女子フットボールチーム、大阪興銀ワイルドキャッツ創部
- ・ 第41回ライスボウル、京大がレナウンを下し2年連続3回目の優勝

この年の活動
(競技年度)

日本社会人協会はクラブチームに日本選手権（ライスボウル）出場資格を認め、日本社会人選手権を創設、社会人フットボール史に残る大きな前進を果たした。記念すべき第1回日本社会人選手権は、レナウンがシルバースターを下し、ライスボウル出場を決めた。この年、各ボウルゲーム、公式戦とも多くの観客がスタンドに見え、過去最大の観客数を記録した。

- 第33回西宮ボウルは12年ぶりに関西が勝利、ライスボウル、カレッジボウルの対関東選抜戦を20連敗で止めた。
- 春の招待試合、横浜スタジアムを使用するヨコハマボウルが新たに開催、日大-京大、明大-関学の好カードの対戦が行われた。また関西では、グリーンボウルが創設され、松下電工と三和銀行が対戦した。
- 関東大学リーグはAブロックでは日大が危なげなく1位、しかしBブロックは混戦模様となり明大、慶大、東海大がともに1敗の三つ巴となり、前年度上位の明大がバルサーボウルの出場権を得た。バルサーボウルは、日大が明大を破り優勝した。
- 前年創設された地区対抗学生王座決定戦は、バルサーボウルの第1試合として開催され、北海道大が九州大を破り、初の王者となった。
- 関西学生リーグはリーグ最終週で各試合圧倒的勝利してきた京大と堅守の関学が全勝対決。攻撃の京大がと守備の関学の対戦となったが、第4Qに京大が関学を振り切り2年連続5回目の優勝をした。
- 2年連続の京大-日大となった第42回甲子園ボウルは、第3Qに引き離した京大が完勝、2年連続3回目の優勝を果たした。学生の年間最優秀選手賞チャック・ミルズ杯は、京大QB東海辰弥選手が2年連続で選ばれた。
- 実業団、東日本、西日本の3カンファレンスに再編成された社会人は、実業団はレナウン、東日本はシルバースター、西日本は松下電工がそれぞれ優勝。ライスボウルの出場権をかけた第1回日本社会人選手権は、第3Q前半まで0-28と大きくリードされたレナウンがその後4TDで同点、残り49秒でFGを挙げ、31-28の奇跡の逆転劇を演じ、5回連続のライスボウル出場権を得た。
- 第41回ライスボウル日本選手権は、ライスボウル史上最大の48,000人の観客を集め開催、QB東海辰弥選手らの活躍で京大が大差でレナウンを下し大会初の2連覇を達成して話題となった。全日本選手権になってこれで学生の4勝1敗となった。
- 高校の第18回高校選手権は初めて長居球技場で開催、東西ともに新顔の日大鶴ヶ丘高と大産大付高とで戦われ、両チーム大量点の接戦の試合を日大鶴ヶ丘高が49-42で制し、初優勝を飾った。
- コカ・コーラボウルとなって2回目の米国公式戦は、カリフォルニア大とワシントン州立大がともに17点で初の引分け試合となった。

東京スーパーボウルが誕生。IVY ボウルで日米交流戦が復活

社会

- ・ 1月 1日
 - ・ 3月 6日
 - ・ 10月 22~23日
- ・ ソ連、ベレストロイカ開始
 - ・ グリーンスタジアム神戸開場。3月 18日：日本初のドーム球場、東京ドーム開場
 - ・ 第 1 回ポール・ラッシュ祭開催（清里・清泉寮）

フットボール

- ・ 5月 15日
 - ・ 6月 10日
 - ・ 9月 3日
 - ・ 10月 1日
 - ・ 10月 2日
 - ・ 同
 - ・ 10月 12日
 - ・ 12月 14日
 - ・
 - ・ 翌年 1月 3日
 - ・ 翌年 1月 9日
- ・ 第 34 回西日本学生選手権の決勝を「フラッシュボウル」の名称に
 - ・ 東京ドーム初使用、第 13 回パールボウル、日本電気-レナウンで（東京ドーム）
 - ・ 高校日米交流戦、関西高校選抜-アシュランド高（長居球技場）
 - ・ 等々力陸上競技場、関東大学リーグで使用開始
 - ・ 第 1 回ラッシュボウル、日本電気-日産（山梨県韮崎中央公園陸上競技場）
 - ・ 少年フットボール：チェスナットリーグ、第 1 回秋のリーグ戦開始（長居球技場他）
 - ・ 日本協会医事委員会発足
 - ・ 第 2 回社会人選手権が「東京スーパーボウル」の名称に
 - ・ 第 1 回オイスターボウル（第 2 次）、オール広島-ミキハウス（広島県宮陸上競技場）
 - ・ 第 42 回ライスボウル、日大、レナウンを下し 2 回目の優勝
 - ・ 第 1 回 IVY ボウル、ウィリアム&メアリー大-日本学生選抜（横浜スタジアム）

この年の活動
(競技年度)

日本協会が、選手の安全な競技活動を目的として医事委員会を設立した。以降、継続して練習・試合における安全な活動を組織・チーム等に啓発・推進する組織活動の最初の年となった。

- 2 年前から学生だけのトーナメントとなった春の西日本学生選手権は、準決勝で関学が近大に、京大が大体大にとも敗れ決勝に進めず、大体大-近大の対戦を大体大が制し、初の優勝を遂げた。
- 第 2 回目となるヨコハマボウルは、全京大-全明大、日大-関学の試合が開催された。
- 春の第 13 回パールボウルでは新興日本電気がレナウンを破り優勝。レナウンは 5 年間無敗の 38 連勝だった記録が止まった。
- 第 3 回地区対抗学生王座決定戦は、東北大が西南学院大を下し、2 回目の優勝を果たした。
- 関東大学リーグは、パールボウルで日大が初顔合わせの慶大を破り 3 連覇を果たした。
- 関西学生リーグは、この年も最終戦の関学-京大で決着がつくことになり、その試合を関学が接戦で制し 3 年ぶりの優勝を遂げた。
- 第 43 回甲子園ボウルは前半同点の接戦となったが、第 3Q に日大が 2TD を挙げ関学を下し 4 年ぶり、単独優勝としては 6 年ぶり 18 回目の優勝を果たした。
- 3 カンファレンス編成の社会人は、実業団はレナウン、東日本はシルバースター、西日本は松下電工、と昨年と同じ勝者となった。そのあとのライスボウルの出場権をかけた第 2 回社会人選手権は、新たに「東京スーパーボウル」の名称となり初めて東京ドームで開催、レナウンが松下電工を破り優勝、6 年連続のライスボウル出場を果たした。翌年以降も東京スーパーボウルは平日夜間の東京ドームで開催し、初冬の一つの文化となった。
- この年ポール・ラッシュ博士の偉業をたたえ博士ゆかりの地・山梨県で開催するラッシュボウルが新設され、その第 1 回が 10 月 2 日山梨韮崎競技場で、日本電気と日産の対戦で開催された。
- 第 42 回ライスボウル日本選手権では、レナウンがその後長い間記録となる 6 年連続出場をしたが、試合は日大が攻守蹴にレナウンを圧倒、勝利した。この試合のポール・ラッシュ杯は日大の G・DE の鈴木実選手となった。ライン専任のプレーヤーの受賞は初であり、その後も長い間、唯一であった。
- ウィリアム&メアリー大-学生選抜の IVY ボウルが開催され、関東地区で 11 年ぶりに日米交流戦が復活した。また高校も 9 月に高校日米交流戦とした関西高校選抜がアシュランド高と対戦、以降、2 年ごとに日米交互で開催（のちのパシフィックリム・ボウル）した。
- 第 19 回高校選手権は、法政二高が関西大倉高を下し創部 26 年で初優勝を果たした。
- この年、関西地区に少年フットボールリーグのチェスナットリーグが誕生した。
- これまで国立競技場で開催されてきたコカ・コーラボウルは東京ドームに会場を移し、オクラホマ大が接戦でテキサス工科大を破った。

シルバースター、クラブチーム初のライスボウル出場。医事委員会、重大事故の全国調査実施

社
会

- ・ 1月 7日
- ・ 4月 1日
- ・ 6月 4日
- ・ 8月 7日
- ・ 9月
- ・ 11月 9日
- ・ 12月 29日

- ・ 昭和天皇崩御、新元号「平成」に
- ・ 消費税初めて導入 (3%)
- ・ 中国・天安門事件発生
- ・ 日本オリンピック協会、日本体育協会から独立
- ・ 国立競技場、冬用芝化作業開始
- ・ ドイツ、ベルリンの壁崩壊
- ・ 日経平均株価史上最高値 (38,915 円)

フ
ット
ボ
ール

- ・ 6月 30日
- ・ 8月 6日
- ・ 12月 6日
- ・ 12月 23日
- ・ 12月 24日
- ・
- ・ 翌年 1月 3日

- ・ 日本協会医事委員会、第 1 回安全対策クリニック開催
- ・ 12 年ぶりの NFL プレシーズン試合、第 1 回アメリカンボウル開催 (東京ドーム)
- ・ 第 3 回日本社会人選手権、アサヒビール、日本電気を下し初優勝 (東京ドーム)
- ・ 第 2 回 IVY ボウル、IVY 選抜 - 日本学生選抜 (横浜スタジアム)
- ・ 高校選手権、この年より「クリスマスボウル」とする。法政二高 - 関大一高 (東京ドーム)
- ・ アメリカンフットボール専門誌「アメリカンフットボール・マガジン」創刊
- ・ 第 43 回ライスボウル、日大、クラブチーム初の出場のシルバースターを下し 2 連覇

こ
の
年
の
活
動

(
競
技
年
度
)

日本協会が前年設置した医事委員会が川原貴氏を中心に、過去に発生した頭頸部外傷などの重大事故に関する初めての全国調査を実施。今後の重大事故発生時の報告の義務化を定めた。協会としての選手の安全対策への取り組みが進み始めた。

- 関東大学リーグは、それぞれのブロックを全勝で 1 位となった日大 - 慶大の 2 年連続の対戦となったが、後半日大のショットガンがさく裂、勝利を挙げた。
- 実力伯仲の関西学生リーグは、関学は全勝で迎えた最終戦の対京大で、互いに 1 回の FG 成功のみの 3-3 で引分けたが、京大は既に 3 敗しており、唯一の無敗で 2 年連続 37 回目の優勝を遂げた。
- 第 4 回地区対抗学生王座決定戦は、広島大が北の強豪東北大を下し、西日本に初の優勝をもたらした。
- 日大、関学の通算 24 回目の伝統の対戦となった第 44 回甲子園ボウルは、史上最高の 4 万人の観客を集めて開催、日大が強力な守備陣の活躍とパス攻撃で終始リード、4Q には 4TD を挙げ関学を危なげなく下し、2 年連続 19 回目の優勝を果たした。
- 社会人は、この年東西で過去最多の 10 チームが加盟、組織が急拡大した。社会人秋季リーグ戦は、実業団 1 部は混戦の中から日本電気が優勝、東日本はアサヒビールの支援を受けたシルバースターが危なげなく優勝を飾り、西日本は松下電工が制した。東京スーパーボウル出場をかけた 3 度目となるシルバースターと松下電工の対戦は、第 39 回神戸ボウルとして開催され、シルバースターが勝利した。大接戦となった第 3 回東京スーパーボウルは、クラブチームのシルバースターが日本電気を破り、クラブチーム初の悲願のライスボウル出場を遂げた。
- 第 43 回ライスボウル日本選手権は、ショットガン攻撃が冴えた日大が、前半から得点を重ね、初出場のシルバースターを撃破して 2 連覇を達成した。
- 全国高校選手権大会は、入澤敏夫氏を中心とした対応でこの年の 20 回大会を記念して「クリスマスボウル」の名称とし初めて東京ドームで開催、関東、関西各 8 校のトーナメントを勝ち進んだ法政二高と関大一高が対戦、法政二高の守備陣が活躍、10-0 で勝利し、2 連覇を遂げた。
- 第 4 回コカ・コーラボウルは、シラキューズ大がルイビル大に勝利した。
- 日米交流戦 IVY ボウルは、第 2 回目となり 46 名の IVY オールスターが来日し北海道、東北、関東からの東日本選抜と対戦、IVY オールスターが勝利した。
- 8 月、12 年ぶりに米プロフットボール NFL のプレシーズン試合「アメリカンボウル」が東京ドームで開催、ロサンジェルス・ラムズとサンフランシスコ 49ers が対戦した。アメリカンボウルは 2003 年の第 12 回大会まで続いた。
- シーズン最後のカレッジ東ソーボウルは、初めて神宮球場で開催され、西軍が勝利した。

日大、史上初の日本選手権 3 連覇。社会人リーグ、実業団とクラブチームが統合

社
会

・ 3月15日
・ 7月 1日
・ 8月 2日
・ 9月19日
・ 10月 1日
・ 10月 3日

・ ソ連、ゴルバチョフ議長が初代大統領就任
・ 東西ドイツ、経済統合
・ イラク、クウェートに侵攻
・ IOC、オリンピック憲章改定案を採択、プロ・アマオープン化へ
・ 日経平均、一時 2 万円割れ。バブル経済崩壊へ
・ 東西ドイツ再統一

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

・ 3月
・ 3月 9日
・ 4月21日
・ 7月 1日
・ 8月31日
・ 秋
・ 12月12日
・ 12月22日
・ 12月23日
・
・
・
・ 翌年 1 月 3 日

・ 日本協会、関東大学連盟、事務所を東京・高輪に移転
・ 阪急西宮球場改装工事竣工。4月28日：千葉マリスタジアム使用開始
・ 日本アメリカンフットボール学生協会設立
・ 第 1 回平成ボウル。関学・UCバークレー-立教・アリゾナ大(西宮球場)
・ 関西高校選抜-アシュランド高と対戦(米オレゴン州)
・ 実業団リーグ、社会人リーグが一体化、日本社会人アメリカンフットボールリーグとなる
・ 第 4 回日本社会人選手権、松下電工、オンワードを下し初優勝(東京ドーム)
・ 関東、関西の 2 部、3 部のオールスター戦開始(後のパーシティブォウル)(西宮球場)
・ 第 3 回 IVY ボウル、IVY 選抜-日本学生選抜(横浜スタジアム)
・ 日本タッチアンドフラッグフットボール協会設立
・ 女子フットボールチーム、第一生命レディコング創部
・ 第 44 回ライスボウル、国立競技場で最後の開催。日大が松下電工を下し 3 連覇

こ
の
年
の
活
動
(競
技
年
度)

4 月、将来の全日本学生選手権の実現を目指して、日本学生アメリカンフットボール協会が設立、初代理事長に河田幾造氏が就任した。

- 新しいボウルゲーム、平成ボウルが関西地区で始まった。第 1 回は、西宮球場でカリフォルニア大バークレー校と関学の連合チーム、一方はアリゾナ大と立教大の連合チームの対戦。本場米国チームとの合同練習、試合で日本チームのレベルアップに寄与した。
- 関東大学リーグは、ブロック内の試合でやや苦戦した日大と最終週まで 4 校の混戦を制した慶大が関東選手権で 3 年連続の対戦、日大が圧勝、5 年連続の甲子園ボウル出場を遂げた。
- 関西学生リーグも第 3 週で全勝校が消える混戦だったが、3 年ぶりに京大が制した。2 位は立命館大となり、関学はリーグ戦 4 敗を喫し、創部以来の下位の成績、6 位となった。
- 第 45 回甲子園ボウルは史上最高の 42,000 名の観客を集め開催、好調なショットガンで日大が京大に完勝、3 年連続 20 回目の優勝となった。
- 第 5 回地区対抗学生王座決定戦は東北大が西南学院大を下し、3 回目の優勝となった。
- 社会人は、実業団とクラブチームが「日本社会人アメリカンフットボールリーグ」としてまとめ、その優勝者を決める第 4 回社会人選手権東京スーパーボウルは、2 度目の出場で守備陣が充実した松下電工が初出場のオンワードを接戦で破り、初めてのライスボウル出場を果たした。
- 第 44 回ライスボウルは、27 回続いた国立競技場での最後の開催となり、初出場の松下電工が先制したが日大が逆転、35-13 で勝利し史上初の日本選手権 3 連覇を遂げた。また大学チームが 5 連勝、通算成績を学生代表の 7 勝 1 敗とした。
- 全国高校選手権クリスマスボウルは、日大鶴ヶ丘高が大産大付高を破り 2 度目の全国王座についた。
- 第 3 回 IVY ボウルは 12 月 24 日横浜スタジアムで開催、全 IVY が勝利した。
- 平成ボウル、IVY ボウル以外にも、関学創部 50 周年記念の米国沿岸警備隊士官学校との米国における試合、東海大のアリゾナ州立大への遠征、法大のハワイ大クリニック等、海外開催も含め国際交流が盛んに行われた。また関東、関西の大学リーグ 2 部、3 部同士のオールスター戦が新設、開催された。
- この年、タッチフットボールとフラッグフットボールを統括する組織、日本タッチアンドフラッグフットボール協会が設立された。

1990 年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、高校 113、大学 211、社会人 73 の合計 397 チームであった。

オンワード、ライスボウルで社会人チーム 6 年ぶりの日本一となる初優勝

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月17日 ・ 6月15日 ・ 7月 1日 ・ 12月25日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多国籍軍のイラク空爆、湾岸戦争勃発 ・ 2月27日：多国籍軍、クエート解放 ・ 1998年冬季オリンピック、長野で開催決定 ・ ワルシャワ条約機構解体 ・ ゴルバチョフ大統領辞任、ソビエト連邦崩壊
フ ツ ト ボ ウ ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月21日 ・ 5月20日 ・ 6月22日 ・ 12月 8日 ・ 12月11日 ・ 12月23日 ・ 翌年1月3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関西協会、新事務所を阪急西宮スタジアムへ ・ 川崎球場使用開始 ・ 早大－慶大、米ハーバード大スタジアムで対戦 ・ 女子フットボール「1回クイーンボウル」、大阪興銀－第一生命（グリーン Ai ランド） ・ 第5回日本社会人選手権、オンワード、サンスター下し初優勝（東京ドーム） ・ 第4回 IVY ボウル、IVY 選抜－学生全日本（東京ドーム） ・ 第45回ライスボウル、会場を東京ドームに移し開催。オンワード、関学を下し初優勝
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 6月、早大、慶大が合同で米国遠征、ハーバードスタジアムで両校が対戦した。平成ボウルは、関学・ワシントン大と明大・オレゴン大の試合を関学側が勝利した。 ● 近年充実してきた選手の安全対策の一環として関東大学リーグがゲームドクター制度と秋季公式戦時の外傷報告制度を導入。その後、この制度が全国の連盟・協会に順次拡大した。 ● 関東大学リーグは、ブロックを順当に制した日大と前評判の高かった法大を下した専大が関東大学選手権で対戦、5年振り2度目の出場の専大が4Qに逆転、最後の日大の攻撃をインターセプトで封じ、甲子園ボウル初出場を決めた。日大の6年連続出場は実現できなかった。 ● 関西学生リーグは、リーグ戦で同志社大に敗れた関学と、関学に敗れた京大がともに1敗同士となり、甲子園ボウル出場をかけ7年ぶり5度目となるプレーオフ。接戦となったこの試合を前年リーグ6位の関学が制し38回目の甲子園ボウル出場を決めた。関学は再試合扱いとなった1948年のシーズンを除き、これで5回のプレーオフを5勝全勝とした。 ● 第46回甲子園ボウルは、過去最多の45,000人の観客を集め開催、前半22-0と大量リードの関学を初出場の専大が猛追、第4Qには2TDを挙げたが及ばず、関学が25-20の僅差で勝利、6年ぶりとなる優勝を遂げた。学生の年間最優秀選手賞チャック・ミルズ杯は、初めて守備プレーヤーから関学DT、池之上貴裕選手に贈られた。 ● 第6回地区対抗学生選手権は東北大が僅差で初出場の山口大を下し4回目の優勝を遂げた。 ● 社会人では初の女性チーム大阪興銀が準加盟。社会人関西地区は、ともにブロック優勝のサンスターと松下電工が対戦、サンスターが5インターセプトを奪うバックス陣の活躍で勝利、東京スーパーボウルに勝ち進んだ。第5回東京スーパーボウルは、史上最多の53,000名の観客を集めて開催され、前半の接戦を制したオンワードが初出場サンスターに完勝した。 ● 6年ぶり出場の関学と初出場のオンワードとの対戦となった第45回ライスボウルは、国立競技場から東京ドームへ会場を移して開催。ショットガンで先制したオンワードが4TDを挙げ、関学の得点を2FGに抑え28-6で勝利、念願の初優勝。6年ぶりに社会人に日本一の栄冠をもたらし、通算成績を社会人の2勝7敗とした。 ● 高校の秋季大会は全国で112校が参加して開催、決勝となるクリスマスボウルは2度目となる東京ドームで開催、史上まれにみる大接戦となり、42-41で箕面自由学園高が早大学院を破り初優勝を遂げた。関西代表、6年ぶりの栄冠だった。 ● 第4回IVYボウルは会場を東京ドームに移し、初めて関西参加の全日本の編成となり、全IVYに敗れたが善戦した。 ● 第17回ジャパンプールは、この年から東京ドームに会場を移し開催された。 ● 第6回コカ・コーラボウルは、第6回ミラージュボウルに出場したクレムソン大が2回目の来日、デューク大に勝利した。 	

戦国ムード一気に高まる。アサヒビール、クラブチーム初の日本一へ

社会

- ・ 6月3日
 - ・ 6月20日
 - ・
- ・ 環境と開発に関する国連会議（地球サミット）、ブラジルで開催
 - ・ 長浜ドーム竣工
 - ・ この年より地価は下落をはじめ、その傾向は 2005 年頃まで続いた

フットボール

- ・ 3月18日
 - ・ 5月10日
 - ・ 6月6日
 - ・ 7月4日
 - ・ 9月12日
 - ・ 12月28日
 - ・ 翌年1月3日
 - ・ 翌年1月9日
 - ・ 翌年1月10日
- ・ 日本タッチフットボール協会設立
 - ・ 第1回オレンジボウル、四国学生選抜-中国学生選抜、サンスター-正英（愛媛県総合運動公園陸上競技場）
 - ・ 第1回レディースタッチフットボール選手権、のちのシュガーボウル（横浜スタジアム）
 - ・ 関東大学連盟、第1回安全対策セミナー（東大安田講堂）
 - ・ 関西学生リーグ全試合で 25 秒計使用開始
 - ・ タッチフット女子東西大学王座決定戦（西宮球技場）
 - ・ 第46回ライスボウル、アサヒビールが関学を下し初のクラブチーム優勝
 - ・ 第5回 IVY ボウル、IVY 選抜-学生全日本、ウィリアム&メアリー大-全日大
 - ・ 最後となる第18回ジャパンボウル開催（東京ドーム）

この年の活動
(競技年度)

戦国時代の到来といわれ、実力伯仲の試合が続いた年だった。

- 春の恒例行事となった平成ボウルは、関学・ワシントン大と京大・ブリガムヤング大で行われ、10-6 の僅差で関学側が勝利した。
- パルサーボウルの招待試合、第7回地区対抗学生王座決定戦は、東北大が2度目の出場の九州大に勝利、3連覇5回目の優勝を遂げた。
- 関東大学リーグは、ともに混戦のブロックを制した法大と日大が東京ドームで対戦、法大が前半のリードを守りパルサーボウルとなってからの初対決を制し、20年ぶりの甲子園ボウル出場を果たした。以降、10数年、関東大学リーグをリードした法大の進撃の始まりだった。
- 過去数年間接戦続きの関西学生リーグは、この年もリーグ戦で京大が神戸大に、関学が立命館大に敗れ、ともに1敗の両校優勝。甲子園ボウル出場のプレーオフを京大が積極的なパスティフェンスで関学に劇的な逆転の勝利をした。関学は再試合扱いとなった1948年のシーズンを除き、これまで全勝してきたプレーオフ、6試合目で初めての敗戦となった。
- 強い雨の中にもかかわらず38,000人の観客を集めて開催された第47回甲子園ボウルは、20年ぶり出場の法大が先制TD、しかし京大がその後2TD、1FGで逆転、5年ぶり4度目の優勝を遂げた。
- 社会人は、Final East はアサヒビールが新鋭富士通を接戦で制し、Final West は松下電工がマイカル・ベアーズに完勝した。続く第6回東京スーパーボウルは、アサヒビールが松下電工を下し優勝、2年ぶり2度目のライスボウル出場を遂げた。
- 第46回ライスボウルは、日本選手権となって10回目の大会、前半京大がリードして折り返したが、後半アサヒビールが逆転、29-20で京大を下し、クラブチームとして初めて日本一の栄冠を手にするともに対戦成績を社会人の3勝7敗とした。
- クリスマスボウルは法政二高が関西大倉高を下し、3年ぶり3回目の優勝を遂げた。
- 第5回目となるIVYボウルでは、1993年1月9日、東京ドームで日本学生-IVY、ウィリアム&メアリー大-オール日大の2試合が行われた。
- 第7回コカ・コーラボウルは、ネブラスカ大がカンザス州立大に勝利。1976年1月に第1回大会が開催され、18年間開催されてきた全米学生選抜のジャパンボウルは、この年の開催（1993年1月10日開催）が最後となった。全米級のプレーヤーのプレーを目前で見られたジャパンボウルだった。
- 女子タッチフットボールは6月に第1回レディースタッチフットボール選手権（慶大がミセスユニコンを下し優勝）を横浜スタジアムで開催、12月には第1回女子東西大学王座決定戦（聖和大が関学を下し優勝）を西宮競技場で開催し、女子タッチ元年、華々しい活動開始だった。

秋の公式戦 800 試合を越える。初の公式戦クイーンボウル開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 2日 ・ 5月 15日 ・ 6月 9日 ・ 7月 7-9日 ・ 11月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 福岡ドーム完成 ・ サッカーJリーグ初年度の試合開始 ・ 皇太子・雅子妃、結婚の儀 ・ 第19回 G7 サミット、東京で開催 ・ 欧州連合 (EU) 発足
フ ツ ト ボ ウ ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7月 18日 ・ 10月 16日 ・ 秋 ・ 11月 20日 ・ 12月 5日 ・ 12月 11日 ・ 12月 12日 ・ 12月 19日 ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 8日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第20回記念ポテトボウル、北海道学生選抜-韓国学生選抜 (厚別公園競技場) ・ 福岡ドーム竣工記念、ハーキュリーボウル、リクルート-オンワード ・ 高校連盟、「STOP AIDS 運動」実施 ・ 第1回オープンタッチフットボール選手権、東京リベンジャーズおよび長野計器優勝 ・ 最後となる第8回コカ・コーラボウル開催、ウインズコンシン大-ミシガン州立大 ・ 女子、初の公式戦クイーンボウル'93、第一生命、関西興銀を下す (千葉マリン) ・ タッチフットボール女子東西学生オールスター戦 (ナゴヤ球場) ・ 日本協会「第1回安全対策委員会実務者会議」 (都ホテル甲子園) ・ 第47回ライスボウル、アサヒビール、関学を下し 2 連覇 ・ 第6回 IVY ボウル、IVY 選抜-日本学生選抜 (東京ドーム)
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>競技活動 60 年目を迎えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 北海道連盟主催のポテトボウルはこの年第 20 回を迎え、それを記念して韓国学生選抜と北海道学生選抜が対戦、北海道学生選抜が接戦を制した。 ● 地区の王座を決める第 8 回地区対抗学生王座決定戦は、広島大が初出場札幌学院大に勝利、5 年ぶり 2 度目の優勝を遂げた。 ● 関東大学リーグは、ブロック内の対戦で日大が 25 年ぶりの 2 敗。パルサーボウルで 9 年ぶり出場の日体大が 3 年ぶり 4 回目出場の慶大を下し、初の優勝を遂げた。 ● 関西学生リーグは 6 年ぶりの全勝対決となった関学と京大の対戦は、前半の豪雨で相次いだターンオーバーを着実に得点に結びつけた関学が制し、39 回目の甲子園ボウル出場を決めた。 ● 第 48 回甲子園ボウルは、ともにランプレー中心の関学と初出場日体大の対戦となったが、厚い守備陣の関学がに完勝、19 回目の学生日本一、関西代表 3 連覇を遂げた。 ● 社会人の第 7 回東京スーパーボウルは守備戦を展開、試合終了 20 秒前までアサヒビールの 2FG のみの得点で最後まで分からない接戦を演じた。終盤サンスターが逆転の TD を狙うドライブをアサヒビールがしのぎ 13-0 で勝利、サンスターを下した。 ● 第 47 回ライスボウルは、予想に違わぬ好試合を展開、試合終了まで激しい攻防戦となり、最後にアサヒビールが関学を逆転勝利で退け、社会人初の日本選手権 2 連覇を達成した。 ● 高校関東地区の春の大会は、静岡で活動する日大三島高が江戸川学園取手高を下し、また関西地区の春の大会は、箕面自由学園が平安高を下し、それぞれ優勝した。東西ともいわゆる決勝常連校が少ない対戦が注目を集めた。秋の大会の優勝校によるクリスマスボウルは、関学高が中大付高に残り 13 秒で逆転勝利、8 年ぶり 13 回目の高校日本一となった。 ● 女子チームとしては初の日本社会人協会公認クイーンボウル'93 が開催され、第一生命レディコングが関西興銀ワイルドキャッツを 8-0 で下し、従来からの対戦成績を 2 勝 1 敗とした。 ● 第 8 回コカ・コーラボウルは 12 月 6 日、東京ドームで開催。ウインズコンシン大がミシガン州立大に勝利した。コカ・コーラボウルはこの大会が最後となり、ミラージュボウルとして開催された 1977 年からの 9 回を含め合計 17 回、本場米カレッジの公式戦が日本のファンの前で展開された。 ● 第 6 回 IVY ボウルは翌 1994 年 1 月 8 日、全 IVY-全日本学生で行われ、全 IVY が勝利した。 ● この年から古川明氏が日本協会理事長 (第 11 代) に就任、1997 年まで務められた。 <p>日本協会加盟チームはこの年、高校 120、大学 231、社会人 97、合計 444 チームとなり、秋季公式試合数は全国で 802 試合となった。</p>	

60周年を迎えた日本フットボール、各種の祝賀行事開催。立命館大、初の学生日本一

社
会

- ・ 2月 4日
- ・ 5月 6日
- ・ 6月 27日
- ・ 8月 12日
- ・ 9月 4日

- ・ H-II ロケット 1号機、打上げ
- ・ 英仏海峡トンネル開通
- ・ オウム真理教による松本サリン事件発生
- ・ 米 MBL232 日間のストライキの始まり
- ・ 関西国際空港開港

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・
- ・ 6月 12日
- ・ 7月 3日
- ・ 7月
- ・ 12月 18日
- ・ 12月 18日
- ・ 翌年 1月 3日
- ・ 翌年 1月 3日
- ・ 翌年 1月 8日
- ・ 翌年 1月 15日

- ・ 日本フットボール 60周年を記念、ロゴマークを作成
- ・ 60周年記念全国大学選抜大会決勝、法大優勝 (福岡ドーム)
- ・ 関西、学生と社会人のオールスター戦、第1回グッドウィルボウル (西宮スタジアム)
- ・ 日本学生選抜 (北海道学生)、韓国遠征
- ・ 日本フットボール 60周年記念功労賞、関西地区の 10名の方を表彰
- ・ 第49回甲子園ボウル、初出場の立命館大、法大を下し初優勝
- ・ 日本フットボール 60周年記念功労賞、関東地区の 12名・社の方を表彰
- ・ 第48回ライスボウル、松下電工、立命館大を下し初優勝
- ・ 翌第7回 IVY ボウル、IVY 選抜 - 学生全日本 (西宮スタジアム)
- ・ 関東高校、神奈川選抜 - SIC 選抜戦、のちのスティックボウル (川崎球場)

1
つ
の
年
の
活
動

(競
技
年
度)

わが国における競技活動 60周年を祝い記念のロゴマークを作成、ヘルメット、審判員ユニフォームなどに着用した。また 60周年記念全国大学選抜大会が開催され、決勝シーホークボウルは福岡ドームを使用し開催、法大が金沢大を破り栄冠を得た。

- 日本協会では、1985年の50周年記念に続き、第2回目の功労者表彰を行った。関西地区の10名の方に12月18日第49回甲子園ボウルで、関東地区の12名・社の方に翌1995年1月3日のライスボウルで、それぞれ感謝の式典を行った。
- 日本学生選抜 (北海道学生) が韓国遠征。15日対韓国大邱選抜 (大邱市民運動場)、17日対韓国釜山選抜 (釜山九徳運動場) と対戦した。
- 第40回を迎えた西宮ボウルは、関西学生が関東学生を抑え、2連勝を遂げた。
- 第9回地区対抗学生王座決定戦は3度目の対戦となった東北大と西南学院大の間で開催され、東北大が優勝した。
- 関東大学リーグは、Aブロックで全勝対決の法大と日体大の対戦を法大が制し1位、Bブロックは日大が1位となった。第15回パルサーボウルは法大が日大を3Qに逆転、接戦を制し優勝した。
- 関西学生リーグは、立命館大が関学、京大に勝利、最終週を待たずにリーグ初優勝を決めた。関学、京大以外のチームが甲子園ボウルに出場するのは第3回大会の関大以来46年ぶりとなった。
- 社会人はFinal4で鹿島に快勝したオンワードと西日本1部でサンスターを僅差で破った松下電工が4年前と同一カードで東京スーパーボウルで対戦、松下電工が快勝した。
- 第49回甲子園ボウルは、38,000名の観客を集め開催、逆転に次ぐ逆転の展開となり、4Qの法大の2点のTFPを抑えた初出場立命館大が24-22の僅差で勝利、念願の初優勝を飾った。
- ライスボウルでは、試合終了前41秒の劇的FGで松下電工が16-14の僅差で立命館大を破り、悲願の初優勝を飾った。最後まで競った試合に54,000の観客は試合展開に釘付けだった。
- 第25回高校選手権クリスマスボウルは、ともに初優勝をかける大産大付高と中大付高で争われ、大産大付高が制した。
- 第7回 IVY ボウルは、この年、場所を関西に移し西宮スタジアムで1995年1月8日開催、全日本学生が健闘したが10-20で全 IVY に敗れた。

甲子園ボウル 50 回記念。京大 4 度目の日本一。第 1 回さくらボウル開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 1月 17日 ・ 3月 20日 ・ 6月 ・ 8月 5日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世界貿易機関 (WTO) 発足 ・ 阪神・淡路大震災 (M7.3) ・ 地下鉄サリン事件発生 ・ バブル崩壊に伴い、住専問題顕在化 ・ ベトナム、米国と国交正常化
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 6日 ・ 3月 ・ 4月 1日 ・ 6月 11日 ・ 夏 ・ 8月 29日 ・ 9月 2日 ・ 9月 12日 ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 7日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポール・ラッシュ博士を偲ぶ会。殿堂建設計画発表 ・ 日本協会 60 周年史「堂々たる前進」発行 ・ 初の 6 人制タッチフットボール公式規則書発行 ・ 第 1 回ジャパンシーボウル、北陸社会人 - アサヒ飲料。のちの百万石ボウル ・ 日本協会機関紙「American Football Report 1号」発行 (以降、2001 年 26 号迄) ・ 日本社会人協会、1996 年より「日本リーグ」発足を発表 ・ 関東大学リーグ開幕、関東選手権を両ブロック 1、2 位の 4 校出場に ・ アメリカ大使館主催アメリカン・スポーツ・フェア開幕 (US トレードセンター) ・ 第 1 回さくらボウル、関学、東京ミセスユニコーズを下す (東京ドーム) ・ 第 49 回ライスボウル、京大、松下電工を下し 4 回目の優勝。第 1 回さくらボウル開催 ・ 第 8 回 IVY ボウル、全 IVY - 学生日本代表。最後の大会となる (西宮スタジアム)
この年の活動 (競技年度)	<p>1995 年 1 月 17 日早朝、阪神・淡路大震災が発生し、関西地区のチーム関係者、施設等は大きな被害を受けたが、関係者の努力により他の地区では春季戦から、また関西地区も秋季からほぼ例年通りのシーズンとした。また、この年、わが国における競技活動 60 周年を記念して設立される「日本アメリカンフットボールの殿堂」の建設が開始された。日本協会では、建設費用の一部として全国の加盟組織から寄付金を募った。この寄付の協力者の氏名は、殿堂開設後、殿堂内にパネルとして掲示された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 10 回目を迎えた地区対抗学生王座決定戦は、東北大が九州大を下し、7 度目の優勝を果たした。 ● 関東大学リーグは、この年より一部リーグの A、B ブロックの 1、2 位 4 チームが関東選手権のトーナメントで対戦する方式に変更。準決勝となる 1 回戦で、法大が日大を、専大が東海大を破り決勝進出。第 26 回関東選手権決勝は、法大が専大に圧勝、甲子園ボウルの出場を果たした。4 チームによる関東選手権の方式は、2005 年まで 11 年続いた。 ● 関西学生リーグは、京大、立命館大、関学が全勝のまま終盤戦に入り、3 者の対戦では鉄壁の守備力で京大が立命館大、関学との対戦を接戦で制し、3 年ぶり 9 回目の優勝、7 回目の甲子園出場を決めた。 ● 甲子園ボウルは記念すべき第 50 回大会を迎え、京大が前半 2 回、相手のファンブルから攻撃を得点に繋ぎ終始試合をリード、第 3Q 法大は 4 点差まで詰め寄ったが、京大は第 4Q、FG で法大を突き放し、3 年ぶり 5 回目の優勝を遂げた。 ● 社会人の東京スーパーボウルは 2 年連続、5 回目の出場の松下電工が初出場のリクルートに快勝した。 ● 第 49 回ライスボウル日本選手権は京大が社会人代表の松下電工を下して、8 年ぶり 4 度目の日本一を達成した。大学チームの勝利は 5 年振りであった。またこの試合のポール・ラッシュ杯は京大 LB、阿部拓朗選手に贈られた。LB の受賞は初めてであった。この年より東京ドームで開催するライスボウルの場でさくらボウル (タッチフットボール女子全日本王座決定戦) が開催されることとなり、第 1 回大会は、関学が東京ミセスユニコーズを破り、最初の大会の優勝を飾った。 ● 高校選手権クリスマスボウルは、関学高が法政二高を 22-19 の接戦で下し優勝した。 ● 1989 年 1 月の第 1 回開催から続けられてきた IVY ボウルは、1996 年 1 月 7 日、前年に続き西宮スタジアムで第 8 回が開催され、この大会が最終回となった。 <p>1995 年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、中学 5、高校 120、大学 236、社会人 94 の合計 455 チーム、秋季公式試合は 982 試合であった。</p>	

山梨・清里に日本アメリカンフットボールの殿堂完成。接戦を制しリクルート初の日本一

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月14日 ・ 6月 ・ 9月10日 ・ 12月17日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 羽生善治氏、史上初の将棋タイトル七冠独占を達成 ・ 長居陸上競技場開場（大阪市） ・ 国連総会で包括的核実験禁止条約(CTBT)採択 ・ 在ペルー日本大使公邸占拠事件
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月17日 ・ 3月28日 ・ 4月16日 ・ 7月26日 ・ 12月 1日 ・ 12月11日 ・ ・ 翌年1月3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 豊中高－池田高、創部 50 周年記念試合（西宮球場） ・ ポール・ラッシュ記念センター（現ポール・ラッシュ記念館）、日本アメリカンフットボールの殿堂竣工式。ポール・ラッシュ博士、名誉の殿堂入り ・ 社会人協会、日本リーグ「Xリーグ」発足発表。3ブロック制に移行 ・ タッチフット 50 年記念試合、池田・豊中高－レイクワシントン高（長居球場） ・ 第 11 回地区対抗学生王座決定戦、北大－福岡大。最後の大会となる（川崎球場） ・ 第 10 回日本社会人選手権、リクルート、オンワードを下し初優勝 ・ 関西中学校アメリカンフットボール連盟設立 ・ 第 50 回ライスボウル、リクルート、京大を下し初優勝
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>日本アメリカンフットボール協会の各加盟組織が寄付などで設立に協力をした「日本アメリカンフットボールの殿堂」が、ポール・ラッシュ博士ゆかりの地、山梨県清里・清泉寮内に開設され、4月にオープンした。同時に我が国のアメリカンフットボール競技活動開始、その後の運営等に多大な功績を遺された「日本アメリカンフットボールの父」ポール・ラッシュ博士が「名誉の殿堂入り」として顕彰された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 地区対抗学生王座決定戦は、北海道大が 10 年ぶり出場の福岡大を破り 2 度目の優勝を果たした。11 年続いたこの大会は、翌 1997 年から各地区が参加する東・西の大学王座決定戦が開催されることから、この年が最後となった。 ● 関東大学リーグは、東大がチーム創設以来初の関東選手権出場を果たしたが、準決勝で善戦したものの日大に敗れた。決勝は、その日大と、準決勝で専大を下した法大の対戦となり接戦を展開、最後まで勝者が予想できない試合を法大が 26-21 で制し、3 年連続 5 回目の関東選手権優勝となった。 ● 関西学生リーグは、関学、立命館大、京大の 3 校がともに 6 勝 1 敗でリーグ史上初の 3 校同率優勝となった。甲子園ボウル出場を決めるプレーオフは初めてのトーナメント方式で開催され、プレーオフ 1 回戦で立命館大が関学を 17-3 で下し、決勝では京大が立命館大を 24-6 で撃破、京大が 2 年連続 8 回目の甲子園出場を決めた。関学は再試合扱いとなった 1948 年のシーズンを除き、甲子園ボウル出場を決めるシーズン後の 6 度目のプレーオフで初めての敗戦となった。 ● 第 51 回甲子園ボウルは、前半、法大がランとパスで 2TD を挙げ 14-0 とリードしたが、京大が第 3Q、3TD を挙げ逆転、第 4Q 試合終了直前のゴールラインに迫る法大の 4 回の攻撃を止め、法大に勝利、2 連覇を達成した。関西代表はこれで 6 年連続の甲子園ボウル勝利となった。 ● 社会人は、この年、編成替えを行い、1 部 3 ブロックからなる X リーグを発足させた。優勝者決定は、各ブロック上位から 6 チームが参加のトーナメントを行い、その決勝を東京スーパーボウルとした。X リーグとなって初の東京スーパーボウルは、リクルートとオンワードの 7 年ぶりの関東勢対戦となったが、リーグ戦序盤不振だったリクルートが制し、初優勝を飾った。 ● 第 50 回ライスボウル日本選手権は 2 年連続出場、大学チームとしては最多の 6 回出場の京大と初出場のリクルートが対戦、前半リードしたリクルートが後半の京大の猛攻をしのぎ 19-16 の僅差で勝利、リクルートが創部 14 年目で初優勝を果たした。 ● 高校選手権クリスマスボウルは、12 年ぶり出場の日大三高が関西大倉高を下し初優勝した。 ● 12 月、東京品川の大井ふ頭中央海浜公園に大井第 2 球場が完成、翌 1997 年から使用を開始した。 ● この年、関西中学校アメリカンフットボール連盟が 11 校の参加で設立された。 	

東・西の大学王座決定戦を新設。鹿島、ライスボウル初出場初優勝。第1回医科学研究会開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 1日 ・ 4月 1日 ・ 7月 1日 ・ 8月 31日 ・ 11月 17日 ・ 12月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大阪ドーム開場、3月12日：ナゴヤドーム開場 ・ 消費税 3%から 5%へ ・ 香港、イギリスから中国へ返還 ・ ダイアナ元英国皇太子妃、事故で永眠 ・ 北海道拓殖銀行経営破綻。・ 11月24日：山一証券廃業 ・ 地球温暖化防止京都会議開幕、京都議定書採択
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 29日 ・ 5月 11日 ・ 5月 17日 ・ 5月 25日 ・ 6月 20日 ・ 6月 29日 ・ 7月 6日 ・ 9月 6日 ・ 12月 ・ 12月 13日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 京大創立 100 年記念、京大－ハーバード大（西京極陸上競技場） ・ 関西学生選抜－カナダ西オンタリオ大（長居球技場） ・ 第 1 回アメリカンフットボール医科学研究会開催（リクルート会議室） ・ ナゴヤドーム開場、第 1 回ナゴヤフェスタ in ナゴヤドーム、東海学生選抜－立命館大 ・ パールボウル、実業団選手権から Xリーグ東・中地区の選手権に ・ 仙台スタジアム開場記念、第 1 回仙台グリーンボウル、東北大－東大 ・ 小松ドーム開場記念、北陸学生選抜－日大 ・ 西宮球技場改修工事完了・西宮球技場改修工事完了 ・ 東日本学生王座決定戦（のちのシトロソボウル）、西日本学生王座決定戦（のちのウェスタンボウル）を創設 ・ 第 1 回四日市ボウル、立命館大－東海学生（四日市ドーム） ・ 第 51 回ライスボウル、鹿島、法大を下し初優勝
この年 の活動 (競技年度)	<p>フットボール活動で選手の安全性を保ち、向上させることはコンタクトスポーツのアメリカンフットボールで極めて重要でありそのため、練習・試合の安全性向上の知見を広く関係者に公開・周知する日本協会の医事委員会主催による「第 1 回アメリカンフットボール医科学研究会」がリクルート会議室で多くの参加者を集め開催された。この公開の研究会は、以降、毎年開催を続け、選手の安全に貢献している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1997 年 3 月、京大が同大学 100 周年記念・部創部 50 年を記念して米ハーバード大と西京極競技場で対戦、35-42 で惜しくも敗れた。 ● 西宮球技場が大幅改修、スタンド増設、施設増強を行い、秋から使用開始した。この年、大阪ドーム、ナゴヤドーム、仙台スタジアム、小松ドームなど、その後ボウルゲームで使用する施設が多く開場した。 ● 11 年続いた地区対抗王座決定戦の後継大会として、そして将来の日本学生選手権を見据え、甲子園ボウルとは別に、東日本と西日本の 2 つの学生王座決定戦を新たに開催した。この決定戦では、関東代表東海大が北海道・東北（パインボウル）の勝者北海道大と対戦し勝利、関西代表京大が中四国・九州（平和台ボウル）の勝者山口大と対戦し勝利した。 ● 関東大学リーグでは、関東選手権は、準決勝では初出場の帝京大に法大が勝利、一方の試合は僅差で東海大が日大に勝利、東海大は 12 年振り 3 回目の関東選手権決勝出場となった。法大と東海大の決勝は熱戦となったが法大が制し 4 連覇、東海大の甲子園ボウル初出場は叶わなかった。 ● 関西学生リーグは、近年、関学、立命館大、京大の 3 強が激突するリーグ戦となっていたが、この年も三者が激突、互いの試合が接戦となったが関学が全勝で 4 年ぶりの優勝、2 位は立命館大となった。 ● 関学と法大の初対戦となった第 52 回甲子園ボウルは、シーソーゲームを展開、法大が 4Q 残り 59 秒で逆転したが、関学が試合終了最後のプレーで TD を挙げ同点に追いついた。しかしその TFP のキックを失敗、そのまま試合終了となった。史上 4 度目の両校優勝となったがコイントスで法大がライスボウルに初出場となった。関西代表の 7 年単独連勝はならなかった。 ● 日本社会人リーグは、Xリーグと名称変更して 2 年目、社会人選手権準決勝は、大接戦の末、鹿島がオンワードをタイブレイクで下し、松下電工が強カディフェンスでシルバースターを下した。決勝は、創部 8 年目の鹿島が鉄壁の守備で松下電工を破り優勝、ライスボウル初出場を決めた。 ● 第 51 回ライスボウルは、鹿島が各 Q 得点し安定した試合運びで法大に 39-0 と全日本選手権となってから初の完封勝ち、創部 10 年目で初出場初優勝となった。 ● 第 28 回高校選手権クリスマスボウルは、初めて川崎球場を使用、8 年振り 3 回目出場の関大一高が連続出場の日大三高を下し 22 年ぶり 2 度目の優勝を遂げた。 ● この年から笹田英次氏が日本協会理事長（第 12 代）に就任、1999 年まで務められた。 	

国際アメリカンフットボール連盟が発足。ライスボウル、学生-社会人の対戦成績五分に

社
会

- ・ 2月 7日
 - ・ 3月 1日
 - ・ 4月 5日
 - ・ 10月 23日
- ・ 第 18 回冬季オリンピック開幕 (長野)。3月 5日 : 第 7 回パラリンピック開幕 (長野)
 - ・ 横浜国際総合競技場開場
 - ・ 明石海峡大橋開通
 - ・ 日本長期信用銀行経営破綻、12月 13日 : 日本債券信用銀行経営破綻

フ
ツ
ト
ボ
ー
ル

- ・ 4月 12日
 - ・ 4月、5月
 - ・ 6月
 - ・ 8月 3日
 - ・ 9月
 - ・ 9月
 - ・ 翌年 1月 3日
 - ・ 翌年 1月 4日
- ・ NFL フラッグ、全国 8 か所で説明会開催
 - ・ 関東、関西で一般少年少女対象のフットボールスクール開催
 - ・ Xリーグ米人コーチ 3 名によるクリニック、北海道、関東、九州で開催
 - ・ JAPAN-EURO BOWL、全日本-フィンランド。日本勝利 (東京ドーム)
 - ・ 国際アメリカンフットボール連盟 (IFAF) 設立。初代会長に笹田英次氏就任
 - ・ IFAF、第 1 回ワールドカップを 1999 年 6 月に開催することを決定
 - ・ 第 52 回ライスボウル、リクルート、立命館大を下し 2 回目の優勝
 - ・ IFAF アジア連盟設立、初代会長に鈴木卓治氏就任

こ
の
年
の
活
動

(競
技
年
度)

9月に各国代表が集まり、国際アメリカンフットボール連盟 (IFAF) が設立された。初代会長に笹田英次氏が就任、翌年の初めてのワールドカップ (のちに世界選手権と呼ぶ) 開催 (イタリア・バレルモ市) の準備ができた。これまで、日本チームの単発的な海外遠征は行われてきたが、この年以降、世界的制度の海外試合、国際大会が開始されるきっかけの年だった。また翌 1999 年 1 月 4 日には IFAF の下で IFAF アジア連盟が設立され、初代会長に鈴木卓治氏が就任された。

- 翌 1999 年第 1 回ワールドカップ (のちの世界選手権) 開催を見据えて 8 月フィンランドチームが来日し、Xリーグ選抜日本代表チームと東京ドームで対戦、日本代表が 39-7 で快勝。ワールドカップへの手ごたえを得た。
- 関東大学リーグは A ブロックの開幕初戦で法大がこの年 1 部復帰の早大に敗れたが以降の 4 試合に勝利、ブロックを制した。B ブロックは開幕 4 連勝した日大が専大に敗れたが 1 位となった。関東選手権準決勝は法大が専大を、日大が日体大とともに大接戦で下し川崎球場で対戦、法大が一方的な試合で日大に勝利、5 年連続となる選手権の勝利となった。
- 関西学生リーグは、関学が立命館大、京大に敗れ、全勝同士の立命館大-京大は 5 つのターンオーバーをあげた守備陣の健闘で立命館大が 35-8 と完勝、しかし立命館大は最終戦対近大戦は接戦となり、21-20 のトライの差で薄氷の勝利、4 年振り 2 回目の甲子園ボウル出場を決めた。
- 第 53 回甲子園ボウルは、前半、法大が 2TD でリードをしたが、後半立命館大が粘りを見せ 4Q に法大を逆転、試合終了 33 秒前の法大のゴールラインあと 1 ヤードの猛攻を守り 25-17 と競った試合に勝利、4 年ぶり 2 度目の学生王者となった。
- 社会人は、この年、近年の経済状態の悪化に伴う休部チームが多くなってきたが、決勝となる第 12 回社会人選手権は、32,000 名の観客を集め開催。リクルートとアサヒビールの対戦は、前半、拮抗した試合展開だったが、後半、爆発的な攻撃力でリクルートが点を重ね、5 年ぶりに選手権出場のアサヒビールに快勝した。
- 立命館大とリクルートによる第 52 回ライスボウルは 1Q に 3TD を挙げたリクルートが勝利、2 年ぶり 2 度目の優勝を遂げた。この結果、日本選手権となったライスボウルは 16 回目の対戦で、学生と社会人がともに 8 勝で、対戦成績を五分とした。
- 長居球技場で開催の高校選手権第 29 回クリスマスボウルは、関西一高が中大付高を破り 2 年連続 3 回目の王者となった。前年との連続連覇は、関学高、法政二高に続く 3 校目であった。

第1回WC日本代表が優勝。アサヒビール、3回目の日本一。樋口廣太郎氏、コミッショナー就任

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 3月 24日 ・ 9月 21日 : ・ 12月 20日 : 	<ul style="list-style-type: none"> ・ EU、単一通貨ユーロ導入 ・ コソボ紛争制裁のため、NATO 軍がユーゴスラビアを空爆 ・ 台湾大地震発生 (M7.6) ・ マカオ、ポルトガルから中国に返還
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 21日 ・ 4月 17日 ・ 4月 24日 ・ 5月 16日 ・ 6月~7月 ・ 6月 27日 ・ 8月 15日 ・ 9月~11月 ・ 9月~11月 ・ 翌年 1月 1日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回5人制フラッグフットボール選手権冬季大会 (川崎球場) ・ NFLEL (ヨーロップリーグ) 開幕、日本人 4 選手参加 ・ 第24回パールボウルトーナメント、Xリーグ2部にも参加枠拡大 ・ ワールドカップ壮行試合、全日本-全在日米軍 (横浜スタジアム) ・ イタリア・パレルモで第1回ワールドカップ開催。日本優勝 ・ アメリカンフットボールフェスティバル99開催 (西宮)、7月3日 : とどろきアリーナ ・ 第1回アメリカンフラッグフットボール日本選手権夏季大会開催 (横浜国際総合競技場) ・ Xレディーズリーグ (女子フラッグフットボール) 開催 (駒沢陸上等) ・ 少年少女ジュニアフットボールスクール開催 (西宮スタジアム) ・ 樋口廣太郎氏、日本協会コミッショナーに就任 ・ 第53回ライスボウル、アサヒビール、関学を下し3回目の優勝
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>6月から7月にかけての2週間、イタリア・パレルモ市 (シチリア島) で開催された記念すべきアメリカンフットボールの第1回ワールドカップ (のちの世界選手権)、6か国が参加し開催。アメリカは不参加だったが、阿部敏彰ヘッドコーチ率いる日本代表は各国の強豪を相手に1次リーグ戦でスウェーデン、オーストラリアに快勝、決勝ではメキシコと0-0のままタイブレイクの戦いとなったが日本がTDを挙げ、記念すべき第1回大会に劇的な勝利、初優勝を達成した。</p> <p>また年が明けた2000年1月1日、日本協会の初代コミッショナーとしてアサヒビール名誉会長樋口廣太郎氏が就任、以降、フットボール普及に関する関係者との調整、活動の推進を精力的に行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● NFLがフラッグフットボールの国際基準のルールを策定、8月東京ドームで日本国内チーム対象の初の全国大会を開催した。NFLは以降も世界的なフラッグフットボールの普及に取り組んだ。 ● 関東大学リーグは、関東選手権準決勝は、法大が準決勝2度目の出場の帝京大を破り、日大が初出場の中大に辛くも勝利、ともに決勝に進んだ。決勝では前半日大が20-0と大きくリードしたが後半法大がこの差を覆す逆転、法大が接戦を制し甲子園ボウル8度目6年連続の出場を決めた。 ● 関西学生リーグは、関学、立命館大、京大の争いになったが、前年度3位の関学がそれまでの各試合に完勝して臨んだ全勝対決の京大戦に18年ぶりの零封勝利で復活、リーグ戦7試合を失点13点の守備力を発揮、2年ぶりの全勝優勝を遂げた。前年1部昇格の甲南大が、4勝3敗の4位に躍進した。 ● 第54回甲子園ボウルは、30,000人の観客の下で開催、強カラインの関学がパワーと多彩な攻撃で法大を圧倒、7TDを挙げ、52-13で2年ぶりの王座に就いた。関学は日大と並んでいた優勝回数20を塗り替える21勝目を挙げた。 ● 社会人はFinal6準決勝でアサヒ飲料を接戦で下したアサヒビールと、これも接戦でリクルートを下した鹿島が日本社会人選手権で対戦、アサヒビールが残り15秒のTDパスで逆転、4回目のチャンピオンになった。 ● 西暦2000年代最初の試合となる第53回ライスボウルは、試合開始の最初のシリーズでTDを挙げたアサヒビールが着実に得点を重ね関学を破り、6年ぶり3度目の優勝をかちとった。 ● 第30回を迎えた高校選手権クリスマスボウルは川崎球場で開催、大産大付高が駒場学園高に完勝、以降4連覇を遂げる最初の年だった。 ● IFAF傘下のアジア連盟 (Asia Federation of American Football, 略称 : AFAF) が設立され、会長に鈴木卓治氏が就任した。 ● 4年生を対象の第17回ガレッジボウル、1月9日川崎球場で開催、この年が最後の開催となった。 ● この年から鈴木卓治氏が日本協会理事長 (第13代) に就任、2002年まで務められた。 	

アサヒ飲料が初の日本一、社会人優勝は5年連続

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月31日 ・ 6月13日 ・ 7月21-23日 ・ 10月8日 ・ 10月30日 ・ 12月1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 川崎球場閉場(野球場としての役割終了)、9月3日:さいたまスーパーアリーナ開場 ・ 朝鮮半島分断後55年で初の南北首脳会談 ・ 第26回主要国首脳会議、名護市で開催 ・ 千代田生命保険破綻。10月20日:協栄生命保険破綻 ・ 世田谷一家殺害事件 ・ BSデジタル放送スタート
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 ・ 5月1日 ・ 6月17日 ・ 7月16日 ・ 8月16日～ ・ 12月18日 ・ 12月18日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月7日 ・ 翌年1月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全国各地でフラッグフットボール指導者講習会開催 ・ 日本協会事務所、東京スタジアム(のちの味の素スタジアム)へ移転 ・ 関東大学連盟、7人制フットボール説明会開催(大井第二)。秋より公式戦開催 ・ 第1回NFLフラッグ日本大会開催(舞洲スポーツアイランド) ・ 第1回NFLフラッグフットボール世界大会開催(カナダ・トロント) ・ 第14回日本社会人選手権、アサヒ飲料、松下電工を下し初優勝(東京ドーム) ・ 日本フラッグフットボール連盟設立、翌1月3日、日本ジュニア選手権開催 ・ 第54回ライスボウル、アサヒ飲料、法大を下し初優勝 ・ 関東高校オールスター戦、「スティックボウル」に改称し開催(等々力球場) ・ 関東大学連盟U19、第5回グローバルジュニア選手権に初参加(米国タンパ)
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 神戸ボウルが1951年開催から50回目を迎え、社会人協会、関西学生連盟が神戸新聞社を表彰した。 ● 関東大学リーグは、これまで主会場として利用してきた川崎球場が野球場からスタジアムへ改築するため閉鎖となり、1部リーグ戦は等々力硬式野球場、大井第二球技場を使用して開催した。関東選手権は新たにCRASH BOWLの名称となり、法大が準決勝で日大を、決勝で7年ぶり決勝出場の日体大を下し、7年連続の優勝を遂げた。決勝は、初めてのさいたまスーパーアリーナで、同施設のこけら落としの試合として開催された。 ● 関西学生リーグは、下馬評が高かった関学が立命館大と接戦を演じたが勝利、2連覇を達成した。以下、立命館大、京大、甲南大であった。 ● 第55回甲子園ボウルは、雨が降り続く中23,000人の観客が観戦、法大が関学を接戦で破り、1997年の同点による関学との両校優勝を除き28年ぶりの単独優勝となった。 ● 社会人は、Final6準決勝で、関西のアサヒ飲料がリクルートを接戦で下し、松下電工が先制した富士通を2Qで同点、3Qで逆転し勝利した。第14回社会人選手権は、初めての関西同士の対戦が東京ドームで開催され、アサヒ飲料が前半のリードを守りきり、20-18の僅差で最後まで分からない大接戦に勝利、初優勝を遂げた。社会人ではシーズン終了後、活動継続のための多くのチームの合併があった。 ● 第54回ライスボウルは、初出場のアサヒ飲料が関東の大学から7年ぶりに出場した法大にランプレーを中心に7TDを奪う攻撃で終始圧倒、初優勝をとげた。これで社会人は5連勝、ライスボウル通算成績を、社会人の10勝8敗とした。 ● 12月18日、全国のフラッグフットボールの統括団体として日本フラッグフットボール連盟が設立された。翌年1月3日、ライスボウルの場で第1回フラッグフットボール日本ジュニア選手権を開催、舞洲オリンパスJrが足立学園中を下し初のチャンピオンとなった。 ● 2001年1月に関東大学連盟の選抜チームが第5回グローバル・ジュニア・チャンピオンシップ(タンパ)に初参加した。アメリカへの学生チーム日本代表参加の始まりだった。 ● 第31回高校選手権クリスマスボウルは、大産大付高が法政二高を大差で破り、2年連続3回目の高校日本一となった。 ● 1995年から開催されてきたシーズン後の関東高校オールスター戦を「スティックボウル」に改称、第1回大会を2001年1月7日、等々力硬式野球場で開催した。 <p>2000年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、中学5、高校109、大学228、社会人80の合計422チームであった。</p>	

関学がライスボウルを制し、初の日本一。海外開催の国際大会への参加が多くなる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 6日 ・ 3月10日 ・ 3月31日 ・ 4月 1日 ・ 8月29日 ・ 9月11日 ・ 10月 7日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中央省庁再編 ・ 東京スタジアム（調布）開場。6月2日：札幌ドーム開場 ・ ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、大阪市に開園 ・ 国立スポーツ科学センター発足 ・ 日本の H-IIA ロケット試験機 1号機打上げ ・ 米国同時多発テロ 911 勃発 ・ 米軍によるアフガニスタン侵攻開始
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月24日 ・ 5月12日 ・ 5月28日 ・ 7月 7日 ・ 11月18日 ・ 翌年1月3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関学創立 111 年・部創立 60 周年記念、関学-プリンストン大（大阪ドーム） ・ 復活京都ボウル、京大-立命館大（西京極陸上競技場） ・ 川崎球場改装記念試合、アサヒビール-松下電工 ・ 第 12 回平成ボウル開催。この回が最後の開催 ・ 札幌ドームオープニング記念第 16 回パインボウル、東北大-北大 ・ 第 55 回ライスボウル、関学、アサヒ飲料大を下し初優勝
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 3月、東京調布市に東京スタジアム完成。関東地区では秋のシーズンで3日間6試合を使用した。後に整備される補助グラウンド（のちのアミノバイタルフィールド）とともに、リーグ戦等で使用開始した。アミノバイタル・フィールドは、その後も永くリーグ戦の主会場として使用した。 ● 関学は、学院創立 111 周年を記念して、3月24日、大阪ドームでプリンストン大と対戦した。 ● この頃、国際化の波は強くなり、NFL ヨーロッパには日本の大学・社会人の経験者がトライアウトに合格することが多く、この年も7名の日本人プレーヤーが NFL ヨーロッパに参加した。 ● 第 12 回となる平成ボウルは、この年、スタンフォード大と関学、オレゴン州立大と京大の各連合チーム間で開催された。1990年から続いた平成ボウルは、この年が最後となり、2002年からはリーグ加盟校全体を対象としたニューエラボウルとなった。 ● 関東学生連盟では、部員数が少ないチームの活動継続とプレーヤーの試合参加を可能とするため、7人制リーグを創設、秋のシーズンに5校が参加し10試合を開催した。 ● 関東大学リーグでは東大が健闘、5年ぶりに関東選手権に出場、準決勝で東大は日体大と接戦を展開し惜敗、一方は法大が専大を下した。決勝は前年に続きさいたまスーパーアリーナで開催、点の取り合の接戦を法大が日体大に 55-42 で競り勝ち、過去の日大の記録に並ぶリーグ 8 連覇を遂げた。 ● 関西学生リーグは関学が 2 戦目の近大戦で第 4Q まで同点、立命館大と試合では最後まで接戦の試合を展開したが 7 戦全勝で優勝、リーグ 3 連覇を達成した。関学のリーグ戦 3 連覇は、1981 年以来 20 年ぶりであった。以下、立命館、京大、近大の順となった。 ● 3 年連続関学と法大の対戦となった第 56 回甲子園ボウルは法大のランを止めた関学が前年の雪辱を果たし優勝、最多優勝回数を更新する 22 回目の学生日本一となった。また同点による両校優勝を除いた通算勝利（単独勝利）回数を 18 回とし日大に並んだ。 ● 社会人は近年上位チームの実力が拮抗してきたが、この年も、Final6 の 1 回戦 2 試合、準決勝 2 試合がいずれも好試合、接戦を展開、最後まで勝敗がわからない試合が続いた。決勝の第 15 回東京スーパーボウルは前年同様、アサヒ飲料と松下電工の関西勢による対戦となり、今回も大接戦、3Q まで 0-7 のアサヒ飲料が 4Q、2TD を挙げ逆転、14-7 で勝利した。 ● 第 55 回ライスボウルは、関学が 2Q、4 つの TD の猛攻、アサヒ飲料の追撃をしのぎ、ライスボウル 5 度目の挑戦で初の日本一に輝く。学生代表の日本一は日大、京大に続き 3 校目、6 年ぶりだった。 ● 第 32 回高校選手権クリスマスボウルは、初めて東京スタジアム（のちの味の素スタジアム）を使用、大産大付高が中大付高を下し 3 連覇を遂げた。 	

立命館大、初の日本一。大産大付高、高校4連覇

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 5月 31日 ・ 10月 12日 ・ 10月 15日 ・ 12月 31日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 欧州連合 ユーロ紙幣とユーロ硬貨の流通開始 ・ サッカーWC 日韓大会開幕 ・ バリ島爆弾テロ事件 ・ 拉致されていた日本人 5名、北朝鮮より帰国 ・ 西宮スタジアム・西宮球技場閉場
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 9日 ・ 2月 19日 ・ 3月 16日 ・ 6月 ・ 6月 29日 ・ 7月 ・ 8月 4日 ・ 9月 23日 ・ 秋 ・ 10月 6日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 6 回医科学研究会、初の関西開催 (西宮市大学交流センター) ・ 関西アメリカンフットボールコーチ協会発足 ・ 国際親善試合、全関西学生-メキシコ (メキシコシティ) ・ 日本協会事務所、港区白金に移転 ・ 第 48 回西宮ボウル、最後となる開催 ・ 第 1 回ニューエラボウル (西宮スタジアム) ・ アメリカンボウル、初の関西地区開催。ワシントン-サンフランシスコ (大阪ドーム) ・ 関東大学リーグ、東京スタジアム補助グラウンド (のちのアミノバイタル) 使用開始 ・ 関西学生連盟、6人制リーグを創設 ・ 中学生フットボール東西交流戦第 1 回フレンドシップボウル開催 (早大東伏見 G) ・ 第 56 回ライスボウル、立命館大、シーガルズを下し初優勝
この年の活動 (競技年度)	<p>選手の競技活動の安全性向上を目的とし 1997 年 5 月に第 1 回を開催、以降毎年開催してきたアメリカンフットボール医科学研究会が、この年初めて関西地区 (西宮市大学交流センター) で開催された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 3 月に関西学生オールスターが史上初のメキシコに遠征しメキシコ学生選抜と対戦。標高 2,400m の高地の戦いに苦しんだが、試合終了 2 分前の再逆転でシーソーゲームに勝利した。 ● 8 月 4 日、1989 年から東京ドームで開催されてきた NFL のプレシーズンゲーム、アメリカンボウルが、この年、会場を大阪ドームに移し開催され、ワシントンとサンフランシスコが対戦した。 ● 1954 年 9 月に第 1 回大会が開催された関東-関西のオールスター戦西宮ボウルはこの年 6 月 29 日に第 48 回大会を開催、西宮スタジアムの閉場に伴う最後の試合を地元関西が勝利した。会場の都合で開催できなかった 1964 年を除く毎年 5 月/6 月に開催され、春季シーズン的一大イベントだった。 ● 関東大学選手権準決勝では、早大が法大に、専大が明大にそれぞれ勝利、両試合とも最終の FG で勝敗が決まった接戦であった。決勝は 3 年目のさいたまスーパーアリーナで開催され早大が専大に快勝、創部 69 年目で悲願の甲子園ボウル初出場を遂げ、また法大は 9 年連続出場を逸した。 ● 関西学生リーグは、前年まで 3 年連続優勝の関学が、近大と立命館大に敗れ、4 年連続優勝を逃し、全試合、安定した試合を展開した立命館大が関学戦も完勝、4 年ぶり 4 度目の優勝を遂げた。 ● 第 57 回甲子園ボウルは、立命館大が 1Q に 2TD を挙げ、以降も順調に得点、早大は多彩な攻撃で対応したが、立命館大がスピードのある守備でこれを封じ 4 年ぶり 3 度目の優勝を果たした。これで立命館大はこれまで出場した甲子園ボウル 3 勝 0 敗とした。 ● 社会人は Final6 準決勝で、シーズン後閉場となる西宮スタジアム最後の試合で、富士通が 1Q に挙げた TD を守り松下電工に勝利、一方の試合はシーガルズがアサヒ飲料に完勝。東京ドームで開催された決勝戦は最後まで勝敗がわからない試合となったがシーガルズが富士通を破り優勝した。 ● 日本選手権となり 20 年目の第 56 回ライスボウルは、立命館大が同点で迎えた 4Q、一挙に 3TD の猛攻、社会人代表のシーガルズを破り、大学チームとしては日大、京大、関学に続く 4 校目、創部 61 年目で初の日本一となった。 ● 第 33 回高校選手権クリスマスボウルは、大産大付高が、日大三高を破り、4 年連続 5 度目の優勝を遂げた。大産大付高の 4 連覇は、1970 年の第 1 回大会からの関学高の 5 連覇に次ぐものであった。 ● 関西高校では、シーズン後に関西地区の地区選抜対抗戦プリンスボウルを創設。第 1 回大会を王子スタジアムで 2003 年 1 月に開催した。 ● この年から金澤好夫氏が日本協会理事長 (第 14 代) に就任、2005 年まで務められた。 	

第2回ワールドカップで日本が2連覇、フェアプレー賞受賞。立命館大、連続の日本一、大学勢3連覇

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 1日 ・ 3月 20日 ・ 4月 4日 ・ 5月 12日 ・ 9月 25日 ・ 10月 1日 ・ 10月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米スペースシャトル・コロンビア号帰還時空中分解事故 ・ 米国主体の有志連合軍、イラクへ侵攻（イラク戦争） ・ SARS、新感染症に指定 ・ 第1回スポーツアコード会議、マドリッドで開催。以降、毎年開催 ・ 日本フットボール学会設立（主としてアメリカンフットボール、ラグビー、サッカー対象） ・ 宇宙航空研究開発機構（JAXA）発足 ・ 日本スポーツ振興センター設立
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 23日 ・ 4月 1日 ・ 5月 11日～ ・ 5月 16日 ・ 6月 28日 ・ 7月 10日～ ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 10日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回 WC アジア・オセアニア地区予選、日本－韓国。日本勝利（長居球技場） ・ 関西協会、王子スタジアム内に事務所移転、4月12日：王子スタジアム改修工事竣工 ・ 第1回関西中学アメリカンフットボール選手権 ・ IFAF（国際連盟）、国際スポーツ団体総連合に加盟（準会員） ・ 関西高校4府県オールスター対抗戦、第1回プリンスボウル（王子スタジアム） ・ 第2回ワールドカップ、ドイツ・フランクフルトで開催、日本2連覇 ・ 第57回ライスボウル、立命館大、オンワードスカイラークスを下し、2回目の優勝 ・ えびすボウル（Xリーグウエストと関西学生のオールスター戦）
こ の 年 の 活 動 （ 競 技 年 度 ）	<p>競技活動70年目を迎えた。記念として翌2004年6月、IVY-SAMURAI BOWLが開催された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 5月、関西地区で中学アメリカンフットボール選手権が創設され、その第1回大会が8チームの参加で6月まで開催。決勝で千里ファイティングBeeが長浜西中を下し優勝した。 ● ドイツ・フランクフルトで開催された第2回ワールドカップ、4か国で開催。その出場権を決めるアジア地区の予選は2月23日、長居球技場で開催、日本が韓国を88-0で破り出場を決めた。第2回WCでは第1回に続きアメリカが不参加だったが、日本チームは準決勝でフランスに23-6で勝利、決勝でメキシコに34-14で快勝、2連覇を遂げた。また同大会で日本代表はフェアプレー賞を受賞した。この年、国際連盟上席副会長に金澤好夫氏が就任した。 ● 関東大学リーグは、関東選手権の準決勝で東海大が早大を、法大が専大をともに接戦で破り、初めて味の素スタジアム（東京スタジアム）で開催された決勝は、法大が終始リード、2年ぶり11回目の関東大学一となる。 ● 関西学生リーグは、京大が5年ぶりに関学に勝利したが、立命館大が京大、続く最終戦の対関学戦では試合終了目前で逆転勝ち、全勝優勝を達成した。京大が2位、以下、近大、関学の順位となった。 ● 第58回甲子園ボウルは観客28,000人を集め開催、3度目なる立命館大と法大の対戦でとなり、立命館大が8TDを挙げるとともに相手を1TDに抑え攻守に法大を圧倒、61-6の大差で下し、2年連続優勝をした。これで東西の通算成績は、関西29勝、関東25勝、4引分けとなった。 ● 社会人は、例年の平日夜開催が一つの文化となっている東京スーパーボウルが、この年から「ジャパンエックスボウル」と名称変更し、オンワードが4年ぶり出場のアサヒビールを13-10の接戦で破り、悲願の初優勝を達成した。 ● 第57回ライスボウルは、立命館大がオンワードに4TDを挙げ前半のリードを守り切り28-16の勝利。立命館大は2年連続日本一、大学勢は3連覇となった。立命館大の連覇は、京大、日大に続き学生陣3校目、13年ぶりだった。ライスボウルが大学－社会人の対戦となって22年、対戦成績を11勝11敗の5分となった。 ● 第34回高校選手権クリスマスボウルは4Q残り50秒で関学高が日大三高を逆転、8年ぶり15回目の優勝を遂げた。 	

アメリカンフットボール活動 70 年の記念行事開催。松下電工、10年ぶりのライスボウル勝利

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10月 1日 ・ 10月 23日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ MLB イチロー氏、MLB シーズン最多安打記録更新 ・ 新潟県中越地震 (M6.8)
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 21日 ・ 3月 14日 ・ 6月 20日 ・ 7月 3日 ・ 8月 28日 ・ 8月 29日 ・ 9月 10日～ ・ 12月 18日 ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 8日 ・ 翌年 1月 15日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本協会、第 1 回ドクターとトレーナーの集い開催 ・ 国際親善試合、全関西学生-全メキシコ学生 (王子スタジアム) ・ 70 周年記念第 1 回 IVY-SAMURAI BOWL (国立競技場) ・ 松本瀧蔵氏ら 8 名、日本アメリカンフットボールの殿堂入り (第 1 回殿堂顕彰) ・ 川崎球場人工芝導入完了記念アゼリアボウル、アサヒビール-在日アメリカンクラブ選抜 ・ 九州地区・日韓親善中学生フラッグフット大会 (九産大球場)。以降、日韓交互開催 ・ 第 2 回 IFAF シニア・フラッグ・WC 開催、日本初参加 (フランス) ・ 社会人選手権、初の関西開催。日本初のドーピング検査実施 (神戸ウイングスタジアム) ・ 第 58 回ライスボウル、松下電工、立命館大を下し 2 度目の優勝。ドーピング検査実施 ・ 関東学生連盟・第 1 回川崎カレッジボウル (川崎球場) ・ Xリーグ・第 1 回チャレンジボウル (横浜スタジアム)
この年の活動 (競技年度)	<p>1996 年、殿堂開設時の「名誉の殿堂入り」のポール・ラッシュ博士に続き、日本のフットボール活動開始に貢献された松本瀧蔵氏はじめ 8 名が新たに日本アメリカンフットボールの殿堂入りとなった。 (殿堂顕彰された方々のご紹介は、この年以降の顕彰者も含め、日本協会 HP でご紹介 ： 「日本協会 HP」→「殿堂・歴史」→「日本アメリカンフットボール 顕彰者」)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東大学連盟は、4 月 1 日、関東学生連盟に改称し、創立 70 周年記念事業として IVY リーグからコーチ、プレーヤー数名を招き、IVY-SAMURAI BOWL を国立競技場で開催した。 ● 関東大学リーグは、初戦で前年覇者の法大がこの年 1 部昇格の横国大に敗れる波乱があったが、その後勝ち進みブロック 1 位となった。関東大学選手権は、準決勝が 2 試合とも最後まで分からない接戦となり、法大が専大を、中大が早大を下した。味の素スタジアムで開催された決勝は、初めて決勝進出の中大が法大と対戦、前半から得点を重ねた法大が快勝、甲子園出場を果たした。 ● 近年接戦が続く関西学生リーグは、立命館大が関学に敗れ、その後の試合で関学は前年に続き京大に敗戦、ともに 6 勝 1 敗となり立命館大と関学の両校優勝。甲子園出場権をかけたプレーオフは長居陸上競技場で開催、この試合も 14-14 の同点で 4Q 終了し 3 度のタイブレイクの攻防を立命館大が決め、3 年連続の甲子園出場を決めた。 ● 第 59 回甲子園ボウルは、立命館大が法大と対戦、前半は拮抗した試合展開となったが、3Q の逆転から追加点を挙げ一挙に法大を突き放し、3 連覇を達成した。この勝利で立命館大は、5 回出場した甲子園ボウルの全勝記録を続けた。 ● 社会人は FINAL6 準決勝でアサヒビールとオンワードスカイラク스가対戦、同点終了後のタイブレイクでアサヒビールが FG で勝利、一方の試合では松下電工がオービックと対戦し鉄壁の守備で接戦を制した。社会人全日本選手権 (ジャパンエックスボウル) は、初めての関西地区開催 (ウイングスタジアム神戸) となり、松下電工が接戦でアサヒビールを下し、地元開催に華を添えた。 ● 第 58 回ライスボウルは、社会人を制しライスボウル 4 度目の出場の松下電工が立命館大と対戦、松下電工の鉄壁な守備陣が 4 インターセプトを奪う活躍で快勝、立命館大の 3 連覇と大学勢の 4 連覇を阻み、10 年ぶり 2 度目の日本一となった。 ● 同日、東京ドームで開催された第 10 回を迎えたさくらボウル (タッチフットボール女子全日本王座決定戦) は、社会人の西宮アンジェリックアラムニーが武庫川女子大を破り初優勝を果たした。 ● 第 35 回高校選手権クリスマスボウルは初めて王子スタジアムで開催、関学高が日大三高を破り 2 年連続の優勝をした。 	

日本アメリカンフットボール協会が社団法人に。立命館大、甲子園ボウル初黒星

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月16日 ・ 3月25日 ・ 4月25日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気候変動に関する国際連合枠組み条約、京都議定書発効 ・ 「愛・地球博」(愛知万博)開幕 ・ JR 福知山線脱線事故 ・ 国連、2005年を「スポーツと体育の国際年」と制定
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月末 ・ 2月26~27日 ・ 4月2日 ・ 4月19日 ・ 4月20日 ・ 7月29日 ・ 7月14日 ・ 8月7日 ・ 10月29日30日 ・ 12月18日 ・ 12月25日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 王子スタジアム、ナイター設備設置等改装工事完了 ・ 社会人協会、第1回ジョン・ポント・レジェンド・クリニック ・ アミノバイタル、ナイター設備等改装工事完了。春：駒沢第二・駒沢補助、人工芝に ・ 2007年第3回WC、川崎市で開催決定 ・ IFAF(国際A F連盟)、GAISF(世界スポーツ団体総連合)正式会員へ ・ 日本協会、社団法人化し「社団法人日本アメリカンフットボール協会」となる ・ テストマッチ、JAPAN USA BOWL。日本代表-チーム USA ハワイ(東京ドーム) ・ 第13回アメリカンボウル、アトランタ-インディアナポリス。この回が最後の開催 ・ 29日(大井町きゅりあん)、30日(長居球技場)：アンチ・ドーピング講習会 ・ 第60回甲子園ボウルでドーピング検査実施 ・ 第1回関東中学アメリカンフットボール選手権、世田谷ブルーサンダース優勝 ・ 第59回ライスボウル、オービック、法大を下し3回目の優勝(リクルート時代を含む) ・ U19、第10回NFLグローバルジュニア選手権、日本代表3位(デトロイト)
この年の活動 (競技年度)	<p>7月、日本アメリカンフットボール協会が文部科学省より「社団法人」の認可、組織力が強化された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1989年から開催されてきたNFLプレシーズンゲーム、アメリカンボウルが2年ぶりに開催され、東京ドームでアトランタとインディアナポリスが対戦した。13回開催されたアメリカンボウルは、この年が最後となった。1989年のスターボウル以降、カレッジの試合を含めほぼ毎年開催されてきた米国チーム同士の対戦は、この年からしばらく途絶えることとなった。 ● 関東大学リーグは、関東選手権準決勝で早大の終了41秒前の逆転FGがわずかに外れ法大が辛勝、一方、慶大が前半のリードを守り明大に勝利、ともに決勝に進んだ。決勝は法大が慶大を大差で破り、13回目の甲子園出場を決めた。 ● 関西学生リーグは、立命館大と関学が10年ぶりの全勝対決、終了間際の関学の猛攻をゴールライン前で止めた立命館大が優勝、初の4連覇を達成した。関学はこれで4年連続で甲子園ボウル出場を逃し、1949年の第4回大会初出場以来、初めて甲子園ボウルを知らない卒業生を出すことになった。 ● 3年連続、法大と立命館大の対戦となった第60回甲子園ボウルは接戦を法大が制し、5年ぶり、4度目の優勝となった。立命館大はこれまで出場した甲子園ボウル5戦全勝だったが、6戦目にして初の敗戦となった。 ● 社会人のジャパンエックスボウル日本社会人選手権準決勝は、前半のリードをオービックが守りアサヒビールに勝利、一方の試合は松下電工が前半のFGを守り鹿島を下した。決勝は前半2TD先行されたオービックが後半逆転、松下電工を下し優勝した。 ● 法大とオービックの対戦となった第59回ライスボウルは、オービックが47-17で快勝、春の試合から12連勝、リクルート時代を含めライスボウル通算7年ぶり3回目の優勝を飾った。 ● 第36回高校選手権クリスマスボウルは、慶応高が大産大付高を接戦で下し、1983年の関学高との両校優勝以来22年ぶり3回目の優勝を遂げた。 ● 2003年の関西地区に続き、関東でも第1回関東中学生アメリカンフットボール選手権が12月25日に開催され、世田谷ブルーサンダースが佼成学園中を下し、最初の栄冠を得た。 ● 翌2006年1月、日本U19代表が、NFLがデトロイトで開催した「第10回NFLグローバルジュニア選手権(U19)」に6回目の参加し、5か国参加で日本代表が3位となった。 ● この年から山縣平蔵氏が日本協会理事長(第15代)に就任、2008年まで務められた。 <p>2005年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、高校106、大学220、社会人64の合計390チームであった。</p>	

ボウルゲーム、接戦続く。オンワードスカイラークス、2回目の日本一

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 3日 ・ 6月 24日 ・ 8月 25日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 野球第1回ワールドカップ開幕、日本優勝 ・ 万博公園、EXPO FLASH FIELD 竣工、6月30日：国立西が丘運動場廃止 ・ 京大山中信弥教授ら i P S 細胞開発成功と論文発表
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 19日 ・ 4月 16日 ・ 5月 7日 ・ 7月 8日 ・ 秋 ・ 翌年1月3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第10回アメリカンフットボール医科学研究会(鶴見大学) ・ アミノバイタル・フィールド、観客席改修工事後、初試合 ・ 関東学連、第1回医科歯科リーグオールスター戦(アミノバイタル) ・ 6人制女子タッチフットボール第1回夏季選手権大会(山梨・清里) ・ 関東大学リーグ1部、ブロック8校の2ブロック制とし、1位校による関東選手権に ・ 第60回ライスボウル、オンワードスカイラークス、法大を下し2回目の優勝
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 関西地区で万博公園に新拠点となる EXPO FLASH FIELD が完成、関東地区ではアミノバイタル・フィールドが改修され東西でグラウンドが充実した。 ● 関東大学リーグは、1部リーグのブロックを1校増やし8校で編成、また1995年からのA、Bブロックの各1、2位による4チームのトーナメントを両ブロックの1位同士の選手権試合のみに変更した。そのCRASHボウル(第37回関東選手権)は、前年と同一の法大と慶大の対戦となり、法大が前半5つのTDをすべてパスで決め完勝、法大は4年連続の甲子園出場を遂げた。慶大は第1回、3回と甲子園ボウルに出場をしたが、その後、出場の機会がなく、関東選手権決勝にはこの年で6回目の出場となったが、今回も甲子園出場の夢は叶えられなかった。 ● 関西大学リーグは、関学と立命館大が他校を寄せ付けず全勝対決。関学が前半終了間際にセイフティを挙げ、その差を守り切り16-14で辛くも勝利。関学は甲子園ボウルに5年ぶり44回目の出場を決め、立命館大は5連覇を逸した。3位は京大と関大、5位は神戸大、6位は同志社大と近大、8位は大産大となった。 ● 第61回甲子園ボウルは、30,000人の観客の下で開催、試合開始のキックオフ後の最初のプレーで法大が80ヤード独走のTD、その後法大、関学ともに6TDを挙げる攻撃戦となったが、FGの差の45-43で法大が勝利し2連覇。途中、雷鳴による大会史上初の40分の中断があった。 ● 社会人は、Final6の準決勝で、オンワードスカイラークスがオービックを、鹿島が松下電工を、ともに最後まで勝敗がわからない接戦を制した。関西地区では2度目となる京セラドーム大阪で開催された第20回社会人選手権は、オンワードスカイラークスが再逆転で最後のプレーまで勝敗がわからない大接戦を制し優勝した。 ● 第60回ライスボウルは、32,598人の観客の下でオンワードスカイラークスと法大が接戦を展開、TFPのキックの1点差でオンワードスカイラークスが、オンワードとスカイラークの合併6年目で合併後初の日本一、オンワード時代を含めると2回目の優勝となった。1点差の試合は、ライスボウルが全日本選手権となった第37回(1984年)、および第40回(1987年)以来3回目であった。ライスボウル当日、東京ドームでライスボウル第60回記念祝賀会が開催された。 ● 第37回高校選手権クリスマスボウルも接戦となり日大三高が24-21で関西大倉高を下し、10年ぶり2度目の栄冠を得た。 ● 近年充実した活動を行っている女子タッチフットボールは、この年からフットボールゆかりの地、山梨県清里で、6人制女子タッチフットボール第1回夏季選手権大会を11チームが参加し開催、関西Aチームが優勝した。この大会は、後に「サマータッチ・イン・キヨサト」の名称となった。 <p>甲子園ボウル、社会人選手権、ライスボウル、クリスマスボウルとも試合終了まではっきりとした勝敗が分からない接戦が多かったシーズンだった。</p>	

第3回ワールドカップ、川崎で開催。日本、準優勝。高・大・社とも関西勢、制覇

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 2日 ・ 7月 16日 ・ 9月 14日 ・ 10月 1日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国連気候変動政府間パネル、温暖化による 100 年後の環境悪化予測 ・ 新潟県中越沖地震 (M6.8) ・ 月周回衛星かぐや、打上げ ・ 郵政 3 事業民営化
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 27、28日 ・ 3月 28日 ・ 6月 3日 ・ 7月 7~15日 ・ 7月 27日 ・ 8月 7日 ・ 12月 16日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 1 回 X FLAG、関東、関西で開催 ・ 日本協会、日本体育協会 (現日本スポーツ協会) に準加盟 ・ 日本代表強化試合、対関東学生選抜 (横浜スタ)、17 日 : 対在日米軍選抜 (川崎) ・ 第 3 回ワールドカップ川崎で開催。6 개국参加で日本準優勝 ・ パシフィックリムボウル第 10 回記念大会 (米・アシュランド高スタジアム) ・ 関東中学生アメリカンフットボール連盟設立 ・ 甲子園ボウル、球場改装のため長居陸上競技場で開催。18 年ぶりの関学 - 日大 ・ 第 61 回ライスボウル、松下電工、関学を下し 3 回目の優勝
この年の活動 (競技年度)	<p>第 3 回ワールドカップは 7 月 7 日、日本、アメリカ、スウェーデン、フランス、ドイツ、韓国の 6 チームが参加し、初の日本開催 (会場は等々力陸上競技場、川崎球場)。日本は初戦のフランス、2 戦目のスウェーデンに共に快勝。決勝は初参加の米国と対戦、17-17 で延長戦に入り、延長第 2 節で米国が FG を決め、接戦を制し、日本は準優勝。日本チームのスピード、正確なチームプレー、コーチ陣的確な戦略、戦術が光った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東大学リーグはこの年から引分けを廃止しタイブレイクを採用。A ブロックは全勝対決となった法大が早大を延長 5 タイブレイクで下し、B ブロックは日大が全勝で 1 位となった。関東大学選手権は、日大が法大との 20 点差を逆転し 17 年ぶりとなる優勝を遂げ、法大の公式戦連勝は 30 で止まった。 ● 関西学生リーグは、2 強の関学と立命館大の 3 年連続のリーグ戦全勝対決となった。試合は関学守備陣が後半 2 回のターンオーバーをとる健闘、また攻撃ではこの試合用のスペシャルプレーを用意した関学が FG 差で勝利、2 年連続 45 回目の甲子園出場を遂げた。 ● 第 62 回甲子園ボウルは、甲子園球場が改装のため長居陸上競技場で 32,000 人の観客を集め開催、関学と日大の 18 年ぶりの伝統校対戦となった。この試合日大は「白」のジャージで出場。試合は大接戦となり、関学が残り 3 秒の TD で逆転勝利、6 年ぶり 23 回目の優勝を果たした。関学の甲子園ボウル対日大戦の勝利は 30 年ぶりだった。 ● 社会人は、Final6 準決勝で、松下電工がオービックを延長 2 回戦で FG を決め勝利、富士通がオンワードスカイラックスを下し、ともに決勝に進んだ。決勝のジャパンエックスボウルは、序盤の主導権争いを制した松下電工が、富士通を下し 5 度目の優勝を遂げた。 ● 第 61 回ライスボウルは 34,487 名の観客を集め開催、関学と松下電工の 3 年ぶりの関西勢の対戦を、松下電工が前半のリードを守り 3 年ぶり 3 度目の優勝となった。両チーム合わせ 12TD、2FG の攻撃戦だった。社会人チームの勝利は 4 年連続、通算社会人 14 勝、学生 11 勝となった。 ● 高校は大産大付高が早大学院を破り 5 年ぶりの全国優勝。関西地区の高校が米オレゴン州アシュランド高と隔年開催地を交代して開催しているパシフィックリムボウルが第 10 回大会を迎え、この年 7 月米国の同校スタジアムで開催、関西高校選抜が勝利、4 連勝を遂げた。 ● この年 8 月、関東中学生アメリカンフットボール連盟が 11 校の参加で設立された。 <p>この年、高校、大学、社会人のチャンピオンはすべて関西勢となった。(全日本選手権のライスボウルも、この結果、関西勢の対戦)</p>	

立命館大、5年ぶり3度目の日本一。U-19、米国に勝利

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 1日 ・ 1月17日 ・ 1月21日 ・ 4月 4日 ・ 7月 7-9日 ・ 9月15日 ・ 10月28日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1997 採択京都議定書の約束期間、スタート ・ 学習指導要領改訂、脱ゆとり教育へ ・ ナショナルトレーニングセンター供用開始 ・ JOC エリートアカデミー開校 ・ 第34回主要国首脳会議、洞爺湖町で開催 ・ リーマン・ブラザーズ経営破綻 ・ 日経平均バブル破綻後の最安値 (6,994 円 90 銭)
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月22日 ・ 3月22日 ・ 6月 1日 ・ 7月 1日 ・ 7月 ・ 12月21日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月10日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ U19 グローバルチャレンジボウル 2008 川崎大会。日本、米国に勝利 (川崎球場) ・ 初の中学生オールスター東西対抗戦。のちの東西中学生交流戦 (川崎球場) ・ 第22回ヨコハマボウル開催。この回が最後となる ・ 文部科学省「新・新学習指導要領」にフラッグフットボール追加を発表 ・ ラッシュ記念フィールド第1期工事完成 (山梨・清里) ・ 甲子園ボウル、甲子園球場改装のため、前年に続き長居スタジアムで開催 ・ 第63回ライスボウル、立命館大、パナソニック電工を下す。最後の大学チームの勝利 ・ 女子交流戦、クラブ・ワイルドキャッツ・クラブ・レディコング&東京ファニーコルツ
この年 の活動 (競技 年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 3月22日、大学、高校の19歳以下の選手からなる日米交流戦、U-19 グローバルチャレンジボウルが川崎球場で開催され、日本代表チームが24-14で米国代表チームに勝利した。来日した米国コーチ陣が講師となりクリニックも開催、グラウンド以外での教育・交流も深めた。 ● 6月1日、第22回ヨコハマボウルが日体大-アサヒビール、日大-関学の対戦で開催。異色の顔合わせのカードが多く、春のイベントとして普及に貢献してきたヨコハマボウル、1987年から22回目のこの年が最後になった。 ● 関東大学リーグは、ともにブロックを全勝で終えた法大と日大が、前年に続きクラッシュボウルで対戦。4Q残り時間1分で日大が追いつき、同点の両校優勝。タイブレイク2回目のTFPの差で法大が2年ぶり15度目の甲子園出場権を得る。 ● 関西学生リーグは、関学と立命館大の最終週の4年連続の全勝対決となった。立命館大が堅守を発揮、競り勝ち3年ぶり7度目の優勝となった。 ● 前年に続き長居スタジアムで開催された甲子園ボウルは、立命館大が鉄壁な守備陣の活躍で4つのターンオーバーを奪い、法大の得点をパントブロックからのTDだけに抑え19-8で勝利、4年ぶり6度目の優勝を飾った。 ● 社会人 Final6 準決勝は、鹿島がアサヒ飲料から5インターセプトを奪う守備陣の活躍で快勝、パナソニック電工がランで5TDを挙げオンワードに快勝した。続く第22回社会人選手権ジャパンエックスボウルは、パナソニック電工が2TD差を逆転、鹿島を下し2度目の連覇を達成した。 ● 第62回ライスボウルは、立命館大がパナソニック電工と対戦、前半のリードを後半守備が健闘、パナソニック電工の残り7秒の逆転狙うパスを止め17-13で競り勝ち、5年ぶり3度目の日本一の座についた。このライスボウルでの立命館大の勝利は、2021年1月の第74回ライスボウルまで続く学生-社会人の一連の対戦の学生代表、最後の勝利であった。 ● 高校は、2年連続の大産大付高-早大学院の対戦となり、大産大付高が28-21の接戦を制し、2年連続7度目の全国制覇を果たした。 ● 女子フットボールは、支援企業の撤退で活動困難な状況が続いていたが、翌2009年1月、関係者の努力で東西の交流戦、クラブ・ワイルドキャッツ・クラブ・レディコング&東京ファニーコルツ対戦が王子スタジアムで開催された。 ● この年から谷口輝雄氏が日本協会理事長(第16代)に就任、2010年まで務められた。 	

甲子園ボウル、全国の代表による全日本大学選手権に。関大、1943年以來、62季ぶりの大学日本一

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・春頃 ・6月11日 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界同時不況で電機、自動車など巨額赤字、人員削減相次ぐ ・WHO 新型インフルエンザに対し、41年ぶりのパンデミック宣言
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・3月21日 ・3月22日 ・4月1日 ・4月19日～ ・春 ・6月27～7月5日 ・秋 ・12月13日 ・翌年1月3日 ・翌年1月30日 	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回 U19 グローバルチャレンジボウル川崎大会、米国代表に日本勝利 (川崎球場) ・甲子園ボウルを全国8地区の大学による日本一決定戦とすることを決定 ・日本協会、社会人協会事務所を東京都品川区に移転 ・日本フットボール75周年記念、早大、明大、立教大による創立3校マッチ開催 ・新型インフルエンザ (H1N1型) 流行、競技活動に制約 ・第1回 IFAF ジュニア世界選手権大会 2009、日本3位 (米国オハイオ州) ・Xリーグ、秋季リーグを2ステージ制へ ・第64回甲子園ボウル、60年ぶり出場の関大、法大を下し、2度目の優勝 ・第63回ライスボウル、鹿島、関大を下し2回目の優勝 ・IFAF、U19、チームUSA-世界選抜の世界選抜に日本代表5名初参加。
この年の活動 (競技年度)	<p>前年日本フットボール75年を迎えた記念行事として、日本協会は関係者をゲストに招き第1回 JFAF フットボールコンベンションを開催、多くの参加者を集めた。コンベンションは、関西地区で2月28日、関東地区で3月14日それぞれ開催された。また同じく75周年記念事業として7月25日、ノートルダム・フットボール・レジェンズを招いたノートルダム・ジャパン・ボウルを東京ドームで開催、レジェンズが19-3で日本代表に勝利した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●6月、U19によるIFAF第1回ジュニア世界選手権2009が8か国が参加し米国オハイオ州キャンプトンで開催され、日本代表は3位となりフェアプレー賞を得た。 ●この年、大学は、全国の大学チャンピオン決定を、全国8地区の代表によるトーナメント方式にすることにした。これまで「東西大学王座決定戦」として開催されてきた甲子園ボウルは、東日本3地区 (北海道、東北、関東) と西日本5地区 (東海、北陸、関西、中四国、九州) のそれぞれの勝者の対戦として「全日本大学アメリカンフットボール選手権 (全国大学選手権)」の決勝として行うことになった。このトーナメントに関東大学リーグからはA、B両ブロックの1位が出場することとなったため、関東大学選手権がこの年より無くなった (2011年から復活)。 ●関東大学リーグは、Aブロックで法大が明大、慶大と接戦を演じながら全勝、Bブロックは早大が1部に昇格したばかりの国士館大に負けたが、残りの試合を勝ち抜き1位となり、ともに全日本学生選手権への出場権を得た。東日本代表決定戦決勝は、法大が早大を下し、16回目の甲子園出場を決めた。 ●関西学生リーグは、古豪関大が、ともに優勝の呼び声高かった関学と立命館大の試合を、関学にはリーグ第3戦で、立命館大にはリーグ4戦目で、それぞれ接戦で制し優勝した。関大の優勝は、戦後間もない1949年 (昭和24年) 以来の60季ぶりであった。西日本代表決定戦では、関大が名城大を下し、1949年以來60年ぶり3度目の甲子園ボウル出場を決めた。 ●甲子園ボウルは、全国212校から勝ち上がった、西日本の勝者関大と東日本の勝者法大が対戦し、関大が、互いに点の取り合いとなった試合を第4Qでふり切り、1948年の第2回大会以來61季ぶり2度目の大学日本一となった。 ●社会人は、Xリーグ14年目となり、リーグ戦方式を改編、3ステージ制とした。ファイナルステージでは鹿島がパナソニック電工を、富士通がアサヒビールを破り決勝に進出、決勝の第23回社会人選手権ジャパンエックスボウルでは鹿島が富士通を接戦で下し、12年ぶり2度目の優勝を果たした。 ●ライスボウルは、35,742名の観客の下で、2度目の出場の鹿島と初出場の関大が、最後まで息詰まる接戦を展開した。試合最後のプレーで鹿島がFGを決め関大を下し、12年ぶり2度目の栄冠を得た。 ●第40回クリスマスボウルは、日大三高が立命館宇治高を下し3年ぶり3度目の制覇を果たした。 ●翌2010年1月IFAF主催のU19、米国-世界選抜の世界選抜チームに日本からコーチ2名、選手3名が初めて参加した。この試合は、のちにインターナショナルボウルとなった。 	

オービックが5年ぶり4度目のライスボウル制覇。全日本、ドイツに勝利

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月12日 ・ 1月19日 ・ 2月17日 ・ 6月13日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 欧州委員会、ギリシャの財政悪化を指摘、ギリシャ危機の始まり ・ 日本航空、会社更生法の適用申請 ・ チリ地震 (M8.8) ・ 小惑星探査機はやぶさ (初号機)、7年間の旅を終え帰還 ・ 日本の国民総生産 (GNP) 世界3位に後退
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 3日 ・ 1月11日～ ・ 3月21日 ・ 4月、7月 ・ 4月24日 ・ 11月～12月 ・ 12月 5日 ・ 翌年1月3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 松葉徳三郎氏ら5名、日本アメリカンフットボールの殿堂入り (第2回殿堂顕彰) ・ 日本協会、指導者育成・公認資格制度を目指し、米国で指導者養成研修を実施 ・ 日米親善 U19 カメリアボウル。のちのトモダチボウル (川崎球場) ・ 日本協会、第1回公認認定指導者講習会 (全国各地) ・ ジャーマン・ジャパン・ボウル、日本-ドイツ。日本快勝 (デュッセルドルフ市) ・ 高校選手権、20校によるトーナメント戦へ ・ 東北学生リーグ南北戦第1回ハレオ・センダイボウル (ユアテックスタジアム仙台) ・ 第64回ライスボウル、オービック、立命館大を下し4回目の優勝

この年の活動
(競技年度)

- 2010年1月3日のライスボウルの場で、戦前に関西地区の活動に貢献された松葉徳三郎氏ら5名の第2回殿堂顕彰表彰が行われ、これで殿堂顕彰者はポール・ラッシュ博士はじめ14名となった。
- 2011年の世界選手権 (旧ワールドカップ) の予選を兼ねた第1回アジア選手権は2月川崎球場で開催、日本代表が76-0で韓国代表に圧勝、世界選手権への出場を決めた。2011年の世界選手権への強化を目的に日本代表がドイツに遠征、4月24日、ドイツ・デュッセルドルフで開催したドイツ・ジャパン・ボウルで、日本は「大きさ」のドイツに24-14で勝利した。
- 関東大学リーグは、法大と早大が、前年同様、ブロック1位となり、大学選手権トーナメントに出場、東日本決勝では早大が法大を破り、8年ぶり2度目の甲子園出場となった。
- 関西学生リーグは、立命館大、関学、前年優勝の関大の3校が14年ぶりの同率優勝となり、この3校が大学選手権トーナメントに出場。西日本代表決定トーナメントの準決勝で関大が関学との接戦を制し決勝に進み、決勝では立命館大が関大に快勝、立命館大が甲子園出場を果たした。
- 第65回甲子園ボウルは、内野フィールドに初めて芝生が貼られ、従来の外野の横方向から、この年、外野から本塁への縦方向にグラウンドの配置を変更、29,000名の観客を集め開催。2年ぶり8回目出場の立命館大が8年ぶり2度目の出場の早大を第1Q後半から攻守に圧倒、危なげなく2年ぶり7度目の優勝を飾った。
- ジャパンエックスボウルは、オービックがパナソニック電工を終了2分55秒前のパスによるTDで劇的な逆転で下し、5年ぶり5度目のX制覇を果たした。オービックはクラブチーム4年ぶりのライスボウル出場となった。
- 第64回ライスボウルは、オービックが立命館大を無得点で抑えて勝利、5年ぶり4度目の日本一となった。オービックは、シーガルスとして出場した2003年1月開催の第56回ライスボウルで立命館大に敗れた雪辱を果たした。
- 高校は、この年より全国高校選手権を関東10校、関西10校のトーナメント制に変更、決勝戦をクリスマスボウルとした。その第41回クリスマスボウルは、早大学院と関学高の間で戦われ、息詰まる熱戦を早大学院が関学高を制し、24年ぶり2度目の栄冠を得た。
- この年から浅田豊久氏が日本協会理事長 (第17代) に就任、2017年まで務められた。

2010年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、高校113、大学218、社会人60の合計391チームであった。

東日本大震災発生、春季行事・試合の中止等発生。早大学院と大産大付高、28年ぶりの両校優勝

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月26日 ・ 3月11日 ・ 7月18日 ・ 8月24日 ・ 10月31日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ インターネット利用者 20 億人、携帯電話 50 億件を超えたと ITU 発表 ・ 東日本大震災 (M9.0)、福島原発事故、14 日 : 計画停電開始 ・ サッカー、なでしこジャパン、女子サッカーWC 優勝 ・ スポーツ基本法施行 ・ 1 \$ 75 円 31 銭のドル最安値を記録
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月、3月 ・ 2月26日 : ・ 春 ・ 6月18日 ・ 6月19日 ・ 7月 8日~16日 ・ 10月 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月8日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回 JAFFA フットボールコンベンション : 2月21日 (東日本)、3月7日 (西日本) ・ 第1回 IFAF アジア選手権、日本 - 韓国。日本代表勝利 (川崎球場) ・ 東日本大震災の発生により、春季試合の中止、延期が多く発生 ・ トモダチ 2011 ハーバーボウル、シルバースター - 在日米軍横須賀 (川崎球場) ・ 世界選手権 (ワールドカップ) 代表チーム壮行試合、対全法大・全日大連合 (川崎球場) ・ 第4回世界選手権、日本3位 (ウィーン) ・ 日本協会、第1期公認指導者 (前年受講) 誕生 ・ 第65回ライスボウル、オービック、関学を下し5回目の優勝 ・ 高校、関東・関西選抜戦第1回ニューイヤーボウル (川崎球場)
この年の活動 (競技年度)	<p>3月11日午後、東日本大震災が発生、春のシーズンを中心に競技活動は大きな影響を受けた。しかし、最も被害が大きかった東北地区ははじめ各組織の努力でこの1年のシーズンを無事終えた。</p> <p>過去最大の8か国が参加し7月8日からオーストリア・ウィーンで開催された第4回世界選手権 (ワールドカップ)、日本はグループリーグでカナダに 27-31 で惜敗、3位決定戦に臨み、メキシコ戦に 17-14 で勝利、アメリカ、カナダに続き3位となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東大学リーグは、秋のシーズンに「とどけようスポーツの力を東北へ！」のスローガンで開催、Aブロックは日大が鉄壁の守備で早大、明大を接戦で勝利、7戦全勝とした。Bブロックでは法大が、中大、慶大、神奈川大の接戦を制しやはり7戦全勝とした。 ● この年から東日本の甲子園ボウル出場校の決定方法を北海道 - 東北の勝者が関東の代表と対戦とする方式に変更、そのための関東代表を決める関東選手権を復活し「あずまボウル」とした。そのあずまボウル (第40回関東選手権) では日大と法大が対戦、シーソーゲームを日大が勝利、続く東日本代表戦で仙台大を破り甲子園ボウル出場を果たした。 ● 関西学生リーグは接戦の試合が続いたが、上位グループでは関学と立命館大がともに全勝で最終戦で対戦、関学が堅守で立命館大を 1TD で抑え 37-7 で快勝し4年ぶりの全勝優勝を遂げた。 ● この年、西日本選手権は、関西学生リーグから関学1校のみの出場とし、関学は、金沢大、西南学院大を下した中京大との決勝に勝利、4年ぶり46回目の甲子園ボウル出場を決めた。 ● 甲子園ボウルは、26回目の対戦となる関学と日大が対戦、関学が相手のミスからの攻撃、絶妙なパンチなどで終始押し気味に試合を展開、日大に TD を許さず快勝、4年ぶり24回目の優勝を遂げた。年間最優秀選手賞チャック・ミルズ杯は、初めてキッカー・パンターから関学・大西志宜選手が選ばれた。 ● 社会人は、ファイナルステージで、オービックが鹿島を攻守で圧倒、富士通はノジマ相模原を 1FG に抑え圧勝、両勝者によるジャパンエックスボウルでは、2年ぶり4度目の対戦をオービックが富士通を制し、史上5チーム目の社会人2連覇を果たした。 ● 第65回ライスボウルは、接戦となったがオービックが関学を下し5度目の日本一となった。 ● 第42回高校選手権クリスマスボウルは、早大学院と大産大付高の対戦となり、息詰まる接戦を展開、10-10で試合を終え、28年ぶり2回目の両校優勝となった。 <p>東日本大震災により、社会的な混乱が続き、競技活動に大きな制約があったシーズンを終えた。</p>	

高校、大学、社会人の各ボウルゲーム、接戦が続く

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月29日 ・ 3月12日 ・ 8月25日 ・ 10月 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京スカイツリー竣工 ・ 世界人口70億人突破 ・ ボイジャー1号、太陽圏を離脱 ・ 日本経済後退局面に。家電大手、軒並み業績悪化
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月18日 ・ 4月1日 ・ 5月19日 ・ 6月26日 ・ 6月30～7月7日 ・ 7月21日 ・ 8月14～21日 ・ 12月10日 ・ 秋・冬 ・ 翌年1月3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校第1回 TOMODACHI BOWL (在日米軍横須賀基地) ・ 第1回 JFA フラッグフットボール選手権 (川崎球場) ・ オービック、ドイツ遠征。インターナショナルチャレンジボウル開催 ・ 日本協会、日本オリンピック委員会 (JOC) に準加盟 ・ 第2回 U19 世界選手権、日本代表2大会連続3位 (米オースティン) ・ 中学生東西交流第1回 マリンボウル (大阪フラッシュフィールド) ・ 第6回 IFAF フラッグフットボール世界選手権 (スウェーデン・イエテボリ市) ・ 国際アメリカンフットボール連盟、IOCの暫定承認団体に ・ 甲子園、ジャパンエックス、ライスの3選手権ボウルが、全てNHK-BSの生中継に ・ 第66回ライスボウル、オービック、関学を下し6回目の優勝
この年の活動 (競技年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● U19によるIFAF第2回ジュニア世界選手権が米国オースティンで8か国参加して開催され、日本代表は2大会連続の3位となった。また国際連盟上席副会長に金氏真氏が就任した。 ● 関東大学リーグは、第1週の日大-神奈川大が試合中の雷雨により中断、翌週、その継続の試合を行った。それぞれのブロックを全勝で終えた日大と法大が第2回あずまボウルで対戦、試合は接戦となり7点差から残り10秒で日大がTD、同点を狙ったTFPのキックが外れ、23-22で法大が勝利した。東日本代表決定戦では、法大が東北大を下し、3年ぶり17回目の甲子園ボウル出場を決めた。 ● 関西学生リーグでは、前年に続き、関学与立命館大が最終戦で全勝対決、関学が獲得ヤードでは立命館大を下回りながらも27-0の零封で勝利、続く甲子園ボウル出場を決める西日本代表決定戦で名城大戦に勝利し、2年連続47回目の出場を決めた。なおこの年、北陸リーグでは、金沢大が19年連続となるリーグ優勝を遂げた。 ● 第67回甲子園ボウルは関学-法大のカードとなり接戦を展開、関学は第4Q、逆転されたが残り4分42秒で同点に追いつき、更に関学が残り2秒FGを決め20-17で劇的な勝利を挙げ、25回目優勝、1984、85年以来の連覇を遂げた。 ● 社会人はオービックが、鹿島との接戦を27-24で制し7度目の優勝、オービックの公式戦連勝記録も35となった。この勝利でオービックは社会人として単独最多となる7度目のライスボウル出場を果たした。 ● ライスボウルは、27,371人の観客を集め開催、終始リードしたオービックに対し関学が4Q残り3分で1点差になるTD、次のトライの2点コンバージョンが成功し関学15-14オービックと逆転した。しかしオービックは残り10秒で再逆転となるTDでオービック21-15関学与勝利、1989～91年の日大と並ぶライスボウル3連覇を遂げた。 ● 第43回クリスマスボウルは4,000名の観客を集め神戸王子スタジアムで開催、早大学院が4Qの関学高の反撃を抑え28-17で下し、前年の両校優勝を含み3連覇を果たした。早大学院はこれで対関学高3戦1敗とした。 ● 12月10日、日本協会が加盟する国際アメリカンフットボール連盟 (IFAF) が、国際オリンピック委員会 (IOC) の暫定承認団体となった。 ● 2003年に創設された関西中学アメリカンフットボール選手権はこの年10回目の開催となり、15中学によるトーナメントの決勝で高槻中学が啓明学院中を破り3年連続3回目の優勝を遂げた。 <p>甲子園、ジャパンエックス、ライス、クリスマス全選手権ボウルが接戦となったシーズンだった。</p>	

競技活動 80 年目。オービック、日本一 4 連覇。中学生選手権始まる

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7月25日 ・ 9月 7日 ・ 11月16日 ・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国連、シリア内戦死者拡大を発表 ・ 2020年東京オリンピック開催決定 ・ 世界アンチ・ドーピング機関、新ルールを発表。罰則を強化 ・ イスラム過激派 (IS)、台頭
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 3日 ・ 6月29、7月6日 ・ 7月 7日 ・ 秋 ・ 9月 7日 ・ 10月 1日 ・ 11月 1日 ・ 12月10日: ・ 翌年1月1日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月12日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東西大学 OB によるチャリティフラグフットボール、第1回ハドルボウル (川崎球場) ・ 第1回日本協会フットボールアカデミー、西日本、東日本で開催 ・ 東西大学 OB によるチャリティフラグフットボール、ニューエラ・ハドルボウル ・ Xリーグ、総合順位制度を導入しセカンドステージをリニューアル ・ 日本協会「競技および練習中の脳震盪の扱いについて」通知 ・ Xリーグ公式戦、東北地区復興支援として初の東北開催 ・ 日本中学生アメリカンフットボール協会設立 ・ IFAF、オリンピックファミリーに決定 (2015年よりIOCメンバーとして承認) ・ 日本シニアフットボール協会設立、12日シニアボウル開催: 関東-関西 (川崎球場) ・ 第67回ライスボウル、オービック、関学を下し7回目の優勝 ・ 第1回日本中学生アメリカンフットボール選手権 (川崎球場)
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>競技活動 80 年目を迎えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東大学リーグは、東京国体でこれまで主会場のアミノバイタル・フィールドが使用できず、大井第二、川崎球場、駒沢第二の各会場を使用した。1部リーグが翌年から TOP8 と BIG8 の各 8 校となるため、この年は優勝争いとともに翌年のリーグ所属をかけた試合が続いた。この制度変更により 1970 年から続いた関東大学選手権はこの年最後の第 43 回として横浜スタジアムで開催、5 年連続の日大-法大の対戦を日大が制し、日大は続く東日本代表決定戦で東北大も大差で破り甲子園出場を果たした。 ● 関西学生リーグは、最終戦でそれまで全勝の関学と京大戦で敗れ 1 敗の立命館大が対戦、互いの守備陣が奮闘し最後まで分からない展開となり、あまり例のない 0-0 の同点で試合終了、無敗の関学が 4 年連続優勝 (うち 1 回は同率優勝) した。関学はその後の西日本代表決定戦で、連続出場の名城大を破り甲子園ボウル出場を決めた。北陸リーグでは、福井県立大が優勝、金沢大のリーグ 20 連勝を阻んだ。 ● 第 68 回甲子園ボウルは、32,000 名の観客の下で開催、堅守の関学が 23 年ぶりの甲子園制覇を目指す日大のパス攻撃を封じ 23-9 で下し、3 年連続 26 回目の優勝を果たした。これで甲子園ボウルの関西の連覇は 7 年連続となった。 ● 社会人の Xリーグ、ベスト 4 の対戦となるファイナルステージは、オービックが鹿島をターンオーバーの多い試合を制し、一方の試合は富士通が逆転でパナソニックに快勝。ライスボウル出場をかけた第 27 回社会人選手権ジャパンエックスボウルは、前半リードされた富士通が追い上げたが及ばず、オービックが 4 連覇を達成し、大会最多優勝記録を 8 とした。 ● 第 67 回ライスボウルは、オービックと関学の史上初の 3 年連続となる対戦となり、社会人王者のオービックがパス警戒の裏をかくラン攻撃で、関学を 21-13 の接戦で制し初の 4 連覇を達成した。 ● 第 44 回クリスマスボウルは早大学院が立命館宇治高を下し、関東勢初の 4 連覇を遂げた (1 回の両校優勝を含む)。 ● 4 月、参加 9 チームでタイで開催された第 2 回アジアフラグフットボールクラブ選手権で、日本代表のリバーサイドギャングラズ市川が初優勝を遂げた。 ● 11 月、中学生の活動組織、日本中学生アメリカンフットボール協会が関東地区 10 チーム、関西地区 20 チームで設立された。以降、冬の中学生選手権、春のマリンボウルを開催。第 1 回中学生選手権は、2014 年 1 月 12 日川崎球場で開催され、池田ワイルドボアーズが 13-6 で世田谷ブルーサンダースを破り、第 1 回チャンピオンとなった。 	

関東大学リーグ、TOP8 と BIG8 に。第 1 回大学世界選手権で日本が 2 位

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月 7日 ・ 4月 1日 ・ 5月 31日 ・ 8月 8日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ あべのハルカス、オープン ・ 消費税、5%から 8%へ ・ 国立競技場が建替えのため閉場 ・ WHO、エボラ出血熱に緊急事態を宣言
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 3日 ・ 4月 12日 ・ 4月 26日 ・ 5月 1日～11日 ・ 7月 7日～16日 ・ 秋 ・ 12月 15日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本協会、公益社団法人化、「公益社団法人 日本アメリカンフットボール協会」に ・ 川崎球場メインスタンド竣工記念、日本代表－ドイツ代表戦、日本勝利 ・ 第 5 回世界選手権アジア地区予選、日本代表－フィリピン代表、日本勝利 ・ 第 1 回世界大学アメリカンフットボール選手権大会、日本代表準優勝（スウェーデン） ・ 第 3 回 U19 世界選手権、日本代表 5 位（クウェート） ・ 関東大学リーグ、1 部リーグを TOP8、BIG8 の 2 ブロック制に ・ 第 28 回日本社会人選手権、富士通、IBM を下し初優勝（東京ドーム） ・ 第 68 回ライスボウル、富士通、関学を下し初優勝
この年の活動 (競技年度)	<p>この年 2 月、日本協会がこれまでの「社団法人」から「公益社団法人」となった。公益社団法人化により、浅田豊久理事長が会長（第 5 代）になられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 近年、フットボールの国際化が進んできたが、この年も更に国際試合が行われた。4 月に日本代表は川崎球場でドイツ代表とジャーマン・ジャパン・ボウルⅡを、また第 5 回世界選手権アジア地区予選としてアミノバイタルでタイ代表と対戦、いずれも日本代表が勝利した。5 月スウェーデン・ウプサラ市で開催された第 1 回 FISU（国際大学スポーツ連盟）大学世界選手権で、日本代表はフィンランド、中国、スウェーデンに完封勝利し、決勝でメキシコと対戦したが惜敗し準優勝。7 月、U19 第 3 回ジュニア世界選手権が参加 8 か国でクウェートで開催され、日本代表は 5 位。イタリア・トスカナ州での第 7 回 IFAF フラッグフットボール世界選手権には男女の日本チームが参加し健闘、またタイでビーチフラッグフットボールも開催され日本チームは 3 位の銅メダル、と国際色豊かな年だった。 ● 関東大学リーグは、この年の秋から、1 部リーグを従来の並列 2 ブロック制から上位 8 校による TOP8、下位 8 校による BIG8 の編成とした。その関東大学リーグの TOP8 は日大が全勝優勝し、東日本代表決定戦で 3 年連続出場の東北大を下し、甲子園ボウル東日本代表となった。 ● 関西学生リーグは、全勝対決で立命館大を下した関学が優勝、立命館大は 4 年連続の 2 位、京大は 53 年ぶりの 1 勝で 7 位となり入替戦に出場した。関学は、西日本代表決定戦で名城大を下し、甲子園ボウル西日本代表となった。 ● 第 69 回甲子園ボウルは 2 年連続 28 回目の対戦となった関学－日大戦に 28,000 名の観客を集め開催、関学がスピードとパワーを兼ね揃えたラン攻撃で得点を重ね 55-10 で快勝、4 連覇 27 回目の優勝を果たした。関学は甲子園ボウル対日大戦、10 勝 16 敗 2 分とした。 ● 社会人はファイナルステージで、前年 4 連覇を遂げたオービックを富士通が下し、IBM が大量得点で鹿島を下した。第 28 回ジャパンエックスボウルの富士通－IBM は両チームともにイースト所属でファーストステージの再戦となり、ともに米国出身の QB が対戦、富士通が IBM を攻守に圧倒、ファーストステージの対戦と同様に勝利、Xリーグ初制覇とともに悲願のライスボウル初出場を遂げた。 ● 第 68 回ライスボウルは初出場の富士通と 4 年連続 10 回出場の関学が対戦、富士通が第 3Q、1 点差ながらも逆転されたが再度逆転、関学を破り、創部 30 年目を初の日本一で飾った。以降、活躍する富士通の始まりの年だった。同日、東京ドームで開催されたさくらボウル（タッチフットボール女子全日本王座決定戦）は 20 回を迎え、神戸大が関西アウィリーズを破り 5 回目の優勝を果たした。 ● 高校はキンチョウスタジアムで開催され関学高が早大学院を破り、10 年ぶり 17 度目の栄冠を得た。 	

熱戦続き、選手権試合がすべて接戦。第5回世界選手権、日本準優勝

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7月 1日 ・ 10月 1日 ・ 11月 13日 ・ 12月 12日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米国とキューバ、54年ぶりの国交回復に正式合意 ・ スポーツ庁発足 ・ パリ同時多発テロ事件 ・ 第21回気候変動枠組条約締約国会議でパリ協定 2015年を採択
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月、3月 ・ 3月 21日 ・ 4月 5日 ・ 4月 25～26日 ・ 6月 14日 ・ 7月 8～19日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本協会フットボールアカデミー「Heads Up Football 体験会」開催：2月 28日（西日本地区）、3月 1日（東日本地区） ・ レガシーボウル、関学－プリンストン大（キンチョウスタジアム） ・ 富士通スタジアム川崎竣工記念、フットボールフェスタ ・ FAF 第1回フラッグフットボールアジア選手権（ハノイ） ・ 世界選手権代表チーム壮行試合、対全慶応・全Xリーグ連合（富士通スタジアム川崎） ・ 第5回世界選手権（ワールドカップ）、日本準優勝（米・キャントン） ・ 第69回ライスボウル、パナソニック、立命館大を下し3回目の優勝
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>第5回世界選手権（ワールドカップ）、7月に7か国が参加しアメリカ・カントンで開催。最初のグループ分けで日本は、アメリカ、カナダ、メキシコの上位グループに入り、準決勝で日本はメキシコに快勝し、決勝でアメリカと対戦、12-59で敗れ準優勝、2大会ぶりの銀メダルとなった。</p> <p>数年前から公式規則で頭部・ヘルメットを使用した相手プレーヤーに対する打撃やターゲットイングが厳しく禁止されてきたが、この年、日本協会ではより徹底するために、西日本、東日本で講習会「Heads Up Football 体験会」を開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 川崎球場の改修工事が竣工し、「富士通スタジアム川崎」として使用開始となった。 ● 関東大学リーグは、前年度4位の早大が慶大に大差で敗れたが日大戦で完勝。早大、日大がともに1敗となったが当学校対戦の結果で早大が東日本代表決定戦に出場。その東日本代表決定戦では早大が20-10の接戦で東北大を下し5年ぶりの代表となる。 ● 関西学生リーグは2年連続全勝対決の立命館大と関学の対戦、接戦となったが、終始リードを続けた立命館大が30-27で試合を制し優勝。以下、2位関学、3位関大、前年入替戦に出場した京大は復調しリーグ戦4勝で4位となった。立命館大は西日本代表決定戦で決定戦初出場の西南学院大を破り、5年ぶりの甲子園ボウル出場を決めた。 ● 第70回甲子園ボウルは3度目の立命館大－早大の対戦となったが、試合終了間際の逆転を狙う早大の52ヤードのFGのトライが外れ、立命館大が28-27の大接戦を制し、8度目の優勝、早大悲願の初優勝を阻んだ。1点差の試合は、第13回大会（1958年）以来であった（同点両校優勝は4回）。 ● Xリーグは、ファーストステージで番狂わせの試合が続いたが、ジャパンエックスボウルは、3年連続7回目の出場で2連覇が有力視されていた富士通をパナソニックが三転の試合を制し、7年ぶり7度目のライスボウル出場を決めた。 ● 第60回ライスボウルは関西勢同士の立命館大とパナソニックの対戦、第4Q残り4分で逆転されたパナソニックが残り1分31秒で再逆転、22-19の接戦を制し8年ぶり4度目の優勝を遂げた。 ● 第46回クリスマスボウルは横浜スタジアムで開催、前年と同じ対戦となったが、関学高が接戦で早大学院を下し優勝した。 <p>2015年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、高校111、大学211、社会人53の合計375チームであった。</p>	

甲子園ボウル、関西勢 10 連覇。佼成学園高、初の高校日本一

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 2日 ・ 4月 16日 ・ 5月 26-27日 ・ 5月 27日: ・ 6月 23日: ・ 11月 4日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 岸記念体育館新築移転計画発表 ・ 熊本地震 (M7.3) ・ 主要国首脳会議、伊勢志摩で開催 ・ オバマ米大統領、原爆投下の広島市訪問 ・ イギリス国民投票、EU 離脱賛成過半数 ・ 世界的気候変動に関するパリ協定発効
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 3日 ・ 6月 1~11日 ・ 6月 25日 ・ 6月 27日~ ・ 10月 ・ 秋 ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 16日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 加納克亮氏ら 11 名、日本アメリカンフットボールの殿堂入り (第 3 回殿堂顕彰) ・ 第 2 回大学世界選手権、日本代表 3 位 (メキシコ・モンテレー) ・ 関学、メキシコ遠征、対メキシコ国立自治大戦 (メキシコ・メキシコシティ) ・ IFAF 第 4 回 U19 世界選手権、日本代表 4 位 (中国・ハルピン) ・ アメリカンフットボール専門誌「TOUCHDOWN」休刊 ・ Xリーグ改編: 2 ステージ制 JXB トーナメント方式に移行 ・ 第 70 回ライスボウル、富士通、関学を下し 2 回目の優勝 ・ 第 8 回インターナショナルボウル、U-18 日本代表-U-17 米代表。米代表勝利
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 2016 年 1 月 3 日のライスボウルの中で、戦前戦後を通じ報道・協会活動で貢献された加納克亮氏ら 11 名の第 3 回目の殿堂顕彰表彰が行われ、これで殿堂顕彰者はポール・ラッシュ博士はじめ 25 名となった。 ● 6 月メキシコ・モンテレー市で開催された第 2 回 FISU (国際大学スポーツ連盟) 大学世界選手権は、日本、アメリカ、メキシコ、グアテマラ、中国の 5 か国が参加して開催、日本代表は、メキシコ (優勝)、米国に敗戦、3 位となった。また第 4 回 IFAF (国際アメリカンフットボール連盟) U19 世界選手権は、中国ハルピンで 7 か国の参加で開催、日本はオーストラリアに快勝したが、アメリカ、カナダに敗れ 4 位となった。この年、米国マイアミで開催された IFAF フラッグフットボール選手権への参加もあり、国際色豊かな年であった。 ● 関東大学リーグは早大、法大、慶大が、それぞれ 1 敗の三つ巴となったが得失点差で早大が順列 1 位となり、甲子園ボウル出場を駆け準決勝で北大を下した東北大と対戦、勝利した。 ● 関西学生リーグは、立命館大を攻守で圧倒した関学が優勝。西日本代表決定戦は、この年から関西学生リーグ代表が 2 校出場することとなり、その決定戦で関学は、拮抗した試合展開となったが再び立命館大を退け優勝、甲子園ボウル出場を決めた。 ● 第 71 回甲子園ボウルは、最多 50 回出場の関学が早大を終始リード、28 回目の優勝を遂げた。この結果、甲子園ボウルは、関西勢 10 連覇となった。 ● 発足 21 年目を迎えた Xリーグは、この年から NFA 方式リーグ戦を採用。第 31 回社会人選手権ジャパンエックスボウルは、過去最多の 25,455 人の観客の下で、4 年連続出場の富士通が攻守でオービックを圧倒し 2 度目の優勝を遂げた。 ● 第 70 回ライスボウルは 33,521 名の観客が見守る中、この年から 4 年連続出場となる富士通が 30 ヤードを越える TD パスを 3 回決め関学を下し、2 年ぶり 2 回目の優勝を果たした。 ● 高校第 47 回クリスマスボウルは、佼成学園高が関学高を下し初優勝を遂げた。 ● 1970 年に創刊され 1976 年より月刊誌となり、フットボールの発展に貢献した専門誌「TOUCHDOWN」(編集・発行人: 後藤完夫氏) が、この年 10 月号 (通巻 568 号) で休刊となった。日本の戦後のフットボール興隆期から世界へ活動を広げた時期に多方面、多分野に渡り幅広く後世に残る紙媒体で報道した同誌の役割は大きかった。 ● これまで米国-カナダを主体とした世界選抜チームとの間で実施されてきた USA フットボール主催のインターナショナルボウルが、米国、世界選抜、日本の 3 チームによる大会となり、2017 年 1 月米国アーリントンで第 8 回大会が開催された。日本から高校生選抜の U-18 日本代表が初参加、U-17 米代表と対戦。後半奮闘したが、7-44 で敗れた。 	

日大 27 年ぶりの大学日本一。甲子園ボウル、関西 11 連覇を阻む

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月29日 ・ 9月9日 ・ 11月30日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英国、EU 離脱通知 ・ 男子 100m 走で桐生祥秀氏、日本初の 9 秒台、9 秒 98 を記録 ・ ニューヨーク・ダウ平均株価、24,000 ドル突破
フットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月19日 ・ 3月5日 ・ 5月27~28日 ・ 6月4日 ・ 7月2日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月17日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 20 回アメリカンフットボール医・科学研究会開催 (兵庫医科大) ・ 日本協会特別講習会「安全なフットボールの最新指導」(会場:大産大付高) ・ 第 2 回 IFAF ASIA フラッグフットボール選手権。日本代表優勝 (マニラ) ・ 早大-米イリノイ・ウェズリアン大。イリノイ・ウェズリアン大勝利 (アミノバイタル) ・ 第 15 回ニューエラボウル。この回で平成ボウルから数え 27 回で休止 (王子スタジアム) ・ 第 71 回ライスボウル、富士通、日大を下し 3 回目の優勝 ・ 第 9 回インターナショナルボウル、日本高校選抜-米 U17 選抜、日本高校選抜勝利
この年の活動 (競技年度)	<p>この年、日本協会会長に国吉誠氏が第 6 代会長として就任された。 1997 年 5 月 17 日に第 1 回を開催したアメリカンフットボール医・科学研究会が、その後も継続的に活動をつづけ、2 月 19 日に節目の第 20 回研究会を兵庫医科大学で開催した。研究会は、併せて「ドクターとトレーナーの集い」も開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東大学リーグ戦 TOP8 は日大、早大が両校全勝で 5 戦目に対戦、若手の伸長が目立つ日大が 2TD を挙げ早大を 1FG に抑え勝利。日大は最終戦で法大に敗れ、日大、早大がともに 1 敗並んだが、直接対決の結果で日大が順列 1 位となった。日大は東日本代表決定戦で 5 年連続出場の東北大に勝利、3 年ぶりの甲子園ボウル出場となった。 ● 関西学生リーグは全勝対決の立命館大が関学を 21-7 で破り 2 年ぶり 11 回目の優勝。続く両チームが出場した西日本代表決定戦では決勝で対戦、関学が立命館大に 34-3 で快勝、リーグ戦の敗戦の無念を晴らし甲子園ボウル出場を果たした。関西大学リーグ戦 2 位からの甲子園ボウル出場は初めてであった。 ● 第 72 回甲子園ボウルは恒例の 12 月第 3 日曜、36,000 名の観客を集めて開催、日大-関学の 29 度目の対戦となった。関学有利の予想通り、関学が試合開始 3 プレー目で TD、先制したが、日大は前半逆転、その後もリードを広げたが、関学が猛追。しかし残り 1 分 42 秒からのパスが日大にインターセプトされ試合終了、日大が接戦で関学に勝利し、関西勢 11 連覇を阻むとともに 27 年ぶり 21 回目の大学日本一となった。 ● 2 年目の NFA 方式リーグ戦の社会人は、セミファイナルの 2 試合は、IBM がアウェーでパナソニックに逆転勝ち、富士通がオービックに辛勝した。続くジャパンエックスボウル第 32 回社会人選手権では、関東勢同士の戦いで 3 年ぶりとなった富士通-IBM の対戦を、富士通が 63 点の大会記録となる最多得点で IBM を下し 2 年連続 3 回目の優勝となった。 ● 第 71 回ライスボウルは、近年では最高の 35,002 人の観客となり、試合開始後は互いに互角の展開となったが、富士通が先制 TD を挙げた後は主導権を握り、日大を 37-9 で破り 2 連覇、3 度目の日本一となった。37 年ぶりに出場した日大は、ライスボウル 5 戦目で初黒星となった。またこの試合でライスボウルでは初めてインスタントリプレー (ビデオによるプレーの検証) が採用された。 ● 第 48 回クリスマスボウルは、初めて富士通スタジアム川崎で開催、出場 2 度目の佼成学園高が関大一高を下し 2 連覇を達成した。 ● 翌 2018 年 1 月、米国アーリントンで開催されたインターナショナルボウルで、日本の高校選抜が、米国 U-17 選抜に 21-6 で快勝した。 	

春にタックル問題が発生。各組織活動指針の見直し、確認がされ、クリーンな競技活動の宣言

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 1日 ・ 6月12日 ・ 6月28日 ・ 6月 ・ 9月 8日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本体育協会が日本スポーツ協会へ ・ 米国、北朝鮮が史上初の首脳会談 ・ 平成30年7月豪雨(西日本豪雨) ・ 国民体育大会を「国民スポーツ大会」に2023年より改称決定 ・ 大坂なおみ氏、テニス全米オープンで初優勝
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 3日 ・ 3月 ・ 5月 6日 ・ 5月14日 ・ 6月14日～24日 ・ 7月14日～22日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月18日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 藤本武氏ら10名、日本アメリカンフットボールの殿堂入り(第4回殿堂顕彰) ・ 日本協会特別講習会「安全なフットボールの最新指導について」(仙台、大阪、東京) ・ 日大-関学定期戦で危険なタックルプレー発生 ・ 日本協会「危険プレーの防止の徹底」発表、26日「フェアプレイ宣言」発出 ・ FISU第3回アメリカンフットボール大学選手権、日本3位(中国・ハルビン) ・ IFAF第5回U19世界選手権大会、日本代表5位(メキシコシティ) ・ 第72回ライスボウル、富士通、関学を下し4回目の優勝 ・ 第10回インターナショナルボウル、日本高校選抜-米U17選抜、日本高校選抜惜敗
こ の 年 の 活 動 (競 技 年 度)	<p>2018年度の競技開始間もない5月、日大-関学の定期戦で日大選手によるタックル問題が起き、フットボール界はもとより社会的にも大きな問題となった。日大は秋のシーズン、出場資格停止となり、また日本協会ははじめ各連盟、チーム等により、クリーンな競技活動実施の宣言等が出され、スポーツ競技としてのフットボール活動の目的、意義等の確認が広く行われた。</p> <p>日本協会は、選手の試合、練習時の安全対策向上の一環として、特別講習会「安全なフットボールの最新指導について(ヘッドアップタックリング・ブロッキング)」を3月18日(仙台)、24日(大阪)、25日(東京)で開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 2018年1月3日のライスボウルの場で、過去、主としてプレーヤーとして活躍された方々を対象にした第4回目の殿堂顕彰表彰が行われ、戦後の復興期に活躍された藤本武氏ら10名とチャック・ミルズ氏が殿堂顕彰された。これで殿堂顕彰者はポール・ラッシュ博士はじめ36名となった。 ● 6月、中国ハルビン市で開催された第3回FISUアメリカンフットボール大学選手権は5か国で開催され、日本代表は中国、韓国に勝利、メキシコ(優勝)、米国(2位)に敗れ3位となった。 ● 関東大学リーグは7校によるTOP8で接戦となった法大戦に勝利した早大が優勝、東日本代表決定戦では6年連続決勝戦出場の東北大を下した。 ● 関西学生リーグは、関大と引分けたがリーグ戦唯一無敗の関学が2年ぶり56回の優勝を遂げた。西日本代表決定戦は関西から関学、立命館大の2校が参加、サヨナラFGで関学が立命館大を破った。 ● 第73回甲子園ボウルは、関学-早大との対戦となり、立ち上がり両チームが得点、その後、攻守に安定した関学が早大を突き放し37-20で勝利、29度目の大学制覇を遂げた。 ● 社会人は、セミファイナルが前年と同一の対戦となり、富士通が接戦でオービックを、IBMがこれも接戦でパナソニックを破り前年と同一の結果となった。第32回社会人選手権ジャパンエックスボウルは、富士通が圧勝、3連覇を遂げた。 ● 第72回ライスボウルは、学生、社会人を通して最多となる12回出場に関学が富士通に挑んだが、第2Qまで食い下がる関学を、後半富士通が突き放し快勝、3連覇を果たした。 ● 第49回クリスマスボウルは、佼成学園高が3回目のクリスマスボウル出場の立命館宇治高を接戦で破り3連覇を遂げた。 ● 翌2019年1月、米国アーリントンで第10回インターナショナルボウルが開催、高校選抜U18日本代表は、U17米国代表と対戦、残り3分で米国の逆転を許し24-28で惜敗、前年に続く連勝を逸した。 	

ライスボウル、富士通 4 連覇。高校選手権、半世紀の活動の 50 回大会開催

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月 1日 ・ 4月 15日 ・ 4月 30日 ・ 7月 18日 ・ 9月 20日 ・ 10月 1日 ・ 12月 21日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新元号「令和」発表、5月1日：「令和」に改元 ・ ノートルダム大聖堂で大規模火災、10月31日：世界遺産・首里城火災 ・ JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE（岸記念体育館の後継）竣工 ・ 京都アニメーション放火殺人事件 ・ 第9回ラグビーW杯日本大会開幕 ・ 消費税、8%から10%へ ・ 新国立競技場開場式
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月～3月 ・ 7月 22日 ・ 秋 ・ 翌年 1月 3日 ・ 翌年 1月 15日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本協会特別講習会「安全なフットボールの最新指導について」（仙台、福岡、東京） ・ 日本協会、日本社会人協会、事務所を東京都新宿区に移転 ・ Xリーグ改編、X1Super、8チーム総当たり制に移行 ・ 第73回ライスボウル、富士通、関学を下し5回目の優勝 ・ 第11回インターナショナルボウル、U18日本高校選抜-U17米選抜。日本高校選抜、全米代表に初勝利（米・テキサス）
この年の活動 (競技年度)	<p>日本協会は、前年に続き、選手の試合、練習時の安全対策向上の一環として、特別講習会「安全なフットボールの最新指導について」を1月13日（仙台）、2月17日（福岡）、3月23日（東京）に開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●当初この年にオーストラリアで開催予定の第6回 IFAF アメリカンフットボール世界選手権（ワールドカップ）は、2023年に同地での開催に延期された。 ●関東大学リーグは早大が法大戦で2TD差を逆転し最終戦を待たず優勝を決め、最終戦でも明大を下し全勝で終えた。横浜スタジアムで開催された東日本代表決定戦では、早大が東北学生リーグ8連覇の東北大と対戦、後半突き放し2年連続6回目の甲子園ボウル出場を決めた。 ●関西学生リーグは立命館大が関大に、関学は立命館大に敗れともに1敗で並び両校優勝。西日本代表決定のトーナメント戦では、この両校に加えてリーグ戦3位の神戸大の3校が出場した。その決勝では関学が立命館大と対戦、関学は第1Q、ロングランで2つのTDを挙げ、そのまま逃げ切り甲子園ボウル出場を決めた。2016年からの関西学生リーグから2校以上が西日本トーナメントに出場する制度になってから4季目、関学はこの年も立命館大を下し西日本代表決定戦对立命館大戦4連勝とした。 ●第74回甲子園ボウルは、前年に続き関学与早大の対戦となり接戦を展開、第3Q終了時には、早大が28-27で1点差のリードをしたが、第4Qに関学が逆転、関学38-28早大で試合終了、関学が30回目の優勝を遂げた。6回目の出場の早大の甲子園ボウル初優勝悲願は叶わなかった。 ●社会人は、この年、X1スーパーの1ディビジョン制となり開催、リーグ戦上位4チームによるトーナメントを実施。リーグ戦では西日本のエレコムが躍進、セミファイナルに進んだが、富士通には13-31で敗戦。もう一方のセミファイナルでは、パナソニックが接戦の末オービックを24-14で下した。第33回日本社会人選手権ジャパンエックスボウルはパナソニックと富士通が対戦、最後まで競った試合を富士通が28-26の僅差で勝利、4年連続優勝を遂げた。 ●富士通は、続く第73回ライスボウルで関学を下し、2011年開催の第64回からのオービックの4連覇と並ぶライスボウル4年連続優勝、またライスボウル無敗記録を5試合とした。この日、さくらボウル（第25回）、関東中学校アメリカンフットボールオールスター戦も、例年通り同時に開催された。 ●記念となる50回目を迎えた高校選手権クリスマスボウルは、立命館宇治高が佼成学園高を下し、創部25年目、4度目のクリスマスボウル出場で初めての栄冠をつかんだ。 ●翌2020年1月、米国アーリントンで開催の第9回インターナショナルボウルでU-18高校選抜がU-17全米代表に21-6と快勝した。全米代表への勝利は初めてであった。 	

新型コロナウイルス対応の下での活動。学生－社会人最後のライスボウル、社会人が 12 連勝

社会

・ 1月28日
・ 1月31日
・ 3月24日
・ 4月7日
・ 8月4日
・ 12月6日

・ 新型コロナウイルス、国内初の感染者。3月11日：世界保健機関、パンデミック宣言
・ イギリス、47年間加盟のEU離脱
・ 2020東京オリンピック開催延期決定
・ 新型コロナウイルスにより7都府県に(第1次)緊急事態宣言。以降、断続的に宣言等
・ レバノン ベイルート港爆発事故
・ 小惑星探査機はやぶさ2、地球へ帰還

フットボール

・ 1月3日
・ 3月1日
・ 3月19日
・ 春～
・ 6月12日
・ 8月31日
・ 翌年1月3日

・ 新型コロナウイルス流行、競技活動に制約(1年目)
・ 中澤貞夫氏ら12名、日本アメリカンフットボールの殿堂入り(第5回殿堂顕彰)
・ 日本代表－米プロ予備軍 TSL 選抜戦。日本代表敗れる(米・ダラス)
・ 日本協会「新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた対策について」公表
・ 新型コロナウイルスが感染拡大、国内外の活動中止、延期、試合形式の変更等が行われる
・ 日本協会「新型コロナウイルス感染症対策としての活動再開のガイドライン」公表
・ 日本協会、新型コロナウイルス感染に関する「大会開催に向けたガイドライン」公表
・ 第74回ライスボウル、最後の学生－社会人の日本選手権、オービック優勝

この年の活動 (競技年度)

この年の2月頃から日本国内でも発生した新型コロナウイルスにより、2020年度1年間の活動がこれまでにない影響を受けた。春のシーズンは、殆どの試合が中止、その後も社会動向、政府/学校/企業方針による社会的活動の制限・自粛により試合開催をはじめ、新入部員獲得、練習等に大きな制約を全チームが受けた。この年で収束すると思われた新型コロナウイルスの影響は、翌年以降も続くこととなり、競技活動への長期にわたる制約の1年目だった。

- 2020年1月3日ライスボウルの場で、立教大の選手・監督で活躍された中澤貞夫氏ら12名の第5回目となる殿堂顕彰表彰が行われ、これで殿堂顕彰者はポール・ラッシュ博士はじめ48名となった。
- 日本代表が北米プロ予備軍 TSL (The Spring League) 選抜と米テキサス州プリスコで親善試合を開催。日本は先制したが16-36で敗れた。この試合は2019年開催予定の世界選手権が延期されたため日本代表のじっせん実戦力維持も目的として開催された。この試合以降、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大で、海外交流はしばらく中止となった。
- 秋のシーズンは、練習、試合において手指消毒、密状態回避等のコロナ対策をしながら、リーグの分割等による試合数の削減、無観客試合等、これまでにない競技運営であった。
- 秋のリーグ戦は、新型コロナウイルス対策として、関東大学リーグはTOP8を2分割したリーグ戦を開催、各ブックを制した日大と躍進著しい桜美林大の1位決定戦を日大が制した。関西学生リーグは、1部校のトーナメントとして開催し、決勝では関学が立命館大との接戦を制して優勝した。
- 新型コロナウイルスの影響により、全国の大学が参加する全日本大学選手権を変更し、2008年までの方式の東西大学王座決定戦として開催された第75回甲子園ボウルは、後半、関学が日大を引き離し、3年ぶりの対戦を制した。
- 社会人の第34回社会人日本選手権ジャパンエクスボウルは、富士通の同点を狙う最後のプレーをオービックが防ぎ、オービックが7年ぶりの優勝を果たすとともに富士通の5連覇を阻んだ。
- 第74回ライスボウルは、社会人代表のオービックが関学を下し、7年ぶり、史上最多の8度目の優勝を遂げ、これにより社会人が12連勝を遂げた。1984年から38年続いた学生－社会人の全日本選手権の対決は、この年が最後となり、社会人26勝、学生12勝となった。
- 4年ぶり2回目の対戦となった第51回クリスマスボウルでは、同点のからの試合最後のプレーで佼成学園高のヘイル・メリーパスを両チームがキャッチ。公式規則により攻撃側の佼成学園のキャッチが認められ関学高を下し、2年ぶり4回目の優勝となった。

この年、日本アメリカンフットボール協会加盟チームは、小学生等18、中学生等29、高校105、大学198、社会人55、その他(プライベート、フラッグ、女子等)24の合計429チームであった。新型コロナウイルス禍の下での日本フットボール87年目のシーズンは、多くの制約、制限があったが各方面・関係者の努力で終了した。

新型コロナウイルス治まらず、対応 2 年目の活動。ライスボウルが社会人選手権に

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月 6日 ・ 2月 17日 ・ 7月 23日 ・ 8月 ・ 11月初旬 ・ 11月 13日 ・ 11月 18日 ・ 12月～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米大統領選トランプ候補支持者、米合衆国議事堂襲撃事件 ・ 新型コロナワクチン、国内で接種開始。夏：重症化しやすいデルタ株、国内第 5 波の感染 ・ 東京オリンピック開幕（原則無観客）。8月 24日：東京パラリンピック開幕（無観客） ・ アフガニスタン駐留米軍、完全撤収 ・ 新型コロナウイルス、世界の死者 500 万人超 ・ 将棋・藤井聡太氏、竜王を獲得し最年少 4 冠達成 ・ 米 MLB、大谷翔平選手、投打の二刀流で満票の MVP 選出 ・ 新型コロナウイルス、感染力の強いオミクロン株、国内で市中感染
フ ツ ト ボ ー ル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月 3日 ・ 1月 30日 ・ 8月 23日 ・ 秋 ・ 12月 6-8日 ・ 翌年 1月 3日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新型コロナウイルス流行、競技活動に制約（2 年目） ・ 日本協会、「2021 年度コロナ禍におけるアメリカンフットボール活動について」発表 ・ 日本協会、ライスボウル対戦を社会人の優勝決定戦に決定 ・ 日本協会「2021 年秋のシーズンの感染対策について」公表 ・ 2 年目となる新型コロナウイルスの対応、各地区で工夫を凝らしシーズン開催 ・ IFAF 第 11 回フラグフットボール世界選手権、日本女子 6 位入賞、同男子 11 位 ・ 新たに社会人選手権となった第 75 回ライスボウル、富士通が初代王者に
こ の 年 の 活 動 （ 競 技 年 度）	<p>前年 2020 年 2 月頃から我が国で感染が拡大した新型コロナウイルスは、この年も波はありながら 1 年間流行し、スポーツ界全体に大きな影響を与えた。前年開催予定を 1 年延期した東京オリンピック・パラリンピックは開催されたが、ほぼ全試合が無観客試合となった。フットボール活動も、前年同様、春季試合はほぼ中止、秋季試合はリーグ内を分割したブロック形式での開催、無観客試合での実施など大きな影響を受けた。しかし各組織・チームの努力・工夫によりそれぞれの選手権試合を開催、チャンピオンを決定し永い歴史をつないだ。またシーズン最後を飾るライスボウルはこの年から社会人選手権となり、限定した条件の下で有観客試合として開催、ライスボウル 3 期目の最初の年に富士通が王者となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関西、関東の大学リーグは、新型コロナの影響でリーグ内をブロックに分け、その 1 位同士で優勝校、リーグ順位を決める等の形式をとった。関東の Top リーグでは、法大が早大を、関西では関学が立命館大を下し、それぞれリーグ 1 位となった。甲子園ボウル出場を決める東日本代表決定戦は、法大が東北大を下し 9 年ぶり 18 回目の出場を果たした。西日本選手権は関学が立命館大との接戦を制し、6 年連続 55 回目の甲子園出場を決めた。関学はこれで西日本選手権決勝で立命館大に 5 連勝した。 ● 前年は新型コロナの影響で、東西大学王座決定戦として開催された甲子園ボウルは、第 76 回のこの年は 2 年ぶりに全日本大学選手権として晴天の甲子園球場で開催、関学、法大の 9 年ぶり 8 度目の対決となった。6 年連続 55 回目出場の関学が法大を終始リードし、4 年連続 32 回目の優勝を果たした。 ● ここ 2 年近くの新型コロナウイルスの世界的な流行により、前年 3 月以降、国内での国際試合の開催、海外開催の国際試合の日本からの派遣が中断されていたが、12 月にイスラエルで IFAF 主催第 11 回フラグフットボール世界選手権が開催されることとなり日本チームが参加、女子チームは参加 18 チームの 6 位入賞を遂げた。男子チームは、参加 21 チームの 11 位であった。 ● 横浜スタジアムで開催された第 52 回高校選手権クリスマスボウルは、同点の 4Q 残り 1 秒からの FG を立命館宇治高が成功させ劇的勝利、連続優勝を目指す佼成学園高を破り 2 度目の優勝を遂げた。クリスマスボウル、前年に続く試合最後のプレーで勝負が決まる展開とだった。 ● 1948 年第 1 回大会から第 36 回まで（第 1 期）東西学生選抜戦として、1984 年第 37 回大会から第 74 回まで（第 2 期）の 38 回、学生チャンピオンと社会人チャンピオンによる日本選手権として、合計 74 年間開催されてきたライスボウルは、この年の第 75 回大会から第 3 期として社会人 X リーグの決勝戦として開催された。ほぼ 2 年になる新型コロナウイルスは、まだ治まっていなかったが、各対策を施し人数限定の有観客試合として開催することができ 14,610 名の観客で開催された。試合は過去 5 回出場の富士通が過去 6 回出場のパナソニックを接戦で破り、新たなライスボウル第 3 期の初代チャンピオン、ライスボウル 6 回目の優勝を飾った。 	

新型コロナ対応3年目。しかし活動、以前にやや戻る。9年ぶりの国内開催の日本代表国際試合

社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月24日 ・ 7月8日 ・ 9月8日 ・ 9月22日 ・ 12月17日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロシア、ウクライナに侵攻。25日ウクライナ首都キーウへ迫る ・ 安倍晋三元首相、演説中に狙撃され死亡 ・ イギリス・英連邦王国女王エリザベス2世崩御 ・ 円安が進み、日本政府24年ぶりの為替介入（10月20日：1\$ = 150円台に） ・ 中国政府、これまでの「ゼロコロナ政策」を大幅緩和へ
フット ボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月～5月 ・ 7月13日 ・ 12月18日 ・ 翌年1月3日 ・ 翌年1月22日 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワールドゲームズ参加のフラッグ女子日本代表を支援するクラウドファンディング実施 ・ ワールドゲームズ、フラッグフットボール競技で女子日本代表5位 ・ 第77回甲子園ボウルで、関学が早大を破り33回目の優勝、5連覇を達成 ・ 全日本選手権となって2回目の第76回ライスボウル、富士通が2連覇 ・ 27年ぶりのIVYリーグとの対戦、Dream Bowl。IVYリーグ、接戦で勝利
この年の活動 (競技年度)	<p>2020年1月から我が国で感染が拡大した新型コロナウイルスは、その後も終息せず、3シーズン目のこの年も7月から8月にかけて感染第7波となり競技活動に大きな影響を与えた。しかし9月頃から行動制限は無くなり、以前通りのリーグ戦の形態で開催された地区が多かった。また無観客から条件を付けながらも有観客とした試合が多かった。ただし、新型コロナ発生前に開催されていたパールボウル、神戸ボウル等の多くのボウルゲーム、交流戦の開催は、この感染3年目も依然、開催できなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 7月米バーミンガムで開催されるワールドゲームズに出場権のあるフラッグ女子日本代表の参加を支援するため、「アメフト界がひとつになって、日本のアメフトの未来をつくろう」のプロジェクト名の下、クラウドファンディングを実施。多くの支援者を集め、目標を達成、ワールドゲームズに参加。8カ国の参加で開催されたワールドゲームズでは、女子日本代表は5位となった。 ● 関東の大学TOPリーグは、前年同様10校を2ブロックに分ける方式で開催した。ただし後半のリーグ戦を前半の両ブロックの上位校と下位校のグループに分けて対戦する新方式を採用、早大が全勝で優勝を遂げた。関西学生リーグはこの年より従来通りの8大学総当たりのリーグ戦を実施、関学が、躍進で注目された関大、立命館大との接戦を制し、5年連続の優勝を遂げた。 ● 学生選手権の決勝となる第77回甲子園ボウルは、これまでの開催形態が変更され、全国8地区からの代表校は各地区1校となった。そのため、2回戦で東海代表は北海道-東北戦の勝者と対戦した。優勝決定戦の第77回甲子園ボウルは、関学と早大の対戦となり、後半関学が引き離し、34-17で勝利、33回目の優勝、2020年の東西大学王座決定戦優勝を含み2度目の5連覇を遂げた。 ● 社会人No1を決める試合となって2年目の第76回ライスボウルは、8チームによるライスボウルトーナメントを勝ち抜いた富士通とパナソニックの前年同様の対戦となった。パナソニックは試合開始後2TDを挙げ先行したが、富士通が3Q終了間際に逆転、29-21で勝利、2年連続7回目の優勝を果たした。 ● 第28回女子タッチフットボール全日本王座決定戦「さくらボウル」は成城大BROOKSが社会人代表の虹翔∞を19-13で破り初出場初優勝を遂げた。関東代表大学チームとして初めての優勝であった。 ● 高校は、関西地区の決勝で大産大付高が箕面自由学園を下し優勝、11年ぶり12回目のクリスマスボウル出場となった。関東地区では、佼成学園高が慶応義塾高を下し7年連続優勝。クリスマスボウルは佼成学園高が大産大付高を4Qに逆転、30-27で勝利、2年振り5回目の全国制覇を遂げた。 ● 社会人協会は、2023年1月22日に日米国際親善試合「JAPAN U.S. DREAM BOWL」(全日本選抜-IVYリーグ選抜)を開催した。日本チームの編成は「日本で競技活動をするプレーヤー」とし、外国籍のXリーグ、大学チーム所属の選手も加わった。2020東京五輪で新しく建設された国立競技場のフットボール初使用のこの試合は、全日本選抜が最初の攻撃シリーズをFGで先制したが、3度の逆転の展開の末、IVYリーグ選抜が24-20で勝利した。1996年から27年ぶりのIVYリーグとの対戦であったが、この間の日本チームの実力向上が見られた。国内開催の代表レベルの国際試合は、2014年開催の「ジャーマン・ジャパン・ボウルII」から9年目であった。 	



制作・著作 : 公益社団法人 日本アメリカンフットボール協会

Ver. 3.0